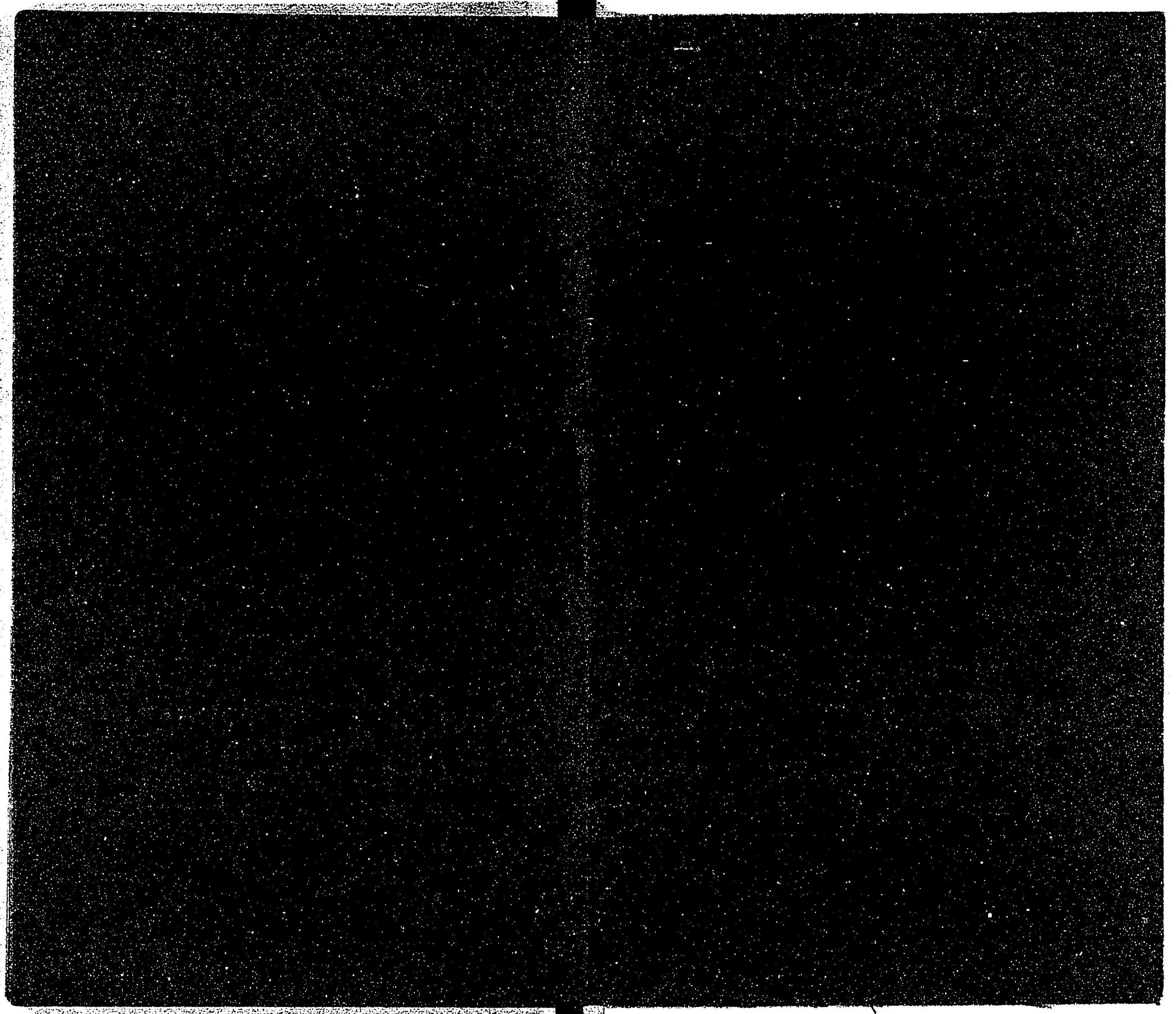
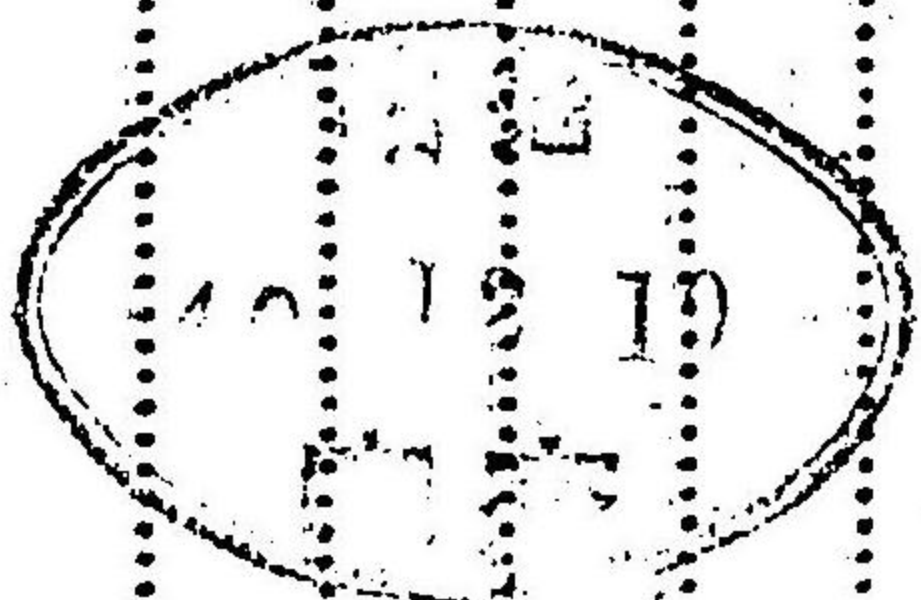


琴譜歌獨卷集 全



目次

○緒言	一頁
○蕤萐の彈さ方	四頁
○日本海大海戰	十頁
○旅順開城	十頁
○遼陽占領	十頁
○奉天附近の會戰	十八頁
○常陸丸	二十頁
○國船	二十二頁
○松嶽	二十三頁



○梅が枝	二十四
○春の調	二十六
○名所盡	二十七
○老蘇の森	二十九
○群鳥	三十
○狂女	三十一
○薄が本	三十三
○武藏野	三十四
○華の香	三十五
○墨繪	三十七
○王照君	三十九

○赤壁	四十一
○蠨螋	四十一
○梢の華	四十三
○増の草	四十四
○潯陽江	四十四
○城山	四十八
○登灣入	五十
○僧月照	五十三
○雪の曙	五十五
○兒島高德	五十六
○高德題櫻	五十八

- 遠矢……………六十
- 物狂ひ……………六十四
- 鴛の夢……………六十五
- 錦の御旗……………六十七
- 小督……………七十
- 那須與市……………七十四
- 忠度……………七十六
- 川中島……………七十八
- 虎狩り……………八十一
- 本能寺……………八十四
- 千早振……………八十八

- 王政復古……………八十九
- 石童丸……………九十二
- 俊基朝臣東下り……………九十五
- 菅公……………九十九
- 勿來關……………百二
- 威海衛……………百二
- 夜討曾我……………百五
- 那須與市……………百六
- 實盛……………百八
- 重盛……………百十一
- 阿新丸……………百十二

○初段.....百十二

○二段.....百十五

○三段.....百十七

○四段.....百二十

○楠公.....百二十三

○初段.....百二十三

○二段.....百二十七

○木崎原合戦.....百三十

○初段.....百三十

○二段.....百三十五

○三段.....百四十

○俊寛.....百四十五

○初段.....百四十五

○二段.....百四十八

○四條畷.....百五十

○初段.....百五十

○二段.....百五十一

○三段.....百五十二

○扇の的.....百五十三

○初段.....百五十三

○二段.....百五十七

○小松の操.....百六十一

- 初段.....百六十一
- 二段.....百六十二
- 三段.....百六十四
- 吉野.....百六十七
- 初段.....百六十七
- 二段.....百七十
- 鎌倉の宮.....百七十三
- 初段.....百七十三
- 二段.....百七十六
- 島原合戦.....百七十九
- 初段.....百七十九

- 二段.....百八十九
- 三段.....百九十八
- 小敦盛.....二百七
- 初段.....二百七
- 二段.....二百十三
- 粟津の露.....二百二十
- 初段.....二百二十
- 二段.....二百二十
- 三段.....二百二十七
- 形見の櫻.....二百三十三
- 初段.....二百三十三

○二段……………二百五十七

○三段……………二百四十二

○譽の駒……………二百四十六

○初段……………二百四十六

○二段……………二百五十二

○三段……………二百五十四

目次終

琵琶歌獨吟集

琵琶法師 編

○緒言

頃日専ら流行する所の琵琶歌なるものは、古來より世に持てはやされしものなれども、これを琵琶に合せて吟唱せんには、或ひは其の節の合ひがたきものもあるべし。又絶対に吟唱しがたきものもあるべし。即ち琵琶歌としての價值なきものなり。己れは少壯のときより、斯道の門に遊びて、琵琶の節は勿論其の歌の句調に就いて聊か研鑽するところなきにあらず。然るに頃日、親友の某、一日坊間に流布する所の琵琶歌を輯めたる小冊子數冊を携へ來たりて、己れに示し、且つ曰く、斯くのごとく數冊の琵琶歌に

就いて、其の同一のものを對照するに、節附の異なるは、何に依りて然るや、例へば甲書に於いて、大聲これを吟唱すべしと示せるものも、乙書に於いては普通の高聲を以てすべしとせられたるが如きは、其の意の在る所を知ることも能はずと、乃ち其の書を取て、これを閲するに、某氏の説のごとく然るものあり、抑も琵琶なるものは、初め唐土より傳來したるものにして、其の當時にありては、左まで流行せざりしが、武門の漸く盛なるに及び、陣中の徒然を慰め、且つ士氣を鼓舞せんがために、將士の琵琶法師を召して、彈奏せしめたるより、漸次隆盛を來たしたるものゝ如し、是は即ち俗に所謂平家と稱するものにして、現今の薩摩琵琶にあらざるなり、降つて筑前琵琶なるもの世に出づるあり、又薩摩琵琶の持てはやさるゝに至れるなり、多少小異の點なきにあらずといへども、皆平家琵琶より出てしものなり、

り、薩摩琵琶といひ、筑前琵琶と云ふも、是等の國に於いて、専ら流行せしより起りし名稱に過ぎざるものならんと思はるゝなり、而して其の節のごときは、多少相異の點ありといへども、大體に於いては、殆ど一致したるものといふべし、然るに今坊間に流布する所のものにして、其の節に相違の點あるは、誠に不審に堪へざるものなり、然れども、思ふにこれが節を附けたる人々は、必ずや思ふ所ありて然るならんと思はるゝなり、其の可否のごときは、これを言ふに忍びずとて、某氏に告げたるに、大に了得せられたるものゝごとし、仍ほ己れに完全なる節を附けて、公にすべしと迫り、且つ自から其の勞を取らんことを望まれたり、依て舊記を取出し、こゝに一編の冊子となすに至れるなり、

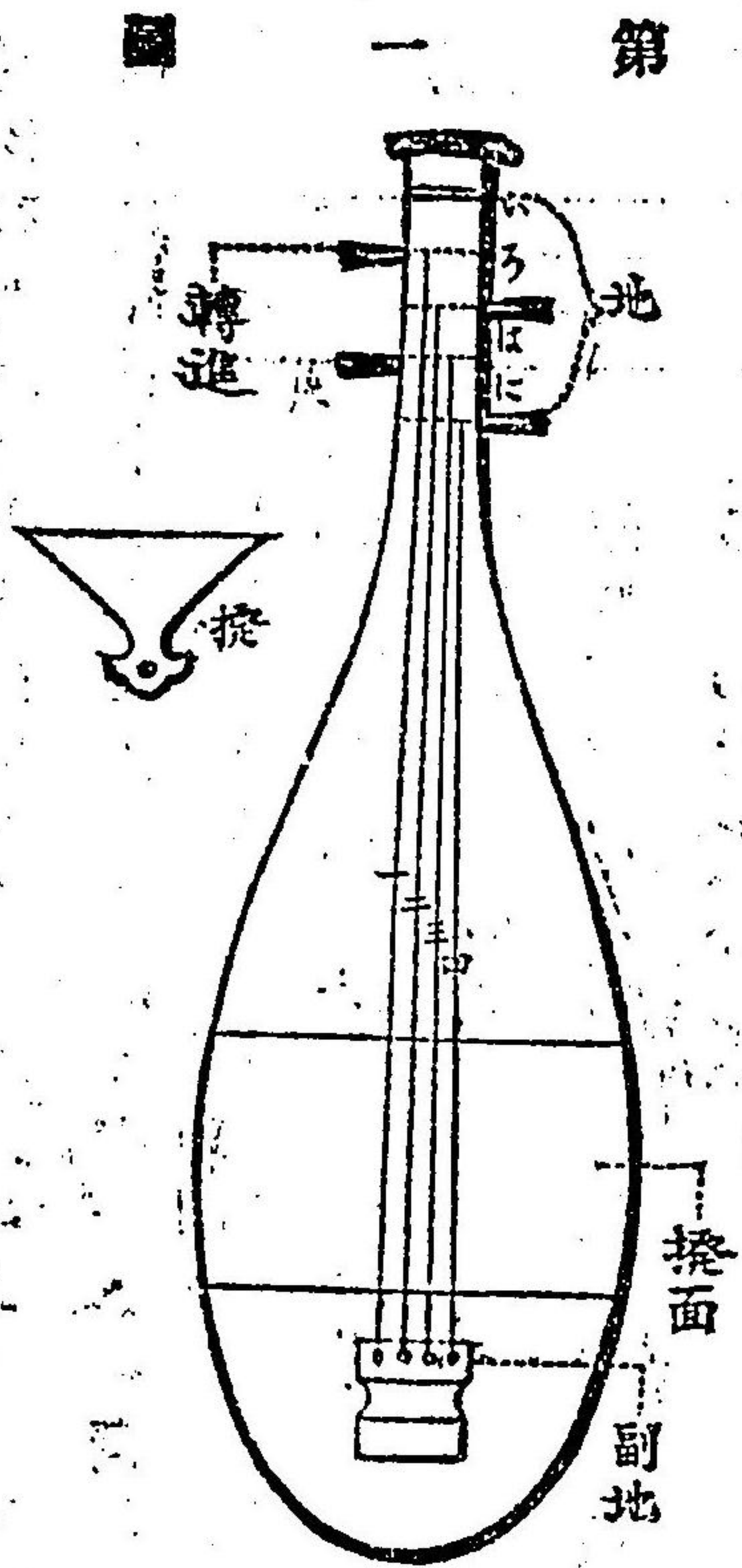
文中○を附せしは太甲、即ち高音を以てし、△は中音、◎は崩れ、即ち神速に

吟唱すべき箇所、其の符號なき部分は地音として、普通の語音を以て聽るべきを示したるものなり。又「」を附けし所あり、或る一曲の最初より、初めの「までは、稍低き地音を用ゆべく、それより、符號に従つて吟唱すすべきことを示したるものなり。又、の印は、吟替りを指示したるものにして、これより調を變ずるものとす。之を要するに、音調の長短のごとき、殆ど一定せずといふも不可なければ、能く文意を味ふて、宜しきに適ふべし。

○琵琶の弾き方

琵琶を彈奏せんとするには、先づ俗に所謂調子を合すべし。而して其の調子の如きは、如何なる程度に於いて合すや、是は人々の任意に依りて、多少の差異あるべきは勿論なりと雖も、これを要するに左の如くして可なり。

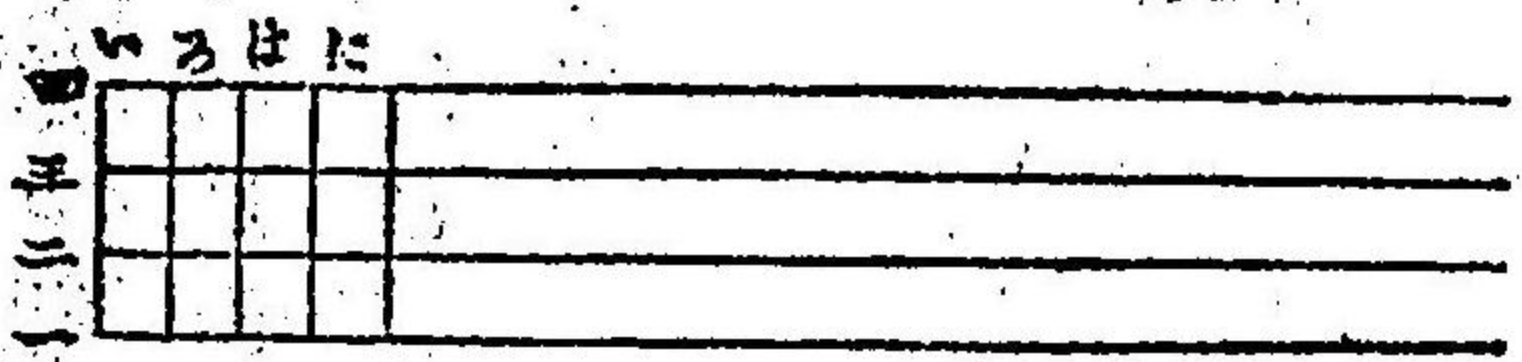
- (い) 一絃と三絃は俱に同音の調子とす
- (ろ) 二絃は、三絃より少しく低くすべし。
- (は) 四絃は、三絃よりも上々べし。而して二絃と三絃との中間音となすものとす。



抑も此の調子なるものは、これを聽く人の如何に由りて知ることとを得るものにして、到底これを録にすること能はざるは、識者を待たずして知る

第二

圖

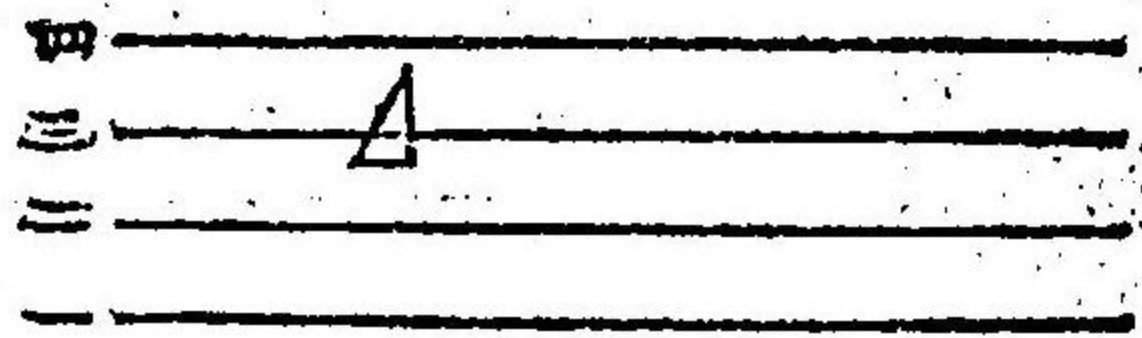


べきなり。然れども茲に初學者のために、其の標準ともなるべきものを擧げんに、琵琶歌をうたふ其の聲の調子は、琵琶の一の絃の調子に依りて、相上下するものなり。故に第一の絃の調子にして高きときは、これを謠ふべき聲調も亦自から高からざるを得ざるものたるや勿論なり。

茲に掲げたる所の四條の横線は、琵琶の四絃をあらはしたるものにして、『いろはに』は其の地にして指にて押ゆる部分、『一二三四』は其の四絃なり。これを向ふに向けて横に立つるときは、上より一三四の順序となるべし。即ち『一』は上位に、順次下りて、四は下位にあるものとなりて、地の所を左手にて、持てるときの如くなるものなり。

第三

圖



第四

圖

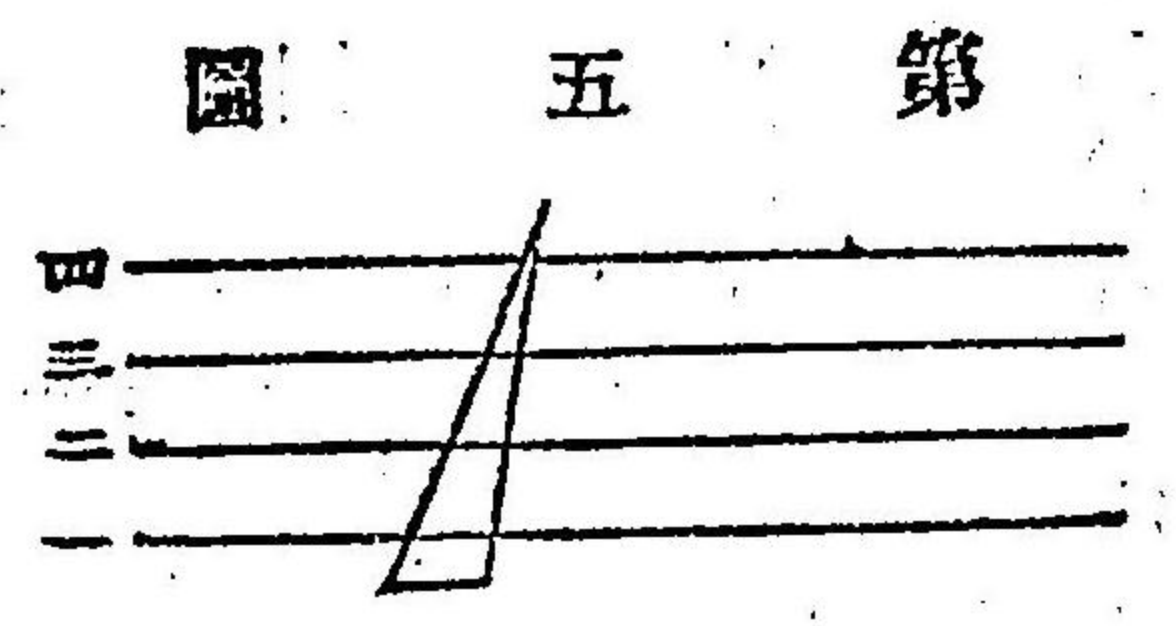


琵琶を彈ずるに、打撥、掛撥あり、打撥とは撥にて、絃を打つがごとくに彈くものにして、『チャン』と云ふ音を發すべし。茲に擧げたるものは、第二絃に於ける打撥の一例なり。

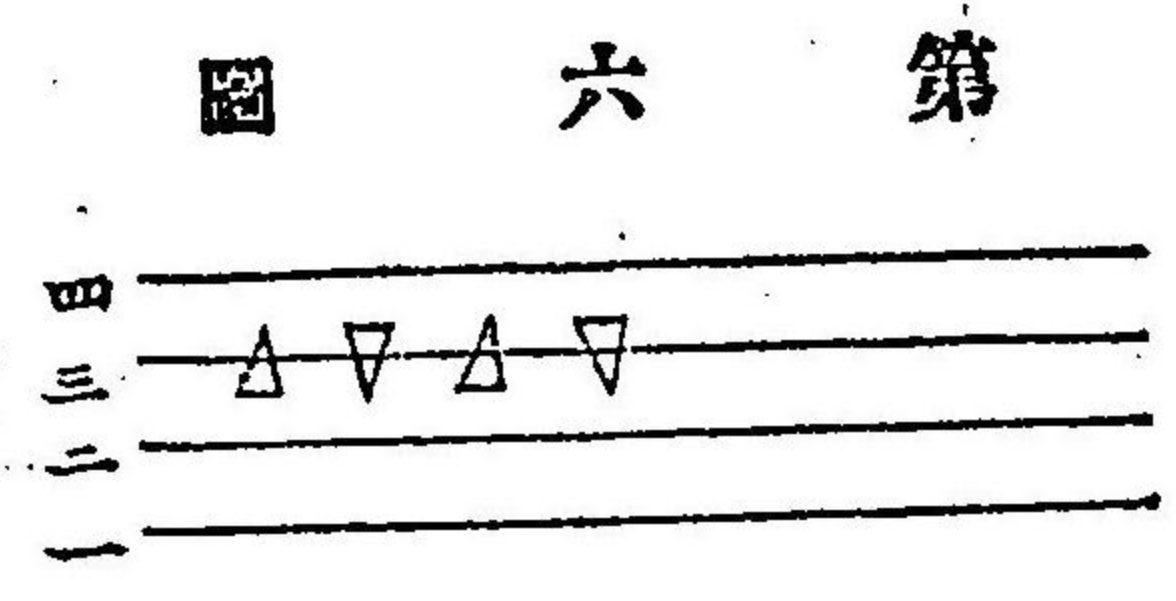
掛撥とは、撥を絃に掛けて彈ずるものにして、『ギン』と響くものとす。

以上掲ぐるところの二種の法、即ち打撥掛撥に代用せる符號を以て、以下これが説明をなすものなれば、▽は打撥、△は掛撥なることを記應せらるべし。

第五圖に掲げたるものは、第一絃より第四絃に至るまで、一度に打撥を行ひたるものにして、其の用所のごとき、左まで多からず、又第六圖は、初めに



第五圖

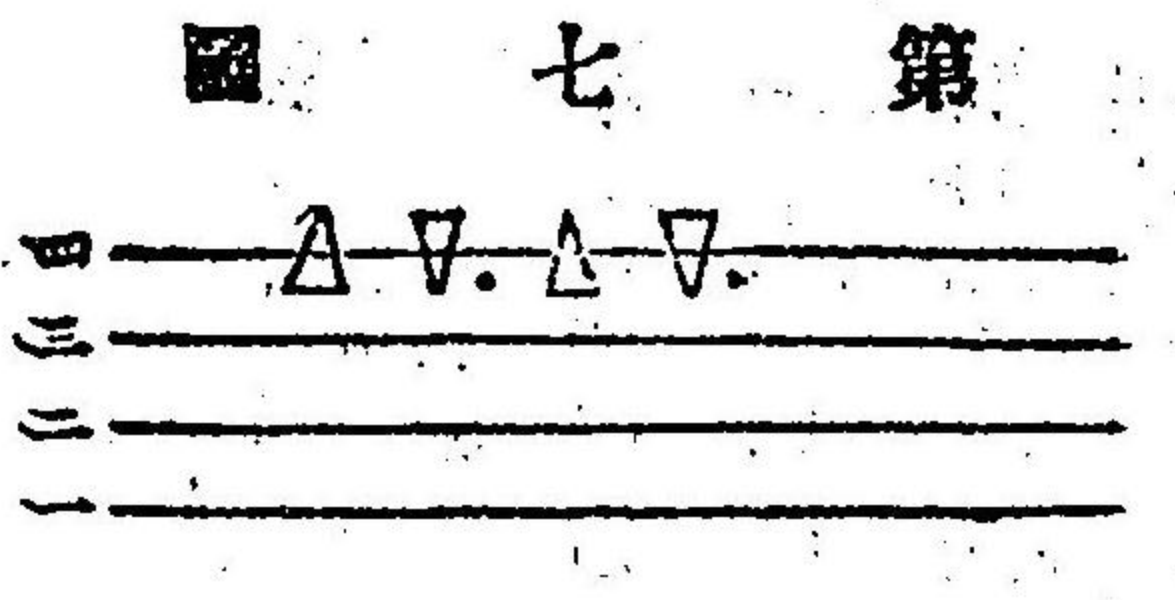


第六圖

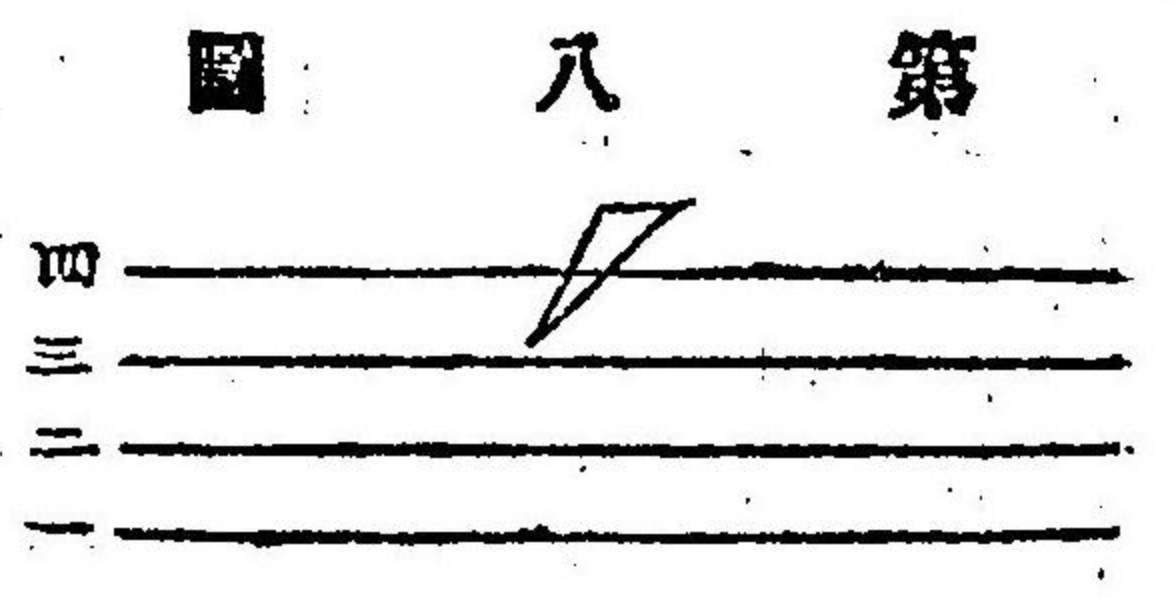
打撥次に掛撥それより又打撥掛撥と順次これを繰返すべきことを示したるものにして、『チャン』『打撥』『ギン』『掛撥』と音のひびくものなり。

第七圖に掲げたるものは第六圖のものと同一の調子なるが如しといへども其の全く異にして、『チャラ』『チャラ』とひびくべし而して前

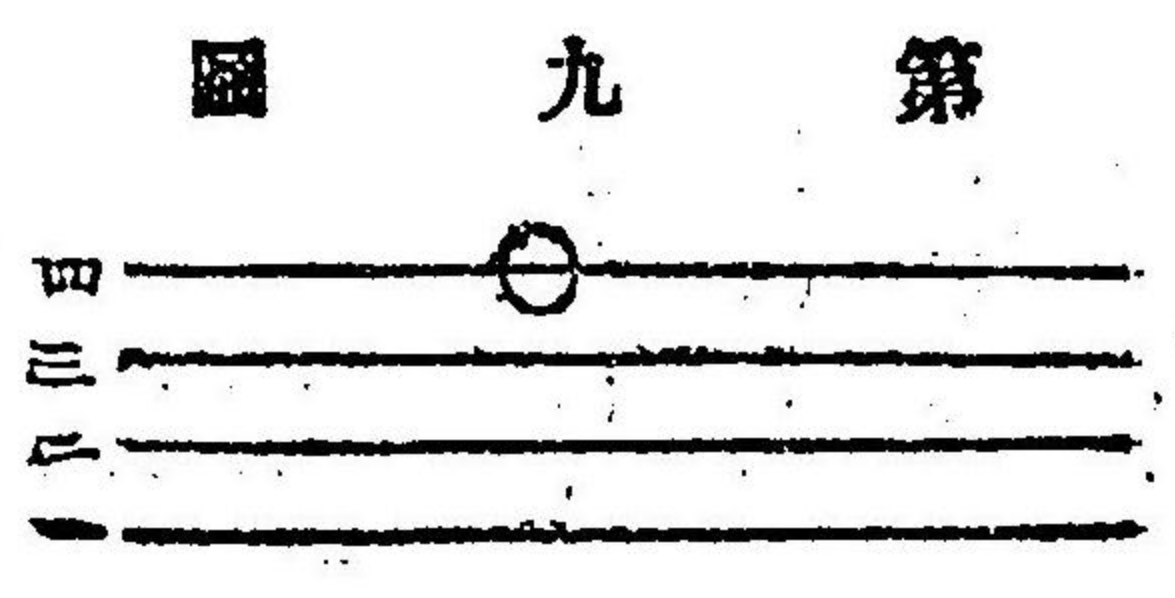
の『チャン、ギン』よりは稍早く撥を運ばしむるものとす。第八圖に示したるものはこれを稱して『シツチャン』といふ是は撥にて一回琵琶の腹板を打ちそれより直ちに第四の絃に掛撥を加ふるところのものなり。



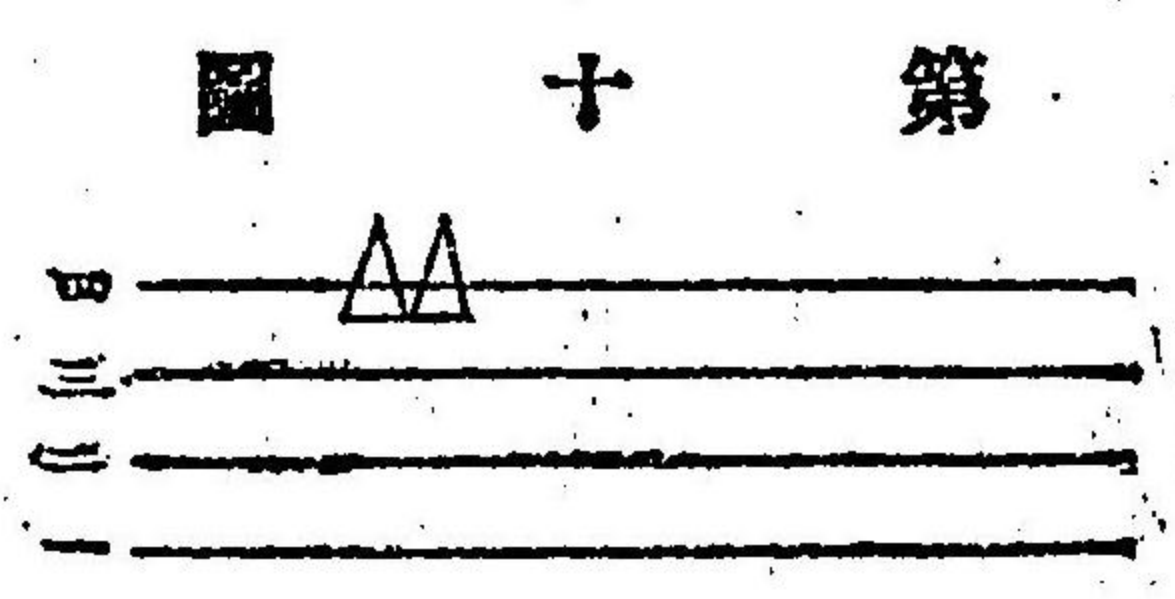
第七圖



第八圖



第九圖



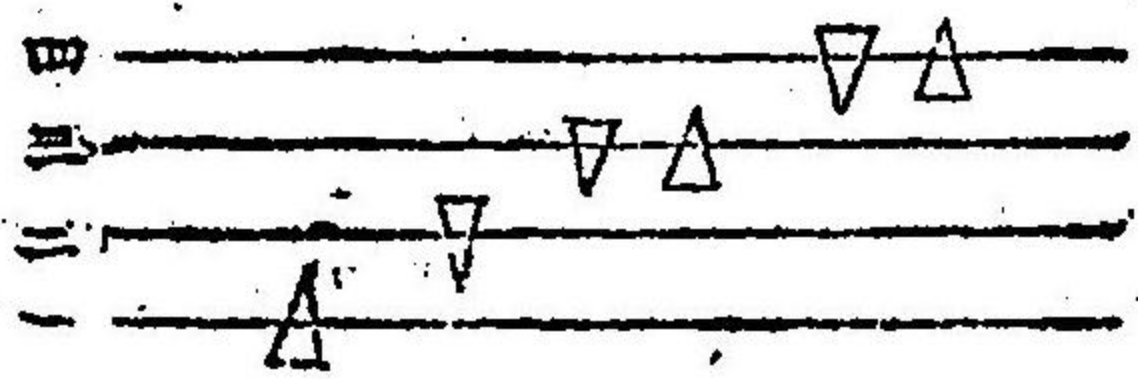
第十圖

の中其の薬指にて第四の絃を軽く打つことを示したるものなり。

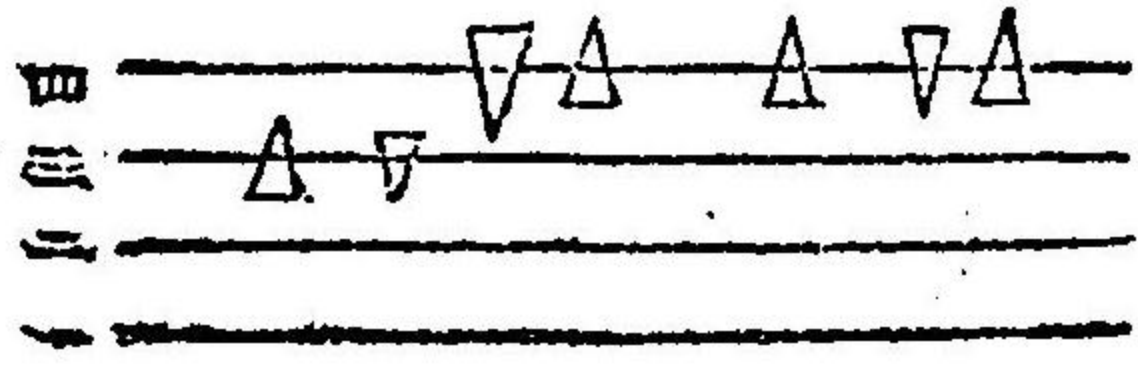
第十圖に示したるものは打撥二度を連続して其の間少しも休止することなく弾じ其の終るや、『ヤン』と唱ふるだけの間を隔つることをあらはしたるものなり。

第九圖に示したるものは通常これを『リ』と唱ふるものにして撥にて弾ずるものにあらず左手にて琵琶の上部を支へつゝある指

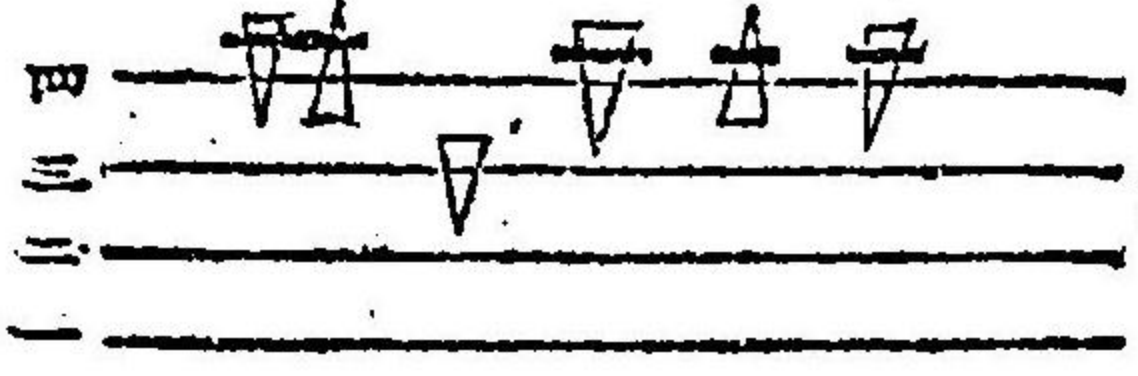
第十圖



第二十圖



第三十圖



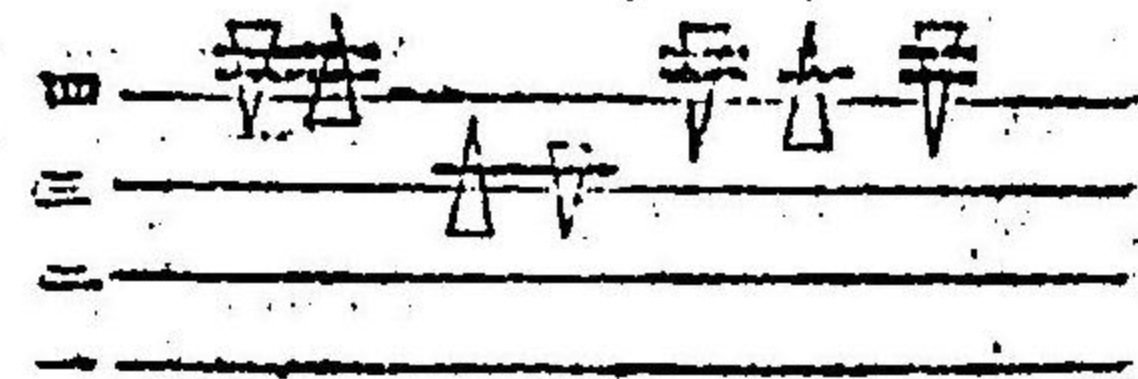
第十一圖に示したるものは、いづれの絃も、左手の指にて押おさゆることなく、唯弾たまずることの場合のみを舉示したるものなり。

第十二圖に示したるものは、第三絃第四絃の各一部分をば、同時に一度に押おさへ、これと共に他の一部

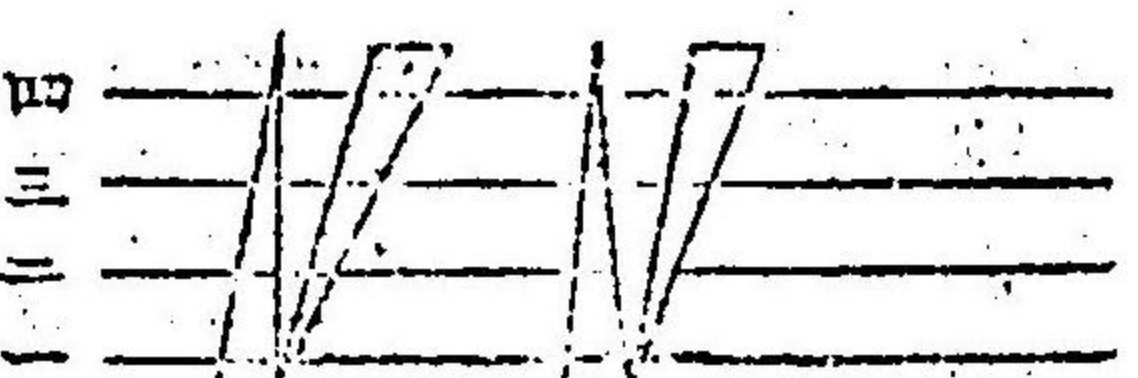
分を他の指にて押ゆる場合を示したるものなり。
第十三圖は、打撥と排撥とに拘かはらず、左手の指にて、絃の一部分を押へて弾ずることを表示したるものなり。

第十四圖は、第三絃と第四絃との一部分を左手の指にて押へて弾ずる場

第四十圖



第五十圖



第六十圖



合をあらはせり。

第十五圖に例示したるは、第一絃より第四絃まで、一度に打撥と排撥とを表示したるものなり。

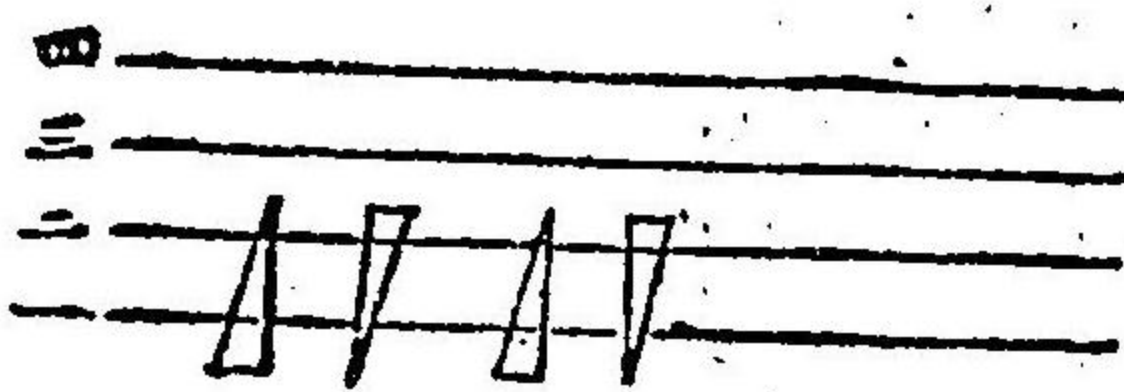
第十六圖に示したるものは、第一絃より第四絃までに、同時に打撥を施し、且つ其の間に第四絃に排

撥のみを行ひしことを表示したり。

第十七圖は、第一絃より第二絃まで同時に打撥と排撥とを連続して行ひしことを表示したり。

第十八圖に示したるがときは、第一絃より第四絃まで、同時に打撥を行

第七十圖



第八十圖



ひ、且つ第二絃は、これを押へたるまゝに彈ずることと表示したり。若し其の點(此圖の第二絃にある)が第三絃にあることを表示したるときは、第三絃を押ゆることを示すなり。其の他之に準ず。

琵琶は、我邦に於ける三味線のごとく、其の胴を右の膝に載せ、其の上部を右腕に抱へるがごとく、軽く押へ、右手に撥を持ち、左手は、地(前圖参照)の部分に當て、右手にて彈じつゝ、左手の指にて、其の他の或る部分を押へ又は押へずして彈ずるものなり。唯三味線と相異なるものは、地の押ゆる場所の一定したるに在るのみ。

本書に掲げたる符號に依りて、其の音符の解説をなさんと試みしが、勢或る一例を示さざるを得ず。斯くの如くするときには、本書一冊を以てするも尙ほ且つ足らざるを覺ゆ。故に僅に其の彈き方の一端を掲げ、兼ねて聲調の如何を知得せしめ、聊か獨吟者の参照に供するのみ。

○日本海大海戰

強敵露西亞が緊ぎたる、一縷の望をかけたらし「三十餘隻の大艦隊」我が關門の對馬なる、東水道打ち隔えて、目させる。先は浦潮斯德端なく、こゝに大海戰ぞ開かる。我が艦隊の哨艦は、和泉艦とて名もたかく、遙に出て、敵艦の動靜如何にと見てありし、折しもはるか天涯に立ちのぼりたる煤煙は、スハッソ敵艦來たりたれ、遙に避けて、敵艦をやり過ごしては、これと共

に同じき距離を保ちつゝ、我が關門の對馬なる東水道へと誘致せり。和泉は夙に此の事を、我が主力艦隊に電信し、首尾よく日本海へと誘なひたり。主力艦隊これを知り、作戰計畫ごとく、圖に中りたる將卒の肉は躍りて骨動き、三面よりぞ敵艦をつゝみて撃出す。大砲は轟々ひびき、海原にあがる白煙水煙、敵艦大に狼狽し、逃ぐるに道なく、應戦し續けて撃ち出す。砲丸はあはれつたなく、海底にしづみし様よ、そのあはれさに、我れは思ひのまゝに行動し、忽ち數隻を撃沈め、或ひは火災を起さしめ、隱岐の西なる竹島の邊にさまよふ艦隊の戦闘巡洋艦逐艦其の數五隻を捕獲なし、頼みなたのみし敵艦を殆ど撃滅なしたるは、實に勇ましことなりき。朝日にかとやく軍艦旗、今日にはひとしほ輝きて、日本海にぞひるがへる。頃は明治三十八年五月の末の七日なり、三日にわたりしことゝかや。

○旅順開城

時明らかく治れる、我が日の本の國運を危殆ならしめんとしたる暴戻倭慢の露西亞國、金城湯池と頼みたる旅順口に籠り居て、數月の攻圍に堪へたれど、其の一月の一日に、降旗をかゝげて、我が軍に「降服なせるは是非もなし」抑も旅順の地は、日清戰役の結果によりて、清國より我れに割讓したる土地なるに、恫喝虚偽を敢いてして、少しも憚るところなき露世亞は、獨逸と佛蘭西二ヶ國を誘ひなして、我國に陽に忠言陰に姦謀めぐらしつゝ、も還さしめ、其のまだ舌の根の乾かざるに、名を租借にかゝりて奪ひ取り、經營數年、幾億萬圓の巨資を投じ、金城鐵壁を築造なし、二十餘萬噸の艦隊を浮べ、威風堂々、清韓を壓し、我れを壓迫し、世界に響へる滿洲撤兵をなさ

るのみか、ますます軍隊を増遣し、恫喝の下に我れを屈服せしめんとなしたりき。臥薪嘗膽、こゝに十年、怨みかさなる露西亞國、いて磨て懲らせと公憤を發したりける大日本國民、いかで打撃を加へざる。畏多くも宣戰の大詔勅は煥發し、こゝに干戈を交へしは、明治三十有七年、二月初めの八日なり。我が艦隊は、十數回の攻撃をなしけるが、敵艦隊は損傷し、行動の自由を失ひける。こゝに東郷大將は、遼東半島を封鎖し、乃木大將は、數萬の鎗銃を率ゐて、旅順口をば攻圍し、蟻のはひ出づる道さへ閉ぢぬれば、敵將「ステツセル」は、死力を盡して防禦なし、「クロバトキン」の大軍も、しばし南下を企て、其のたびごと破れたる、さまこそ實にやあはれなり。旅順の死命を制すて、ふ、標高二百三の土地、我が精銳なる攻圍軍に攻略せられ、こゝに引き上げたたりける攻城砲、旅順の市街を見下して、休む隙なく打ちければ、旅

順市街は、彈の雨、敵も、はやかなはずとや悟りけん、遂に揚げたる其の白旗、仁と高義に富みたりし、我が軍指揮の乃木大將、彼が降服をさし許し、十年の昔、一たび我が手に取りし旅順口、こゝに再びひるがへる光まばゆき日章旗、東洋平和の主人公、支那朝鮮も、ともく、に我が日の本の國光を仰げる時になり、にけり、仰げるときになり、にけり。

○遼陽占領

敵の陸軍總大將「クロバトキン」兵器彈藥の滿てるに及び、大言壯語しつる様、やがて日本軍と會戦し、「一舉旅順口を救はんといきまきたり」半歳の久しき遼陽に立籠り、有らゆる防禦工事を施して、作戰計畫に怠りなかりけるが、我が軍が三方より攻めたりしに、前軍いつし敗れはて、死力を盡して

防○守○せ○る○首○山○堡○も○我○が○砲○彈○に○居○た○ま○ら○ず○右○往○左○往○に○逃○げ○ま○よ○ひ○兵○器○
彈○藥○投○げ○捨○て○奉○天○指○し○て○退○却○し○見○苦○し○き○敗○軍○を○な○し○た○る○は○實○に○こ○
ち○よ○き○次○第○な○り○さ○る○を○「ク○ロ○バ○ト○キ○ン」○世○に○言○ひ○觸○ら○し○て○豫○定○の○退○却○な○り
と○な○し○敗○走○せ○し○を○言○は○さ○る○は○其○の○苦○心○の○跡○も○察○せ○ら○れ○て○あ○は○れ○と○云○ふ
も○恐○なり○

○奉天附近の會戰

遼陽に敗れ沙河に撃たれし敵の大將「クロバトキン」奉天附近に主力を集
め専ら防禦に餘念なし。深謀遠慮の滿州總司令官陸軍大將大山巖これに
従ふ兒玉將軍これまで敵を敗りしが更に大敗を被らしめんと謀り野津
乃木與川村の大將等こゝより彼處より奉天さして進撃し微塵に碎かん

計○慮○な○り○さ○る○程○に○「ク○ロ○バ○ト○キ○ン」○は○我○が○主○力○が○東○に○あ○る○と○思○ひ○な○し○手○兵
を○や○つ○て○戰○ひ○け○る○が○我○が○一○軍○は○奉○天○の○西○北○さ○し○て○進○出○し○潮○の○湧○く○が○ど
と○く○に○攻○め○寄○せ○た○る○に○其○の○驚○き○言○は○ん○方○な○く○も○は○や○勝○算○覺○束○な○し○と○思
ひ○け○ん○は○や○傳○へ○た○る○退○却○の○命○令○に○浮○足○立○ち○し○露○西○亞○軍○退○路○を○斷○た○れ○て
狼○狽○し○萬○を○も○賒○ゆる○軍○隊○を○俘○虜○と○な○す○を○も○願○り○み○ず○鐵○嶺○さ○し○て○混○亂○の
姿○と○い○め○て○敗○走○し○た○り○我○軍○い○か○て○追○撃○せ○さ○る○べ○き○新○手○を○か○へ○て○追○撃○す
息○を○も○つ○が○せ○ず○撃○ち○し○か○ば○豫○備○に○築○き○し○鐵○嶺○の○堅○牢○無○比○の○砲○臺○も○遂○に
用○ゆ○る○に○暇○な○く○四○十○餘○萬○の○露○西○亞○軍○み○ぐる○し○く○も○敗○退○し○開○原○昌○圖○を○こ
ゝろ○ざ○し○唯○身○を○以○て○北○ぐる○の○み○世○界○に○名○あ○る○大○戰○も○斯○く○ま○て○脆○く○敗○れ
し○も○の○な○し○と○か○や○こ○の○事○の○世○界○に○つ○た○は○る○や○我○が○精○銳○の○軍○隊○を○誰○と○て
ほ○め○ぬ○も○の○は○な○し○

○常陸丸

征露の軍やうくに進みくして南山の「險阻も既に打ちやぶり」音に聞えし要害の旅順口をも閉塞せられ驚の棲むてう満州も君が御稜威の旗風に今は靡かぬ草もなし心筑紫の島はなれ玄界灘のたゞ中に吹く朝風に日の丸の旗ひるがへす常陸丸土佐も進みて續きゆく船路はなれて白浪よるべに如何に遠からず何ぞ荒ぶるあら潮の逆巻く中に黒煙は只一筋に走り来て我れを取り巻く敵の船とは何事と問ふ間もなく亂射亂撃雨あられ進み遁れんひまもなく千里を走る猛獸も水に入りては如何にせん万里を翔ける大鵬も水には翼折れぬべし心ばかりは早れども運送船の悲しさは進退こゝに極まりて詮方なくも敵艦に任せはてしは是非も

なし佐渡は如何と眺むれば霧にまかれてわからねど同じやうなる運の末輪送指揮官須知中佐是れまでなりとや思ひけん大久保少尉の捧けたる聯隊旗をば玉に轉じ都の方を伏しをがみ火をば放ちて焼きたれば各將士もそれくゝに貴重の品を焼きすてぬ此の有様を打ち見つゝ中佐は軍刀手に握り無念の涙はらくと落つるを袖に打ちはらひ萬歳となへて悠々と腹かき切つてぞうせにけるつれなる將校はじめとして下士卒に至るまで同じ枕に伏せにけり海に投じて死するあり敵はますく加ふれば甲板上にたちまちに屍の山を築きつゝ血潮を玄海の浪あざれて染みにける哀れなるかな常陸丸君萬歳の聲細く日は六月十五日夕日の浪にちらされてあやめもわけぬばかりなり「實に誠忠のつはものが十年の間朝夕に磨ききたへし日本刀精氣こもれる切味をためさん敵を前に

見○で○遣○恨○の○刃○いと○太○刀○も○報○い○ん○こ○とも○なく○なり○て○駒○の○蹄○に○滿○州○を○ふ○み○
に○じ○ら○ぬ○も○無○念○な○れ○う○ら○る○の○山○を○險○えて○あ○ら○ま○し○事○も○幻○か○思○へ○ば○無○念○
の○極○み○な○り○嗚○呼○一○聯○隊○の○我○が○兵○士○水○温○く○屍○は○消○え○し○か○ど○國○に○盡○せ○し○ま○
す○ら○を○の○清○き○そ○の○名○は○世○々○に○ひ○と○き○灘○に○立○つ○浪○の○絶○ゆ○る○時○な○く○仰○が○れ○
て○末○ま○て○遠○く○流○る○ら○ん○」

○國船

雲に縋ゆる高山も登らばちどか越えざらむ空を侵せる海原も渡らば「終
に渡るべし」我が秋津洲は苦さす東の沖の離れ島例へば海のため中に浮
べる船にさも似たり「二萬方里の船の中四千余萬の乗組あり船の主の指
揮を受け文明海に進み行く水主楫取多かるに我等も楫子の一人なり船

の行手は和田の原八重の汐路の遠ければ颶風逆巻く折もあり高浪荒る
し時もあり船手の業に習はずば颶高浪凌ぎ得て思ふ港に如何て着くべ
し

○松囃し

新玉の年立ち歸る春の日に君か齡は千歳ふる松囃しとて敷ならぬ我等
如きも許されて聞くも中々面白や「鼓は四海の波の音笛は龍王の吟ずる
聲名も高砂の尉と姥是ぞ盡させぬ妹脊とかや」神の御前の鈴鹿山惡魔を
拂らふのみならず弓矢の響残されし田村麿の御威勢は今が世迄も楫の
注連引き廻す井筒より汲めど盡させぬ若水は老を養ふ便りとかや「扱て
其の次は春の花都に聞えし三條の古鍛冶宗近は心正直にして神慮に叶

ひし名劍を「造り出して今は早大平の世となりて古き詩にも有るぞかし。長生殿の裏には春秋に富み不老門の前には日月遅しと申せし事も皆其心をば學ばれて、今彼の御代といふつげの取々なれや梓弓「矢竹心の一つだに、又兵の交りは互に顧みある中の酒宴なり」

○梅が枝

春は先づ咲く梅が枝に、谷の戸出づる鶯の聲も聞えて高瀬棹す、佐保の河原に繰り掛けて、最と珍しき岩躑躅「言はぬ思ひの色にしも、井手の山吹藤咲きて松にも花を春日野の緑榮ゆる若草に荒れたる駒も夏來れば御法の門に兼て後世を願はざる人の心が卯の花や、橘匂ふ五月雨に、山郭公音づれて、最と昔は戀衣重ねて袖や濡らすらん、蘭省の花の時、錦張の下塵

山の雨の夜に、草庵の中と賦し置けるされば詩の心にも同じ思ひの菅菰敷き忍びたる淋しさを何を種とや秋萩を植えて涼しき庭の萩薄も月も穂に出て、亂れ亂れしあだし野の草葉に置ける露の身の消ぬ便りを松虫の聲さへ今は霜枯れて、雪白妙に故郷を哀れと云へる人もなし、悔めしの浮世かな嗚呼恨めしの此世かな、諸行無常の春の花は、是生滅法の風に誘はれ、生滅々巳の秋の月は寂滅爲樂の雲に隠れ、僅に此世に留まらず、併し又浮身を捨てんとは思へども、流石又輪廻の浪の立つ間にも、其の面影が身に添ひて断るにきられぬ煩悩の、長き氣綱は結ばるゝ身こそ悲しけれ、彌陀頼む人は雨夜の星なれや、雲晴れぬども西へ行く、極樂は十萬億土と云ふなれど、又越しなんと聞く時は、爰を去ること遠からず「有明は唯其の儘の姿にて月の光は妙法の風に任かする身こそ安けれ」

○春の調

新玉の年の初の壽や、昔し替らず吹き揚ぐる、笛と鼓の音迄も、春の調べに
 聞えつゝ、玉簾ゆらく風立ちて、「舞の袂も長閑なり」神の井垣の老松も、枝を
 つらね葉を重ね、うべも太夫の影高く、祝を君にゆづり葉の常盤の色を類
 ひなき、軒端に咲ける梅が枝も、和泉式部のゆかりとや、ゆかしく香る窓の
 内文見る袖にうつりくる、好文木の名に恥ず、又高砂住の江の相に相生の
 時と姪、妹脊の契末長く、千代の例に引れつゝ、四方の海原浪なきて、吹きも
 静けき時津風、枝も鳴さぬ御代の春、千秋樂には民をなて、萬歳樂には命
 を延ぶる樂も、年毎の今日汲替はす盃に、君と御國を祝ふなる松麩子こそ
 目出度けれ

○名所盡

飛鳥川、淵は瀬となる世の中に、「何歎くらんむつかしや」いざ立出で、い鹿兒
 島の名所くを詠むれば、其の名も高き鶴丸の峰の麓は御城山、松には鶴
 が巢をかけて、谷の小川に龜遊ぶ、岩を傳へて法の聲、歸るも同じ道行の衆
 生濟度の彌陀の山、木々の梢も春來れば、色めき渡る華衣、重ねて袖を絞り
 つゝ、仰ぎし御代は久方の、光輝く御寺より、堰置く水の水上は、玉龍山と伏
 拜み、行けば程なく若宮の木陰涼しき日暮しの、今日は春日の里泊り、立や
 浦浪荒磯の、祇園参りに諏訪愛宕、稻荷山よりみ吉野の、しかも懸路の中絶
 えて、今は秋田の浦につき、大磯小磯三船山、龍ヶ水より遠近の、波間に華の
 櫻島、いと烈しく吹く風に、猶告渡る鳥島、泊り定めぬ海士人の、磯屋に伏

せば沖小島や沖に釣する漁火は、さながら夏の螢にて、我から身をや焦すらん。祈誓をかけて八幡のぼるべんせつは荒田なる、是ぞ法華經の正建寺名にし負ひたる甲突の川瀬に波の棧橋を、しどろもどろと打渡り、袖をもしをくと通ふ洲崎の、濱千鳥鳴くより外に友はなし、立や鹽屋の夕煙、松原山に棚引けば是ぞ古人の河内通ひの折柄に契なきや、かたみに袖を絞りつゝ末の松山浪こさじとは「連ね置れし言の葉も、今身の上に白雪の、處々は群消えて、鹿の子まだらの野元山登れば、頓て觀世音下る宮路は久保田なる神の恵の深ければ、森の一むら分け入りて、諏訪の社はありがたや、猶行先は萩原の、南無天神に参りつゝ、小路小路を詠むれば、昨日や今日まで月よ花よと言はれし人も、貪瞋癡の三毒に引かされて、無明の闇に打迷ふこそ哀れなり」

○老蘇の森

數ならぬ身にさへ年の積るかな、老は人を嫌はざりけりと「連らぬ置かれし言の葉が、今身の上に知られたら、されば此の世に生れ来て、生老病死の四の苦を逃るゝ人は更になし、彼の又四つの苦の中に、何れ差別はなければ、とも、中にも老苦が哀れなり、其の古へは我も又、容顏美麗の姿にて、月や花かと人にも見られ、假初の道行ふりに花を送られ、文玉章を取り替はし、笠のはづれの隙よりも、人を見初むる目元迄、嗚呼恥かしやと思ひし事も、夢かと覺めて昔なり、去年より今年、昨日より今日と、衰ふる姿見る度に、くやしき事の増鏡、涙に曇る哀れさよ、然ればこそ、時にも歌にも記さるゝ、白髪重來一夢の内、昨日まで乗つて遊びし、竹の駒、今日は早や、老の坂行く杖と

頼まん、又は古歌にも、變りゆく鏡の影を見る毎に老蘇の森の歎きをぞす
ると、連ね置かれし言の葉が、今身の上に知られたり、只何事も人間の、此世
にあるは假寝の夢か現の間なり

○群鳥

まだ住み馴れぬ此の里の、人の心が村鳥逢ふも逢はぬも浮きも辛きも告
や渡せば無き事故に「余所に名の立つ因果なり」よし其れ逆も君様に「逢ふ
て立つ名は是非もなし逢はて浮名の立つは」諸事無益只世の中に昨日見
ても今日見ても、音信聞いても見も厭かぬ者は、春のめに梅と櫻に鶯の聲、
夏は卯の花に山時鳥、空に一聲音信て暮れ行く秋の虫、蜂す木の間の月に
鹿の聲、なんと聞いても面白や、冬は板屋に霰降る、音雁の聲四方の梢に積

もる白雪、尙夫れよりも見ても見も厭かぬものは、二人の親の面影と、自ら
すがたを寫す唐の鏡に戀しき人の面影は、日に幾度見ても見もあかぬ、其
れに付きては皆人は、戀をしてこそつれなきを知れ、我身をつめて、人の浮
身は知られたり、戀ひしやと我は偏に思へども、思はぬ君を思ふこりて、礎
の匏の片思ひ、我に心を置く君も、聞けは余所には打解けて、我には嫌疎そ
な振を召す、嗚呼恨みしや、篠田森の葛の葉の、恨みに置ける露程も、思はせ
て思はぬ君を思ふころ、是も因果の縁て候

○狂女

人間の世の形勢を心に留めて按ずるに、一度は榮え「又一度は衰ふる事も
あり」然らば水の流れて「又其水に歸らざるか如くなり」祇園精舎の鐘の聲

諸行無常をあらはして、飛花落葉は目のあたり、只徒らに過ぐる身は夢の中なる夢なれや、其の古は我なから美人の姿人にも勝れ、窈窕の花と飾られて、今を盛りの花桂、掛け巻くも、忝くも我君の御身近く、召し仕れて、月見花見の御遊の供、錦の褥玉の翠簾、明け暮れ馴れし身なれども、人一度榮へ、花一と時に移れば、替る身の愛さを其の寵愛も枯れく、今憔悴と衰へて、唯何事も妹脊の契り、淺衣の薄き縁にしと成り果て、哀れ果敢なき我が身かな、人世婦人の身となることなけれ、五十年過ぐるは夢の中、僅が百年か間の樂も苦も他人によると、白樂天が書きたる「詩の心にも今身の上知られたる、哀れ唯柴の庵と人なうして、獨り涙に伏し沈む、耿々たる殘九の燈火、幽かにして壁に添ひ、瀟湘たる夜の雨の窓打つ音迄も、恨を添ふる媒となる、餘り恨の數の重りて、唐土迄の思ひ草、哀れ貴さも賤しさも、物

思ふ身は異らず、流は同じ水なれど、淵瀬と變るが如くなり、唯人間の因果を廻る小車の、我が惡業に引かれ來て、斯かる浮身をや焦すらん」

○薄が本

寢ては夢覺めては現、兎に角に、忘れもやらで如何せん、君の面影とは早古事なれど、馴れし昔の君ぞ戀しき、何と包めど、我が戀は一本薄穂に出て、結びも逢はぬ片糸のよるく、毎に枕の上は、涙の雨の晴るゝ間とては、更になし、松虫の聲立て、泣く蟋蟀、人こそ知らぬ片原の薄が本を宿として、語らん、葛の葉を恨み、露ならぬ花に心を置き染めて、及ばぬ戀を、駿河なる、富士の高根に有らねども、胸に煙の絶え間なく、我が身の程が思ひの儘に成るものならば、飛行自在の小鳥の身となりて、君があたりを問はん物と

は思へども思ひし事の奈良坂や春日の里に獨り住むいとと思ひは廣澤の池の清水に身を浮べやる方もなき身こそつらけれ」

○武藏野

武藏野に草は種々多けれど摘み菜にすれば扱も少し皆人は若き時より唯「徒事に日を送り」才智藝能なき人は寶の山に入りながら空敷く歸るが如く也。偶々人間界に生れ來て眞如の玉を磨かずば人と生れし甲斐もなし。只人よりは淺く思はれて犬の歳老ゆるが如くにて朽ち果つるこそ無念なれ。又いつの時に磨くべき頼まれぬ世にもある哉。月鼠戰草葉の露の身なれど假令高位長者の身となりて七珍萬寶滿ちて榮華に誇る樂も一夜の夢の如くなり。觀樂極まりて愛情多しと古人の文にも配さる

いさればにや生々世々の樂も心の中の月や花之れを樂む人もなし。會者定離盛者必滅の世の習ひ春去り秋は蟬の聲扱も果敢なきうき世かな。引き寄せて結へば草の庵にて解くれば元の原野なり。少しきを足れりとも知れ滿つれば月も程なく欠けて行く十六夜の空や人の身の上と知られたり」

○華の香

世の中に梅は匂へて櫻は花よ。そうして後人は情の下に住む。蜂の小松も獨り立つとは申せども夜半の嵐は遁れがたなき富士や淺間が嶽とても霧や霞に埋もれて三千世界に光を照らす日月さへも雲の閉しは如何せん。況してや人間は五尺に足らぬ身を持つて獨り立ちして世を渡らんと

思ふ人こそ果敢なけれ。君は臣下を頼み、臣下は君を頼み奉る。親子兄弟夫妻が中、又は朋友の交迎も互に頼み頼まれて、妹背の中にて世を渡らんと、思ふ人こそ之れが誠の人なれや、我が關白に過ぐる身は、風の前なる燈火にてはなけれども、消ゆるに安き身を持つて、惡をたくむは地獄なり、善を願ふ是が極樂地水火風は娑婆の假物、釋迦も孔子も名のみ残りて今はなし、達摩尊者も無一物と解かれしも、實に理りなりと知られたり、左もあらば古へ花に増したる美人の數を數ふれば、漢の李夫人、唐の楊貴妃、我が朝にても、二條の和泉式部に小野小町、常盤御前と云れし人も、盛り程は名も高けれど、死すれば野邊の土となる、其の名も高尾の紅葉、野田小藤、吉野の櫻、北野の梅も、盛り程は名も高けれど、散りての後は色香もなし。

○墨繪

心とは何を云ふらん不思議さよ、墨繪に書きし松風の音、況や世を諸法實相と聞く時は、蜂の嵐も法聲邪正一如と見る時は、迷ひも悟りもなかりけり、萬法一如と観ずれば、谷の朽木も皆佛さのみ不審はなかりけり、三界に身は安からん、小車の我が惡業に引かれ來て、錦の紐を何時解くらん、四つの邪の一つの箱に疊まれて、いつも苦しき貪欲の深き流れに身を沈め、浮ぶ甲斐なき我が身一つを如何せん、夫れ人間の習ひには、昨日の迷、今日悟り、左れば如何に悟りし人とても、明日は迷ひし事もある、埋木に如何なる花や咲きぬらん、實になりてこそ思ひし人の上とて、さのみ云ふては如何せん、物の報ひは物事にある、會者定離、生死無常と唯にいひけん、言の葉な

れと昨日今日とは思はざりけり、時に至りて歎き悲み、袖に露浮くばかりなり。生死烈しき風情にて、人には永く添はんもの、腹は立てども言葉は殘せ、千年此世にある身の如く、慳貪邪見は諸事無益、氣をあさく、と心廣くも能く持つて、法の道には誰も深かれ、地獄極樂只一筋の道の根を誰に尋ねん、佛ならては知ろし召されぬ、佛とは何を岩間の苔衣、唯其の儘の姿にて、慈悲より外に如く心はなし、皆人が地獄極樂何國にあると思ふらん、胸の間にあると聞く、夫れ人間の如何に契りし親子兄弟、又は朋友夫妻の中間も、此世計りの契なり、死して行く身の野邊迄ては、娑婆の情に我も、いと供を致せと野邊より先きは、只獨り行く昨日迄ては、人を送りて歸りしが、今日は又人に送られ、人を返さん、涙川幾瀬渡るも淵なれば、御法の船こそ懸しけれ、之れに付けても老若男女に至る迄て、慈悲をも願へ慈悲萬行

の功力にて、後の世までも涼しき風に悟り浮べば、即身成佛は得脱の縁となり、唯人間のなげきの中悦となる」

○王照君

とわず語り、誰聞けとてか打詫ぶる、身のうさを知れ山時鳥、野の草忍ぶとすれど秋更けて、露はてたる虫と我れかな、別れには露の命も惜からず、夫れ一生は風前の燈、火悲み骨髓に透りて、形は憔悴衰へたり、只何事も妹背の契り、淺衣の薄き縁にして成り果て、哀れ果敢なき我が身かな、一度君に分れて又た逢ふ事もなし、隔て盡させし千山萬水の、雲終夜心に掛けて思へども、君に逢ふ夜の夢だにも見ず、今世の中に物思ふ身は我等計りと思へども、昔を傳へ聞くときは王照君の古は、漢の帝の美人にて、御寵愛は

類ひなし、殿上にては並びなく、誠に雲の上人にて、さしも優々敷く御座せしに如何なる人の讒言にや、胡國と云へる遠國の夷の在所に流され給ふぞ哀なり、痛はしや、王照君今は早住み慣れし花の都を涙と共に立ち出て、或時は船に召され、又或時は殊に險き山を越え、餘り我が身の上の悲さに、馬の上にて琵琶をも弾じ、古郷戀ひしき歌の曲様々朗詠し給へど、風情水雲皆悉腸を断つとかや、帝も今は早聞召し、御愁歎の餘りにや、悉くも龍顔に、御涙を浮べさせ給ふ有難や、然れど又淪言汗の如くにて、再召し返さるゝ御沙汰もなし、彼は唐此れは我が朝、又は胡國夷の朝、春は藁屋の夜の雨、乾坤萬里と隔つれど、物思ふ身は異らず、流水同じ水なれど、淵瀬と變るが如くなり、「唯何事も杜鵑血に啼いて何ぞ腸を断つとかや、暫し口を結て、三春を過ぐさんには由なかりける」

○赤壁

神無月しぐるゝ時の雨雲の、いかに晴れてか山高く、月澄み登り水落ちて、「岩根あらはれ寒き江に」一葉とうけて酌酒の、たゆとふ影に三年経し、昨日ぞ移る其の秋の、胡竹の調べ其の節を、訴る如き木枯の、聞吹きすさび大空に、ひきたるならん、芦田鶴の、近く飛渡り、更る夜に、鳴音をながし浦浪のうへ、いかにかも鶴の毛衣歸しけん、昔の夢の今も見えつゝ」

○蟻蟻

つらく有爲轉變の世を觀ずれば、花も紅葉も一と盛り、「況や人も一と盛り」人の齡が花に似て、咲くは遅うて散り易く、散りゆく花は根に歸る、花は

散りても木さへあれば又來る春は枝に戻りて香ひ來る鳥は古巢に返る
 と云へど夫れ人間は死して二度跡に歸らぬ死出の山如何なる人の踏み
 初めて行くも歸るも涙川親の別れに子を連れず又子の別れに親添はず
 獨り生れて獨り行くこそ唯冥土の營みは疑ふ心あらずして常に唱へし
 念佛も是は淨土の寶なり然ればにや爰に一つの假令ある蟬蟬と云ふ虫
 は如何なれば己れが姿になき虫を之を我巢に集めつゝ心を盡して所り
 せば我に似る事あるぞかし我等如きも迷の深き身も斯程に深く所りな
 ばなどが印のなかるらん唯信の淨土らしんの彌陀と聞く時は十萬億土
 の極樂も爰を去る事遠からず皆人は彼の理を知らずして明け暮れ罪を
 作るぞ果敢なけれ罪は來世の火の車善は淨土の蓮なり偶此世に人間衆
 生と生れ來て後世前生を願はずばいつの世にか浮ぶべき」

○梢の華

吉野山梢の花を見し日より心は空と讀れしも「實に理と知られたり」昨日
 の華も今日は散る今日ある連も明日知れず讎敵と誰も言けん言の葉な
 れど誰か恨を残すべき武藏國の住人篠鷲の旗頭熊谷次郎直實は無官太
 夫敦盛の前世後世を吊ふ須摩の浦一の谷にも立出て諸方を觀する計り
 なり雲井にまごふ浦浪に羽打替し鳥千鳥彼方の岡に吹笛の音を戀しき
 敵味方術を争ふ去年の春如月六日の夜の宴城の中なる笛竹の今は草刈
 笛とかや一村しげる松影に元より捨つる身の習ひをと争て岩枕苔をか
 たしきて寝られぬ儘に詠れば有明の月影清く野原の白骨にうつらふは
 砂を照らすに異ならず杉更け人靜りて風蕭々たり魂魄結んで恨々たり

と言ひし言の葉の末迄も思ひをこしつゝ物すごし心も亂れてや少しまどろむ草の中に小笹の露を踏分て顯れ出し敦盛の玉の姿を引留め有し半の物語り聞に付ての法の道唯深かれと争て我れと願はぬ人はなし

○増り草

住み馴れし里は雲井の餘所にみて其の音信も宇都の山邊の「現とも夢とも知らぬ旅衣」着初めし日より我袖のかはく間とては更になし岩蟹の行末迄の物思ひ誰松虫と知らねどもたまさかに問ふべきものは賤が身の心にあはぬ物語り聞に思ひの増り草

○潯陽江

紅葉うつろひあみがちる秋のあはれのいと深き「潯陽江の夕まぐれ」友の舟出を送り来て別れをしむ盃の數重なれどいとたけのしらべも添はぬ淋しさに本意なき事と思ひつゝ影遠白き波の上の月打まもる折しもおれ忽ち聞ゆる琵琶の聲思ひもかけぬ事なれば互に心ときめきて歸らんことも行くことも忘れ果てつゝ其の聲を尋ねて誰ぞと音なへば打潜りて答なし舟漕ぎ寄せて酒を添へ燈かゝげて又更に宴の筵打開き琵琶のあるじを招けども頓には出て來ず百千度呼立られてしぶくになたの舟に移り來ぬ琵琶を抱きてまばゆげに面を掩ひ弾き初めし其の撥音にいひしらぬ深き情のこもりつゝひき行くまゝにつねくの己が心のうれしさを訴へ出る心地せり人こそ知らぬ濱ゆふの百重かさなる憂き思ひ積る恨の數々を四筋の糸にいはすらん軽く打ち緩くひねりはら

ひつかいげつ、初めには、霓裳をかなで、後には六玄を弾じけり、大絃は嘈々
 として、村雨の如く、小絃は切々として、私語に似たり、切々と嘈々とこさま
 せて、彈ば大珠、小珠、玉盤に落つ、間隔たる、鶯の聲、花陰に滑かに、幽咽たる、泉
 流水、早瀬を下る、水泉、冷澁の趣、凝りて、絃を絶え、しばし聲なき、其のほどは、
 そとろに憂を催して、聲あるよりも中々に、風情を添へし折しもあれ、再び
 響く撥の音、銀瓶碎て水進り、軍起りて、打物の、刀稜を削るに、髣髴たり、曲も
 今はとなりし時、撥を收めて、四の緒を、只一聲に、掻なせば、さながら、帛を裂
 く如し、東の船も西なるも、たゞ悄然と、聞き惚れて、物言ふ人もあらばこそ、
 秋の浦、風身に浸みて、水底、白く澄渡る、月の影こそ更に、けれ、衣をつくろひ
 居なほりて、語る言葉も口籠り、妾も本は都なる、蝦蟇の、陵下の、生れにて、十
 三歳の頃、よも琵琶の、玉手と世に知られ、玉を飾れる、宮の内、金を敷ける

臺にも、召のぼせられ遊士の、かなたこなたの會にも、招き寄せられ戯れ合
 ひ、さしめさかはしあやにしき、かつぎかへれば、家も富み、身も榮えつゝ、世
 の中は、斯くあるものと、愚にも、思ひたのみて、花の春、紅葉の秋と、等閑に、日
 を経る程に、同胞に、親族に、離れ夕去き、朝來りて、顔花の、盛もいつか、杉の門、
 馬も車も、寄せ來ねば、世渡る、たつき、盡果て、身を、浮草の、根をば、絶え、水
 まに、誘れて、情も、淺き、商人を、夫とする、だには、かなきを、其の、夫遠く、旅
 立し、此の浦舟に、夜を守る、月明かに、水さむみ、更け行くまゝに、まどろめば、
 吾身の、盛り夢に見て、いと、悲さ増さりぬと、語るを、聞きて、思はずも、ふと
 きためいさつくくと、琵琶を、聞くだに、悲しきを、此物語の、哀れさよ、始め
 て逢へる、此人と、身の際こそ、はかなけれども、我も、同じく、浮沈み、去年より
 こゝに、流離して、海陽城のかたほとり、蘆と竹との、生繁る、いぶせき中に、家

居して、旦夕に聞く物は高嶺の積こし杜鵑、樵夫の歌や總卷が吹き鳴す笛の聲
 ばかり、却て胸を痛めつゝ、やまひいやす心地して、昔聞きつる糸竹の音な
 つかしく、思ひしに、今宵の君が琵琶の聲、天津乙女の音楽を、聞く心地して
 いとうれし、否、むことなく、今ひとつ、彈きて聞かせよ、予も亦歌をつくりて
 贈らんと、いへば、實にもと思ひけん、又も彈ずる撥音は、前の聲よりいそが
 しく、物凄ければ、江州の司馬は、さらなり並居たる人も袖をぞしぼりける』

○城 山

夫れ達人は大觀す、拔山蓋世の雄あるも、榮枯は夢か幻ろしか、大隅山の狩
 倉に、真如の月の影、滑く、無念無想を感ずらむ、何をいかるか、いかり猪の俄に
 激する、數千騎、勇みに、勇むは、やり雄の、騎虎の、勢ひ、一徹に、留りがたきを、是

非もなき、唯身一つを打捨て、若殿原に報いなん、明治十年の秋の末、諸手の
 戦打敗れ、討つ討れつ、頓て散る、霜の紅葉のくれないの、血汐に染めど、願り
 みぬ、薩摩武夫のを、たけびに、打散る、玉は板屋うつ、霞たばしる、如くにて、面
 をひけん、方ぞなき、木魂に響く、とき、の聲、百の雷ひと時に、落つるが、如き有
 様を、隆盛打見て、ほくと笑み、あな勇ましの人々や、亥の年以來、養ひし、腕の
 力もためしみて、心に残る事もなし、いざ諸共に塵の世を、脱れ出てんは、此
 時と、唯一言を名残にて、一首の詩をぞ詠じける』

孤軍奮闘衝圍遶 一百里程壘壁間

吾劍既折吾馬斃 秋風埋骨故郷山

桐野村田を初とし、宗徒の聲諸共に、煙と消えし大丈夫の、心のうちこそ勇
 まし、官軍これを望見て、昨日迄は陸軍大將と、君の寵遇世の覺え、類ひな

かりし英雄も今はあへなく岩崎の山下露と消え果て、移れば替る世の中、無情を深く感じつゝ、無量の思ひ胸に滿ち、唯悄然と腕をくみ、目と目を見合す計りなり、折しもあれや吹き下す、城山松の夕あらし、岩間に結ぶ谷水の、非情の色もなにとなく、悲鳴するかと聞なされ、戎服の袖を濡すらん

○臺灣入

皇の御稜威は、四方にかゝりやきて、清國途に和議を乞ひ、臺灣島を献上し、谷戰こゝに治される、君が御代こそ目出度けれ、臺灣島の土賊共、陸軍に向ふ、艦艫の斧を揮ふときこそ、しかば征討の師を遣さる、こゝに近衛兵の精銳を率ゐて、御渡海めされしは、陸軍中將大勳位北白川の宮とて、金枝玉葉

の御身なり、三貂角の御上陸、幕營ありし其の跡に、木を削りてぞ知る、炎熱燬くが如き日に、三貂大嶺の嶮岨をば馬にも召さず越え玉ひ、大雨しきりに降る時も、濡れにぞ濡れて進まる、士卒之れに感激し、病兵さへも立ち上り、命を惜まず進軍す、處々の砦に籠りたる、賊兵共の討つ彈丸は、雨か霰か白雪の降り注ぐが如くにて、砲煙暗く天を蔽ひ、百雷齊しく落つるに似たり、宮は矢石を冒しつゝ、突貫せよと下知あれば、河村少將小島大佐を初めとし、勇みたちたる近衛兵、我れささけと奮進し、賊の本營にと突て入る、賊兵之に氣を吞まれ、右往左往に逃げ散りて、降参するもの數知れず、大砲小銃の戦利品、山を築かん計にて、勝鬨どうと揚ければ、宮は此時悠々として基隆城へ入らせ給ふ、かくて六月十日には、臺北城を陥れ、七月新竹を占領し、翌る八月には、彰北臺灣兩府を定め、十月の初つかた、臺南さして

ぞ進まるゝ天熱くして瘴癘多く地險しくして糧道絶へ千辛万苦の其の
 中に宮は士卒と食を分ち晝は汗馬に鞭をあげ夜は荒野に露營して戎衣
 の袖に月を宿し只國の爲め君の爲め平定の策をめぐらし給ふ御痛はし
 や悲しやな竹の園生の御身にて餘りに艱苦をつませられ遂には御病に
 かゝらせ給ふ日々に重らせ給ふより御供の人々打驚き都へ返らせ給ふ
 やう切に御諫め申せども宮はいづかなきこしめさず手れ官軍の將とし
 て賊徒平定を見ぬうちにたひ臺灣の土となればとて我のみ士卒を打
 捨て争てか都にかへらんと轡にめされて進ませらる御臨終のその際
 に賊徒平定さこしめされ宮は莞爾と打笑みて萬歳と唯一聲叫び玉ひし
 ばかりにて敢なく天に昇り玉ふ傳へさく日本武の故事を今日の前にみ
 まるらせ國中の民も兵も慟哭せぬはなかりけり去はさりながら昨日今

日とは思はねども老の不定に貴賤なし但人は名こそ惜けれ皆人も名を
 千載に残せかし」

○僧月照

花の都も秋はなほ「夕べ淋しき風情なり」名は流れたる清水や落ち来る瀧
 の乙羽山秋の葉色の漣ごとに散るや紅葉のちりくと亂れ行く世の浪
 花江や蘆のさはりは繁くとも猶世のため身をつくし盡さんとも筑
 紫瀉波影の岸の波ならぬ操をいつか深緑り色は變らぬ青柳の驛路を越
 へて香椎潟たいらの橋を打渡り千代の松原千代かけて萬代かけて君が
 代の千歳の松によそへつゝ神に歩みを箱崎の社にかけし四つの文字筆
 の主をよく問へば延喜の帝長くも御手をば下しませりつゝ爰もむかし

は石疊み重ね重ねし白浪のよせし昔を忘れじと恨み浦半の片だすきが
 けて敷くも憐れなり、沾衣塚の沾衣、吾身に着たる心地せりやがて博多の
 寓居、こゝも浪風さわがしく、又行く方は薩摩瀨沖の小島にあらねども、心
 細くも都にて誰かあはれと思ふらん、たよるは心鏡紫瀉、一人の外に打あ
 けて、暗ふ人も憂き枕、波路へだて、野間の關、せきとめられて又舟にゆら
 れ、て行く先は、黒の瀬戸てふ名もやしや、やがて鹿兒島かこの鳥翼縮
 めて潜みしが、又木枯に驚きて日向をさして船出せし日は、神無月望の夜
 の傾く月と諸共に照り輝きて曇りなき身は大君の御爲とて前に一人の
 薩摩人如何なる縁にし先の世に契りも深き船の沖き底の藻屑となりぬ
 るを乗合人も船人の櫂の雫の露程もさりととは知らぬ白浪の立ちさわげ
 とも甲斐をなき、猶東雲のあけ鴉なくより外はなかりけり、

○雪のあけぼの

去るものも日々に疎きは世の慣ひ、三百余名の血盟も、一僅に残る四十七士
 或は商賈に身を變じ、或は門卒下郎となり、吉良の邸に忍び入り、虚實をさ
 ぐる其苦心何に喩へん様もなし、中にも首領の大石は、淫酒に其身を溺ら
 して、廊通ひに日を暮し、或は新に家を建て、故主を思へる節操は、秋毫もな
 き有様を、敵方これを探り得て、今は恐るに足らずとて、其の警備をば解に
 けり、仕すましたりと良雄等は、既に夜討の議を決し、救火者輩の行装にて、
 各四人を組み合せ、合圖を定め手を分ち、前後の二門に馳せ向ひ、梯子を以
 て塀を越へ、槌にて門扉を打破り、大喊一聲呼んで曰く、淺野の遺臣仇を報
 ずと、衆争て亂れ入り、抵抗者をば拜み打ち、續て進むを、幹竹割直に進んで

寝屋に入り、怨敵義英を搜りしに、其厨傍の外營よりあやしきものを引き出し、その名を問へど答へざれば、是は不審き曲者と槍とり延べて狭間光興、其の胸中を刺しければ、重隆太刀を打揮りて只一刀に首を討ち、門者を執へて責め問へば、果して敵義英なり、乃ち呼子の笛を吹き衆を集めて、其首を槍の穂先に貫きて、東雲告る鐘の聲、泉岳寺へと急ぎつゝ、亡主の墳墓に祭りしは、後の世までも忠臣の鑑とこそは成りにけれ』

○兒島高德

元弘二年如月の、小雨しく／＼笠置山、あやめも分かれ夜の風に、指して行く手も楠の「蔭だに見えぬ常闇に」荒れ渡りたる人面の心は、鬼か蛇の如き妖怪變化の賊共は、恐れ多くも天皇の龍恩を西の隠岐の海海路遙に移し

けり、其の有様は今も尙、史上に見るだに身の毛立つ、勝さへも寸々に絶え入る計りうるむ目にも、睨む外ぞなし、其の時兒島高德は、衆を集めて言へる様、仁をなす爲め身を殺し、義を見て爲すは勇なりと、勵ます言葉、勵む武士共々向ふ船阪の山の嶮岨は、此れや是れ、天の興へし要害と、身を潜めつゝ、堅睡のみ、我が帝を奪はんと待つに、甲斐なや風聲は、早や山陰に向ひぬと、聞くより早く杉阪の樹の根岩の根踏み碎き、望めば又も風聲は、遙に過ぎて後影、僅に拜むばかりなり、今ぞ挫けし兵の跡見送りて、高德は、天を睨みて地に哭し、姿をかへて身をやつし、風の晨も雨の夜も、厭はず御跡慕ひつゝ、善き折あらば赤心を、我が天皇に聞へ上げ、敵慮を安んじ奉らんと、氣の張り弓は撓まぬも、守り嚴しき板庇し、隙さへ洩らぬ龍姿に、さし足抜きし日本刀、櫻の老木かき削り、墨斗の墨の黒々と赤き心を書き下す、

天莫空勾踐 時非無范蠡

十字の文字は長城の堅き固めや勤王の記しも賊は明き盲群り見るも明
鴉阿房々と笑ふのみ我が天皇の龍顔も最と麗しく暫の間愁の御眉開
きけり斯くの如くに高德が虎の穴だに恐れなく虎の子得んと思ひてし
勳は後の世々までも輝き渡り曇りなき明治の御代に愛國の古きを尋ね
新しく護りの神と崇めらる讀む人々よ心せよ彼れも人なり我も人食ふは
今もだに日本に實る瑞穂なる飲むも昔も今日も清き日本の國の水卑屈
の鵬洗ひ去り國を枕に誠忠の樂き夢や結ぶべき」

○高德題櫻

藤を亂せる如き世に四方の草木も已がじと靡き背きて定めなく「鐵を磨

き矛を研ぎ兄弟鎧を削りつゝ父子は尤を争ひて矢叫びの音鯨波の聲絶
える時とてあらざればさしもに重き萬乗の大君さへも禁廷に止まり玉
ふ事ならず隠岐の國へと行幸し給ふ時しも兒島高德は忠義一國の心よ
り帝を奉じ臉により再び旗を擧げなんと圖りし事のくひちがひ遠威の
心やる瀬なく衣を變へて身を瘞し一度帝に面あたり謁へて己が眞心を
告げ奉らんと思ひしも其隙なくて夜の中に難なく御館へ忍び入り櫻を
削り錄取りて二句の唐詩書つけつ赤き心を示しける夜はほのくゝと明
放れ護衛の兵の之を見て斯と帝に奏すれば帝は之を讀み給ひ不忠の衆
多かるにあはれいみじき勤王の臣もあるかと御心に喜ひ給ふぞ傷しき
されど今猶敷島の倭心と山ざくら花に思ひを掛卷も尊き御國の龜鑑を
と譽むる其の名も香しく朝日と共に輝かん」

○遠矢

新田足川相挑て、未だ戰ざる處に、本間孫四郎重氏、黃瓦毛なる馬の太く逞しきに紅下濃の鎧着て、只一騎和田の御崎の波打際に、馬打寄せて沖なる船に向て、大音聲を擧げ申しけるは、將軍筑紫より御上洛候へば、定て鞆尾道の傾城共多く召具せられ候はん其爲に珍しき御肴一つ推て進せ候はん暫く御待候へと云儘に上差の流鏑矢を抜て、羽の少し廣がりけるを鞍の前輪に當て、かき直し、二所藤の弓の握太なるに取添へ、小松陰に馬を折寄せ、浪の上なる鵜の己が影にて魚を驚し飛びさがる程をぞ持ちたりける、敵は之を見て、射放したらんは希代の笑哉と、目を放す、御方は之を見て射當たらんば時に取りての名譽かなと、機を攻ず守りける、遙に高く飛び

上りたる鵜浪の上に落ちさがりて、二尺計なる魚の鰭を搦んで沖の方へ飛び行さける所を、本間小松原の中より馬を駆け出し追ひ様に成て、鵜鳥をぞ射たりける、態と生ながら射て落さんと、片羽がひを射切て、直中をば射ざりける、間鏑は鳴響て、大内介が舟の帆柱に立ち、鵜は魚を搦みながら、大友が舟の屋形の上へぞ落たりける、射手誰とは知らねども、敵の舟七十余艘には、舷を踏て立並び、御方の官軍五萬余騎は、汀に馬を扣へて、ア射たりと感ずる聲、天地を響かして、静り得ず、將軍是を見給ひて、敵我が弓の程を見せんと、此の鳥を射つるが、此方の船の中へ鳥の落ちたるは御方の吉事と覺ゆるなり、何様射手の名字を聞かばやと仰せられければ、小早川七郎舟の舳に立出て、類少なく見る所有ても、遊されつる者哉、さても御名字をは、何と申候やらん、承候はんやと問ひたりければ、本間弓杖にすがり

て其の身人数ならぬ者にて候へば、名乗申すとも誰か御存知候べき。但し、
 箭を取ては、坂東八箇國の兵の中には、名を知らるものも御座候はん。此矢
 にて名字をば御覽候へと云て、三人張に十五束三伏ゆらゆらと引渡し、三
 引兩の旗立たる船を指して遠矢にぞ射たりける。其の矢六町余を越て、將
 軍の舟に並たる佐々木筑前守が船を篋中過ぎ通り、尾形に乗りたる兵の
 鎧の草摺に裏をかゝせてぞ立たりける。將軍此の矢を取寄せ見給ふに、相
 摸國の住人本間孫四郎重氏と、小刀の先にて書きたりける。諸人此矢を取
 得へ見て穴懼し、如何なる不運の者が此矢に廻て死なんぞんと。兼て
 胸をぞ給しける。本間孫四郎扇を揚げて沖の方を差指さ、合戦の最中に
 候へば、矢一ツも惜しく存候。其矢此方へ射返して、たゞ候へとぞ申ける。將
 軍是を聞き給ひて、味方に誰か此矢射返しつべき者有やと、高武藏守に尋

ね給ひければ、師直畏て、本間が射て候はんずる遠矢を、同じ所に射返し候
 はんずる者、坂東勢の中には有べしと存候はず。誠にてや候やらん。佐々木
 筑前守顯信こそ西國一の精兵にて候なれ。彼を召され、仰付られ候へかし
 と申ければ、實にもとて佐々木をぞ呼ばれける。顯信召に隨て將軍の御前
 に参りたり。將軍本間が矢を取り出して、此の矢元の矢所へ射返され候へ
 と、仰せられければ、顯信畏て叶難き由をぞ再三辭し申ける。將軍強て仰せ
 られける間、辨するに處ならずして己が船に立ち歸り、緋威の鎧に、鍔形打
 ちたる甲の緒をしめ、鍔のつく付たる弓の反高なるを橋に當て、さりと
 と推張り、船の舳先に立顯はれて、弓の弦くひしめたる有様、誠に射つべく
 ぞ見えたりける。かゝる處に如何なる推參の馬鹿者にてか有けん。讀岐勢
 の中より、此の矢一つ受けて、弓勢の程御覽せよと、高らかに呼る聲して、鎧

をそ一つ射たりける、胸板に弦をや打たりけん、元來小兵にやありけん、其の矢二町迄も射付す波の上を落ちたりける、本間が後に扣へたる軍兵五万余騎、同音に御射たりやと欺てしばし笑も止さりけり、此後は中々射てもよしなしとて、佐々木は遠矢を止てけり」

○物狂ひ

風に柳亂れ心や狂ふらん、胸のほのうが身を焦す、恨みしの浮世かな、嗚呼、恨みしの此世かな、此の里の人の心が性なくて、谷の埋れ木朽ちく、にひ立てられて君と我れ別れく、に鳴海湯身の終りこそうたてけり、思ひ出つれば今は早や、我が故郷に住家なし、いさゝらば思ひ立つ田の懸紅葉、夜半の嵐に誘れて、散りくになる一葉の船も焦れ出て、水の面に浮浪繁

き身にしあれば、或時は君を恨み又或時は身を救き、心狂氣になれ、衣身にあまりたる涙川深き流れに身を沈め、浮ぶ甲斐なき我身一つを如何せん、時知りて花も涙や注ぐらん、鳥も別れを惜みてぞ鳴く、命の輕き事は只、飛火落葉の如くなり、君を思ふ心は當に是れ、高山其の一念は、五百生けねん、萬業無量却に至る迄、是れ又何の因果ぞや、何れ思ひは中々に、浮世にありしありがほの「娑婆の務めも益はなし、併し浮身を捨て果てんと思へど、流石又輪廻の浪の立つ間にも、其の面影が身に添ひて、片輪車の風情にて、還る方もなき胸の中、今は路頭も憚らず、泣きつ笑ひつ安からぬは、物狂ひとや人のいふらん」

○鴛の夢

我が戀は鶯の夢かや見ては唯、
 到られ慕す因果なり、
 思ひに余る折節は門
 に立ち出月を詠め花を見てこそ戀まん其間なり共忘れつゝ
 涙の雨の晴
 やせん斯かる歎きの有様を何に譬へん片原の逢ぬ契りも徒に何しに深
 く願ふらん馴れし昔に似たるも有るかな古歌に有る露もげに逢はてや
 果てん片原のよるくごとの思ひのみずると連ね置かれし言の葉が今
 身の上に知られたり然れば聞くにも津の國の生田の川には戀故に身を
 捨て果つる人もあり又柏木衛門督は女三の宮を戀ひ奉り遂に其戀途げ
 給はねば富士の高根と我胸は煙比べにあこがれて終に戀死召されたり
 猶も譬へば武藏の國の住人熊谷次郎直實は無官の太夫教盛を詮方なく
 も手に懸けて其れが一期の思ひとなり鎧の袖を墨に染め其名を蓮生法
 師と様を替へ新羅谷に引籠る三と年の程は終夜百萬遍を唱へける之も

教盛最後の時一言の言葉の替はし有る故に、
 武士の情もあるぞかし、
 假令ても譬へ方なき我戀は、
 あらには燃る物ならば、
 何と駿河の富士の山、
 淺間嶽とは謂はれまじ、
 花も仇なる朝顔の露の間なりとも逢ふ物ならば、
 夫て心ひの晴れてゆく」

○錦の御旗

天照す日の影うつる眞名井の流、
 末清き瑞穂の國は昔より武勇忠義の人
 多し元弘年中の事とかよ、
 後醍醐天皇の三の皇子大塔宮と聞へしは、
 出家の身にてましませど父の御ため國のため、
 義兵を揚げて逆臣を征伐せん
 との御企早くも賊に漏れしかば、
 四方の備殿しくて比叡の奥にも南部に
 も身を置き給ふ事難く、
 熊野を指して落ち玉ふ、
 股肱の人は誰々ぞ、
 赤松律

師光林坊、木寺の相摸三河坊、片岡八郎武藏坊、平賀三郎、矢田彦七、村上義光の九人にて、櫛の衣に笈を負ひ、頭巾眉深に被りて、先達つくりて山伏の熊野詣にて装えたり。龍櫻風國に人となり、輕軒香車を出て、まさぬ雲の上人の御歩の長途如何にと御供の人々危く思ひしに、社々の御祈り宿々々々の御勤め露も怠り給はねば、勤修を積める山伏も見咎むる者更になし。由良の湯を見渡せば、沖漕く船の楫をたへ、浦の濱木綿幾重とも知らぬ浪路に鳴千鳥、紀路の遠山渺々と、薄紫の藤代の松にかゝれる礫の浪和歌吹上げの浦かけし月に、塗ける玉津島光を余所に打拜み、長汀曲浦の旅の路心を碎く習ひなり、雨を含める孤村の樹夕を送る遠寺の鐘、哀を催す黄昏に、切目の王子に若き給ひ、登詞に袖を片敷きて、朝家の榮えを祈りますか。くて十津川の戸野竹原便りて、暫し居玉へど、爰にも永く有りかねて、高野

の方へと落ち給ふ、茲に妹加瀬庄司とて、賊に一味の士の宮を支へて申す様、此道通し申しなば、鎌倉よりぞ叩せられん、さはい一宮に弓引くは、如何にも恐れ多ければ、錦の御旗賜るか、左なくば一人の御供を止めて證據にせんと、いふ股肱の臣を一人だに、いかてか残し給ふべき、詮方なくも御旗を、彼に與へて虎の口、僅に遁れ給ひけり、斯かる處に村上彦四郎義光は、草鞋の緒や切にけん、遙に後れたりしかば、宮に追ひ付き申さんと、足疾く過ぐる折しもあれ、庄司に嘘と行き逃へり、下人が持てる旗見れば、正しく鶴の御旗なり、不忍議に思ひ問ねれば、事しかくと答ふるに、村上是を聞きも敢へず、くわつと怒りて、打睨み、こはそも如何に何事を、悲も畏くも四海の主、に御座します、天子の御子朝敵を、追伐あらん其爲めに、御門出の道なるに、汝等如き下郎輩、斯る振舞すべきかと、持ちたる旗を奪ひ取り、大の男

を搔搔み四五丈計りなげけるは獅子の荒れしに異らず此の怪力に恐れ
 けん妹加瀬庄司一言も半句もなくしてすくみけり義光御旗を肩に掛け
 程もなく宮に追ひ付き御前にひれ伏し事の由具に申上しかば宮は御喜
 び古の北宮鬪か勇氣にもたち勝れりと愛てましぬ勇みならず義光は吉
 野の奥の戦ひに宮に代りて討死し御旗にうちたる日月と光争ふ忠臣と
 義士とたへて萬代も君に仕ふる人臣の鑑みとこそは仰がるれ鑑とこ
 そは仰がるれ」

○小督

頃しも秋の半の空詠め勝なる御補の涙の露を拂はせ給ひ宿直に待らふ
 「彈生大弼仲國を召され」如何に仲國小督の行衛を知りたるか内裏を逃れ

出でしより嵯峨のあたり聊の知るべ便りて在りと聞く汝如何にもし
 て尋ね出で此文傳つたへよとの仰せなり仲國つくく思ふやら嵯峨の
 わたりと計りにて主の名をだに知らずして尋ねん様はなけれ共小督殿
 は世にも知れたる琴の上手におはすれば今宵最中の月影に君の御上御
 匠し出でて一曲をだにしらべ給はぬ事はよもやあらじ兎にも角にも尋
 ね出で参らせて、敬慮を休め奉らんと心に思ひ定めつゝ、かしまりぬと
 きこへあげやがて御前を罷り出で寮の御馬に打乗りて隈なき月に鞭を
 あげ干をしか鳴く此の山里と詠しけん嵯峨野の奥にわけ入ればさらば
 き渡る白露に尾花が袖も打しめり鳴きかはしたる虫の音に浮世の善惡
 も思はれて獅子心をいためつゝ家有るごとに立寄りて問へど知るもの
 更になし如何はせんと駒を立て茫然としてありつるが若し寶林寺にや

あはすと龜山近く至りしにじづかき遙に聞えたり「巖の嵐か松風か
 ねる君の琴の音か」とめつゝ行けば一村の松のかけなるかた折戸内に
 ゆるつま音を、手綱ゆるめてつくくと聞けば、誠や月花の御遊のむしろ
 に待りて、笛の役つかまつりし時、聞き覺つる調にて、殊更曲は想夫戀、扱
 てはまぎれもあらじとて、腰より横笛吹き出て、少し計り吹きならし、や
 がて駒より飛びおりて、門をほとくとたゞき、是は内裏より仲國御使に
 参りたり、明けさせ給へとおとなふに、琴彈さし靜まりかへつて音もなし、
 やゝありていたひけしたる小女房、門をほそめ明け、顔ばかりさし出して、
 あやしの賤が伏せ庵に、内裏より御使など給はるべきにあらず、門進ひに
 や待らんと云ふに、仲國なまじひに、いらへしては門さゝれんと思ひけれ
 ば、是非なく押し明け内に入り、つまどのまんに進みより、何とてかゝる處

には御渡り侍らふぞ、君には明け暮れおぼし沈ませ給ひ、つや／＼供御も
 聞召さず、打とけ御寐もならせ給はず、ほと／＼御命も覺束なふこそ見え
 給へり、かく申さばうはのそらにやゑはすらんと、御消息を参らすれば、あ
 らなつかしの雲井やと、御文顔にあて給ひ、暫し言葉も涙の雨に、晴れたる
 月も曇るらん、仲國もそゞろにせさくる涙をおさへ、兎角慰め参らせつゝ、
 表の衣絞る計りになりにけり、やゝありて御かへりこと引むすび、女房の
 装束一かさね給はりければ、肩にかけ君にもさこそ待ちあびておはすら
 め、重ねて御迎には参るべし、待たせ給へといひすて、駒を早めて立歸り、
 ありし次第を残りなく、奏する程に、の／＼と秋の長夜もあけにけり、「秋
 の長夜もあけにけり、」

○那須與市

四國八島の荒磯の濱て源氏平家の戦ひに源氏方弓矢の響き今世迄も絶
 さるし左れば平家方より沖なる舟に年頃十八九造りと打ち見えて女官
 とも覺えしが花やかなる装にて船の表に立ち上り扇を的に立て陸に
 向ひてぞ招かるゝ源氏の大將義經公御覽召され數多の人を御側に召さ
 れ如何に方々あれを見よ沖なる船に扇を的に建てけるに兎にも角にも
 射らては叶ふまじと宣へど沖に立てたる的なれば誰こそ御請申す人更
 になし爰に下野の住人那須の與市宗高は名を得たる弓取なれば義經公
 宗高を御前に召され如何に與市あの扇を射れよと宣へば與市承り再三
 辭退申上げれど義經公是非に射れよとの嚴命なりしかば與市今は辭す

るに辭なく直に御請いたして御前を下りける宗高本年十九歳常に勝れ
 て華かに緋威の鎧着て鍔形打ちたる五枚甲の緒を締め白檀磨の匣當に
 兵庫鎖の針を貫き年は五歳の眞黒毛の名馬梨地の鞍に紫手綱重藤の弓
 を持て廿四差したる切負の征矢を負ひ其身輕げに乗りたる形勢はさも
 勇々しくぞ見へにける頓て浪打つ際に乗り出し沖なる船を見渡せば間
 二町計りと打見えて名残の浪は音高く風は競ふて浪は小車の如くなり
 的は定らず射るに射られぬ次第かなされど又武士の御請致せし上から
 は兎にも角にも射らては叶ふまじと直に小松原に駆け上り駒より飛び
 下りて那須八幡に伏し拜み某が七十五迄の命ならば六十五迄六十五迄
 の命なら五十五迄五十五迄の命ならば四十五迄に身命を締め沖なる的
 を射らせ給へと深く祈願を申つゝ那須八幡聞召され二つともなき命に

引かへて沖なる的を射る心中のふびんさよ、拾二方を的一筋に打守れよとの御宣托有りければ、宗高は駒引き寄せ打乗りて海中へ颯と駆け入り、浮きつ沈みつ一町計りは乗り出しが、駒逸物とは申せども、逆巻く波にせかれつゝ泳ぎ乗てぞ見へにける。矢ころは少し遠けれど弓と矢打交ひ、矢聲を掛けて放ちける。其矢は誤たず扇の金目本よりぶつと射きり、扇は空へ舞上り又海中にさつと落ちければ、平家舷を叩き陸には源氏、艦を駢べ、艦を叩ひて感じける。されば平家は敗軍と極まりて、西國指して落ちにけり。宗高も高名數多あれど、個程の高名は始めにて、其の名を末代に輝し源氏の御代こそ目出度けれ』

○忠 度

吹をろす、比叡の山風烈しくも、木曾の義仲早既に都に入ると聞えしが、急ぎ御幸を促して西の方へを落ちにける。薩摩守忠度は跡見かへりて家々の焼け失せぬるを打眺め、故郷を焼野の原にかへり見て、末も煙の浪路をぞ行くと嘆つゝ、駒の頭を引歸し、僅に六騎相具して、五位の三位俊成の門の戸を細目に押開き、今は憚る身なれども運盡きたれば一門と、身を西海に沈めんは、鏡にかけて見る如し、されば世の中静まりて、勅撰のあらん其時に、腰折れなれど一首を御惠みあらば、假令此身は藻鹽草、八重の鹽路に沈むとも、嬉しからんと巻物を、箴の中より取り出し、俊成卿に渡されけり。前途程遠馳思、鳳山暮雲後會無期、露縷鴻臚曉淚。

と駒の踏みをはいつゝ、南を指して行かれける。俊成卿は之を見送り、あらいたわしや此人は、同じ道踏む友なるに、今は此世の別れとて、涙を袖に

絞りけり「さ」波や志賀の都はあれにしを昔ながらの山櫻花と千載集に
故郷の花と題して讀人知らずと載せたれと言葉の花は後の世にこそ句
ひけれ」

○川中島

天文二十三年秋の半ばの頃かとよ上杉謙信は八千余騎を従へて「川中島
に打て出づ」我此度の戦は武田信玄を追ひめて親しく雌雄を決せむと瀧
巻返す犀川を渡りて陣をぞ取にける信玄は是れを聞くより早く二萬
余騎にて打迎ひ岩を固めて戦はず謙信は氣を焦燥す村上義清に言ひ合
め月影暗き山々の草葉の露を分けさせて彼方此方に兵を伏せ椎夫に擬
せし兵を出して甲斐の兵營に近かしむれば甲斐の兵計略とは露知らぬ

朝霧の間に追まくる待設けたる伏兵は時こそ來れと勝鯨波をドツト揚
げつゝ引包み袋に物を取る如く一騎も残さず打取たり信玄怒て軍勢を
雲霞の如くに繰出せば謙信も備を立てて打向ふ龍躍て雲を起し虎嘯て
風を呼ぶ勢破竹の如くにて入り亂れ入り亂れ攻め戦ふ有様は颯風砂を
卷き百雷岩を抜くに異ならず越後の勢退けば甲斐の軍之を追ひ甲斐の
軍退けば越後の勢之を追ふ兵を合する事十七度何れを勝としらず弓引
くかと思へし信玄が一手の勢の旗を伏せ川を渡りて葭葦の隙を私かに
忍ばせて勇みたる謙信が旗本近く進み寄り面もふらず斬て入る麾下の
軍勢は思はぬ兵に敗られて走る跡より甲斐の兵鯨波を作りて追かくる
宇佐美定行是を見て猛虎の如く憤り憤馬を驅て大音に我手の勢に下知
をなし敵の横合より無二無三に突入て瀧瀬もいはせず追落す信玄度々

矢ひ流れを亂して走る所を、謙信唯一騎赤の栗色の逸しきに鞭を當て堅
十何所まで逃くるぞと、曰ひも果さず切付くる信玄刀を抜くに暇なく、軍
配扇にて受けたれど扇は二つに折られたり、

降ると見て笠取る暇もなかりけり川中島の夕立の雨

と歌ひし如く、二の大刀は早肩先に切り込みぬ、あつと云ふ間に信玄が命
は岩に碎かるゝ泡と消なむ危さを救はんとして軍兵が心は矢竹に勇め
ども水駛くして近寄れず、隊將原大隅鎗をのばして謙信を突きはしたれ
どあだつきし斯くてはならじと鎗を擧げ唯一と打ちにと打たりしに、馬
に當りて馬逸す、謙信馬を鏡めんと手綱かい繰る、其の際に信玄は虎口を
逃れ去りにけり、

鞭聲蕭々夜過河、曉見千兵擁大牙、遺恨十年磨一劍、流星光底逸長蛇、

斯く信玄を打滯したる謙信が心の中や如何ならん思ひやるだに哀れな
り、信玄は肩の痛手に耐へ兼ねて、其の夜の中に軍勢をまとめて出る月影
に道を求めてはるゝと、我古郷に歸りけり、我が古郷に歸りけり、

○虎狩り

文祿元年壬辰の年、太閤秀吉公我朝の諸將を催し、朝鮮國を征し給ふ之れ
によりて、島津修理太夫義久の舍弟兵庫の頭義弘、子息又八郎忠恒、父子相
共に薩隅日三州の兵數萬を引率し、八重の沙路を渡り、彼の地に年を経て、
寒暑風雨を厭はず、常蛇鶴翼の陣を展べて、折々の軍忠萬大の功名、異國本
朝に露見せり、加之同三年の冬、秀吉公虎の肉藥方に用あるにより、虎狩を
して肉を捧ぐべきのよし、木下大膳の太夫淺野彈正少弼の奉書、翌年正月

到來す時しも積雪山を埋み、薙鬼蕨蕨の通ひすら心に任せず、況んや虎狩に於てをや、如月過雪も村消えて、漸く薄氷を踏み、彌生八日に唐島の港より纜を解き、赤國の昌原といへる所に船を寄せて、史編が下に及ばされば、板つさを休めず、同九日に狩場に出られける形勢は、陥穽の固よりも猶増さりて圍み、然はあれど深山遠く住むものなれば、容易く狩り出すことなし、翌十日には尙深く分け入り、險阻を避けず、巖を起し、岡谷をとよまし、數千人の烈卒の聲天に響て狩りけるに、俄に雨降り來りて前後を辨へず、徘徊する所に猛虎一つ走り出て、此處彼處にかけ廻り、既に圍みを出て行くを、島津守右工門尉彰反の郎黨安田次郎兵衛追ひかくれば、立戻り喰はんとなす、其時虎の口に刀を貫き、目のあたりに切り殺せば、馮婦が腋をかいて向ひしにも異らず、暫く有りて又二つ出て、人皆之を見て、義弘忠恒の

立つ所、近く走り來らんかと肝を消す、斯かりける所に忠恒は老父義弘の恙あらんことを怪しみ、揚香が虎に跨かし心地して、暴虎馮河の死を懼れ給はず、馳せ向はんと、の氣色見えしに、忠恒の舍人上野權右衛門と云へる若者走り懸りて切らんとす、則ち彼を噛み殺し、牙にかけ五間計か程になげ落し、彌々威を振ひ、山を靠て嚙くを、帖佐六七捕へくれんと勇みかゝれば、忽向ひ逢ふ頭を三刀切り、直に喰ひ掛かり、股に噛み付き、危く見ゆるを、福永助十郎尾を取りて松の下枝に引掛くれば、時を移さず、永野助七郎、續き合ひ、終に切り殺しぬ、誠に彼の人々の働きは子路が勇をも欺くべし、其の内六七は股痛にて程なく死す、今一つの圍は虎の破り出けり、扱獲物の虎二つ、日本に渡されければ、殿下に於て貴賤の褒美斜ならず、殊更感激の御朱印賜はり、今に禮に藏めて子孫に傳ふ、文書の中にこれあり、其事雖丹

稱の手に附し、寫し出して名を留む。後の人口圖書に對して、英氣を興さる者はあらし」

○本能寺

麻と亂る、戰國の人とし言へば誰れもかな、馬を養ひ兵を練り、糧を收めて、劍を磨す。頃は天正十年夏五月、徳川封せられ、安土城下に入しかば、織田右大將信長はいと、鄭重に迎へんと、直ちに惟任光秀に、饗應の役をぞ命ぜらる。御請致せし光秀は亂れたる世に心得し、都の手振見せばやと、さしも目出度勤めしを、小人輩の言により、善美過分の評をうけ、疑心暗鬼は信長の胸に宿りし時も、時、羽紫秀吉中國より、援けの兵を請ひしかば、嚴命忽ち光秀の首の上になか、りける、光秀私かに思ふ、漢人もあらんに此我れに、

羽紫が命に従へとは、あな情けなの我君やと、齒嚙をなして恨みしは、君に仕ふる人臣の、よもあるまじき事なれど、又信長を見るときは、右大將とも仰がらる、身に疎暴の振舞いと多く、或時は蘭丸をして、光秀の首に鐵扇を加へさせ、又或時は、好まぬ酒をこと更に、我意を透してすゝめしめ、志賀のみやこの領地さへ、三年のうちに事もなく、奪ひ取られむ説を聞き、今又産を傾けて、新に來りし家康に、心盡のもてなしも、琵琶湖の水の泡と消え抑へし、焰らむらくともゆる思ひの光秀が、拳を握りて立ち上り、動く眼の間より、由々敷大事のほの見えしを、露ほど知らぬ信長は、諸將を安土に止め置き、親ら近臣、百余人ひき従ひて、京都なる、本能寺にぞ入にける。時こそ來れと、光秀は、田鶴もあそはぬ龜山に、從子光春等を召しよせて、積るうらみの數々を、數ふる中に、光秀が、眼は血汐ほとばしり、逆立髪は冠を突く

勢を見てとりし光春ともか百千たひ諫むる言葉も聞かばこそ推て謀反に加盟させ暴戻無道の弑逆をば企てしこそあさましけれかくて士卒を打揃へ中國勢を援はんと偽り向ふ大江山心の駒も烏羽玉の暗路をいそぐばかりにてさしも忠義の光秀が追々年も老の坂如何なる道や迷ひけむ無念至極の胸の中亂れて濁る桂川渡らむ駒の足なみは東を指してぞ進みける」

本能寺溝深幾尺 我就大事在今夕 莫棕在手併莫喰

四倉梅雨天如墨 老坂西去備中道 揚鞭東指天尙早

我敵正在本能寺 敵在備中汝能備

爰に始めて軍勢は漸くふた心とさとりしが捨る命は一つぞと時しも六月二日の朝まだき露の身輕き軍兵が本能寺を取圍み門を作りてそ攻め

入りける此物者に信長は寢覺の耳をそばだつれば紛ふかたなり人馬の聲館間近く聞ゆるに枕を蹴て立ちあがり疾く見届けよとありければ森關丸畏り表の方に走り出見越の松に片手をかけ右手をかざして見てあれば雲か霞か白旗に染たる桔梗の紋所見るより蘭丸引かへし光秀謀反と答ふるに嚇と怒りて信長は者其覺悟と呼はりて引矢おつとり打向ひ寄せ来る敵を物ともせずまたいくひまに數十騎を矢繼早に射て落し勢ひ既く拒さしも只一筋と信長が頼む弓弦ふつとされ得たりとつさ入る豪敵をすかさず弓もて打て伏せ兎角するうち信長も左手の腕に痛手を負ひ蘭丸代て拒ぐうち荷直のものもことごとく命を的に戦へど衆寡敵せず信長は最早是迄とや思ひけむ自らやかたに火を放ち煙の中に飛入て刃に伏してそ果にける嗚呼豪邁の信長か空をも蔽はん大鵬臨海の翼

中空に、燕雀のつめになやまされ、終世の望みたえたるは、獅子身中の虫に
 倒れたる、そしりを受けて人皆の口に残るもいたましき』續て關丸を初めと
 し防丸、力丸の小姓ども、いまだ若木の櫻花嵐の山の朝風に、いとも床しき
 香を、止めて散やちりく、あとやさき、百有餘人ももろともに、哀れ本能寺
 の朝の煙りと消えにける、』
 研き得たる、心ゆるすな増鏡、おもはぬちりの、かゝる世の中、
 つらく、古今を按ずるに、人に君たる王侯の、心すべきは徳にこそ、』心すべ
 きは徳にこそ、』

○千早振

千早振る神の御代より、吳竹の世々にも絶えずあまびこの音羽の山の春

霞、思ひ亂れて五月雨の空もとゞろに小夜更て、山郭公鳴くごとに、誰もね
 さまて唐錦龍田の山の紅葉ばを見てのみ、忍ぶ神無月しく、く、て冬の
 夜の庭もはだれに降る雪の、猶消歸り年毎に、持につけつゝ、哀てふ、言をい
 ひつゝ、君をのみ、千代にと祝ふ世の人の、思ひ駿河の富士の根の、燃る思ひ
 もあかずして、別るゝ涙ふち衣、たれる心もやち草の、言のはごとくに皇王の、
 おほせかしてみまさく、の中につくすと伊勢の海の、浦の鹽がひ拾ひ集
 めとれりとすれど、玉の緒のみ、じかき心思ひあへず、猶新玉の年を経て、大
 宮にのみ久方の、晝よる分かずつかふとてかへり見もせぬ我が宿の、忍草
 たふる板間あらみ降る、春雨のもりやしぬらむ』

○王政復古

王政復古の當時を思へば過ぎし慶應の三年の冬の十二月九日の日の初
 めにて『都の空に立歸る、春の光もかきくらす雪消の雲のたちまちに世は
 荊蕀と亂れつゝ山郭公鳴ころの五月やみにはあらねどもあやめも分か
 らぬ墨染の鞍馬の山の山びこに響き動よめる大砲の音はさながら百雷の
 時に落ちる心地して驚き騒ぎ泣き叫び老若男女逃げまよふ都の中はさ
 ながらに鼎の沸くに異らず山ゆかば草むすかばね海行かばみづく屍と
 言建て、身をかためたるつはものゝ鎧の袖に輝くや星の位も三台の影
 薄れゆくさしぐしの曉やみに打出す火矢の煙に吳竹のふしみも見へず
 白鳥の鳥羽も別れぬ折しもあれ空に輝く月と日の錦の御旗九重の大内
 山の山風に蕪しつゝ公家御門押し開かせて出給ふ大將軍の仁和寺の宮
 の威風にあたりては塵かぬ草木もあらじとてふりかへり見る大丈夫が

勇氣も常に百倍し軍よばひも鳴神の鼓き渡る修羅の道斬りつ斬られつ
 阿毘吠喚宮に従ふ参謀の其の面々は東久世島丸を初とし矢守高崎中沼
 等四條五條は旗奉行前後左右を打守り勤王諸藩の鋭兵が火花を散らす
 一戦は國の安危とかたづ飲む帷幕の中に置く霜の紅葉のくれないの丹
 さ心をとりに倒れ重なる屍は敵か味方か彼は誰れ時踏みしだき行
 く戦場の習ひ常なき露を身とかさす劍の柄の間も君を忘れぬ武士の道
 のはてこそ憐れなれ天地も動く震動に焔逆卷き淀の城見るく灰とな
 るはては空を掩ひし黒煙跡かたもなく消へうせて『朝日の光あらはれぬ
 七百年の昔より武門に落ちし政權を治め給ひて檜原の聖の御代の古に
 復し給ひし大御代の長閑き春によろこびの眉も開けて打ちつとひ昔語
 りと過ぎし世を語りつゝ酌む盞に老いたる影もかつ見ゆる此の宴こそ

目出度けれ此の宴こそ目出度けれ

○石童丸

筑紫大守名も高き加藤左工門重氏は、無情を感じ世を捨て、諸國修行に出で給ふ。残されたりし妻や子は思ひ待つこと十余年、父上高野にありと聞き石童丸は母上と管の小笠を傾けて旅のつかれもいとひなく、漸く高野の禿宿、明日は逢はんと喜べど、女人禁制の山なれば母を麓に残し置き、是非なく石童只獨り杖をたよりにたたとし、心細道踏分けて、峯の藥師や瀧不動手を合せつゝ、伏拜み其の夜は其所に假寝して笠の屏風に腕枕、諸行無情と告げ渡る鐘の音いと身にしみて三日二夜も早や過ぎて麓の母を案ずれば後ろに引かるゝ心地して無名の橋に差かゝる左に珠敷

を右に花高明真言唱へつゝ、苳萱道心降り坂見上げ見下す顔と顔石童丸の振袖と高祖の袖ともつれ合ふ、其時袖に取すがり若しこの御山にて、今道心教へて給へと乞ふ姿見れば一人の幼兒が腰に差したる脇差も、見覺へのある顔せに、扱ては不思議と思へども、さはらぬ體にもてなして石童丸に申す様尋ぬる人の名を書きて、札場に立つれば逢ふ事もあらんと聞て泣き沈む、石童丸を苳萱は、憐み給ひ手を取りて、己が住處に連れ歸り、國は何處名は何と問はせ給へば涙ぐみ、國は筑前松浦の加藤左工門重氏が、忘れ形見の石童と聞て苳萱胸迫りせき來る涙留め敢へず、石童其れと悟りしが、若し父上に御在さすや、名乗り給へと云ひければ、あら懐かしの我子よと言はんとしては、名乗り兼ね、其の苳萱は去年の秋、空敷なりぬと宣へば、又も石童わつと泣き、せめて墓場を教へてと請ひければ、苳萱是非な

く墓所に連れ行き指して、これぞ父の墓なると、聞て石童泣き倒れ、前後も知らず歎く様、後ろに佇む苺蓋は、胸も張裂く計りなり、暫くありて漸々と石童丸を抱き起し、涙は佛の爲めならず、一度此御山を下りて、母上にこの事云ひて回向せよと諭されければ、石童泣くく山を降りつゝ、母に告げんと来て見れば、あわれなるかな母上は、石童丸を待ち兼ねて、麓の野邊に枯れ残る草葉の露と消え玉ふ嗚呼、父上には生き別れ、又母上には死別れ、天にも地にも便なく、後に便るは姉、獨り逢ふて此由語らんと、歸りて見れば、姉も又此の世を去りて跡もなし、最早尋ねる人もなし、高野に登りし其時に憐み給ひし御僧より、外に便りは泣くばかり、亦も高野に苺蓋の庵尋ねて御弟子にと乞はれて、苺蓋是非もなく、共に連れ立ち國々を修業なしつゝ、信濃なる國に住居を定めつゝ、子弟と名乗る計りにて、親子地藏と唱

へよと遺言し玉ふ哀れさよ、信濃に名高き善光寺、石童寺の本尊に「親子地藏の御在すなり」嗚呼親子の縁は斯く迄に切りても切れぬものなりと、今は昔の物語り、南無や大悲の地藏尊」

○俊基朝臣東下り

落花の雪に踏み迷ふ、片野の春の櫻がり、紅葉の錦衣て歸る、嵐の山の秋の暮れ、一夜を明す程たにも、旅寝となれば物うきに、恩愛の契違からぬ「我が古郷の妻子をば、行方も知らず思ひ置き」年久しくも住みなれし、九重の都をば、今を限りに願り見て、おもはぬ旅に出て玉ふ、心の内ぞ哀れなる「憂をば留めぬ相坂の關の清水に袖ぬれて、未は山路を打出の濱沖を遙に見渡せば、埴ならぬ海にこがれ行く、身を浮舟の浮き沈み駒もとろと踏なら

す、勢多の長橋打渡り、往來人に近江路や、世をうねの野に鳴く鶴も、子を思ふかと哀れなり、時雨もいたく、森山の木下露に袖ぬれて、風に露散る篠原や、篠分る道を過ぎ行けば、鏡の山はありても、涙にくもりて見へはかぬ、物を思へば夜の間にも、老蘇の森の下草に、駒を止めて顧みる、古郷を雲や隔つらん、番馬醒ヶ井、柏原不破の關屋は、荒れ果て、猶ある物は秋の雨の、いろ我が身の尾張なる、熱田の八劍伏拜み、塩干に今や鳴海瀉、傾く月に道見へて、明けぬ暮れぬと、行く路の末はいつくと遠江、濱名の橋の夕鹽に、引く人もなき捨小舟、沈みはてぬる身にしあれば、誰があはれと夕暮の、入相なれば今はとて、池田の宿に着き玉しに、

東路のはにふの小屋の、いぶせきに、故郷いかに、戀しかかるらん、と長者の女が詠みたりし、其の古の哀れまで、思ひ變さぬ涙なり、旅館の燈

火幽かにして、鷄鳴曉を催せば、匹馬風に嘶きて、天龍川を打渡り、小夜の中
山越え行けば、白雲路を埋み來て、そことも知らぬ夕暮に、家郷の空を望み
ても、昔西行法師か命なりけりと、詠じつゝ二度越へし跡迄も、浦山しくぞ
思はれける、隙行駒の足はやみ、日己に亭午に昇れば、餉參らす程とて、輿
を庭前に下し、轅をたいて警固の武士、近づけ宿の名を問ひ玉へば、菊川と
まらすなりと、答へければ、承久の合戦の時、院宣書きたりし、答に依りて、光
親郷關東へ、召し下されしか、此の宿にて誅せられしとき、
昔南陽縣菊水汲下流、而延齡今東海道菊川宿于西岸、而終命、
と書きたりし、遠き昔の筆の跡、今は我身の上になり、哀れやいと増りけ
ん、一首の歌を詠じて、宿の柱にそ書かれける、

古もかゝるためしを、菊川の同じ流れに、身をや沈めん、

大井河を過ぎ玉へば都にありし名を聞きて、龜山殿の行幸の嵐の山の花
 盛り、龍頭龍首の舟に乗り、詩歌管絃の宴に侍りし事も、今は二度見ぬ世の
 夢と成ぬと思ひつゝけ玉ふ、「島田藤枝に懸りて、岡邊の真くつ裏枯れて、物
 かなしき夕暮に、宇都の山邊を越え行けば、葛根いと茂りて道もなし、昔業
 平の中將の住所を、求むとて、東の方に下るとて、夢にも人に逢はぬなりけ
 りと、詠みたりしもかくやと思ひ知られたり、清見淵を過ぎ玉へば都に歸
 る夢をさへ通さぬ波の關守に、いと涙を催ほされ、向ひはいづこ三保が
 崎、與津浦原打過ぎて、富士の高峰を見玉へば、雪の中より立つ煙り、上なき
 思ひに比べつゝ、明る霞に松見えて、浮島か原を過ぎ行けば、鹽干や淺き船
 うきて、ありたづ田子の白からも、浮世を渡る車かへし、竹の下道行きなや
 む、尾柄山の峰より、大磯小磯見おろして、「袖にも波は小ゆるぎの急ぐとし

もはなけれ共日數つもれば、七月廿六日の暮程に鎌倉にこそ着き給ひけ
 れ」

○菅公

靈ちはふ神代はるけき昔に、秘日の命と申し、は、日の大神の御言もち、此
 葦原の國見形「神のさやぎを撫て鎮め」天津日嗣の御ために、高き功をあら
 はせり、又玉垣の宮の御代、野見のすくねと云ひけるは、殉死の風を止めむ
 と、おもほしめしし天皇の、大神慮を輔けつゝ、うべなりけりな、その奇の菅
 原氏は代々を經て、學者も多く、功臣も少なからざる、其の中に、道眞公と聞
 えしは、學識博く才深く、忠良無比の人なるを、かしてき宇多の天皇は、深く
 たのみにあはしめし、藤氏の權をさへむと、右大臣まで舉給ひ、なほ進む

へき身の榮えあはれ花には嵐あり月には雲のならひにて延喜の御代の
明らけき光もおぼふ中空の雨のぬれ衣ほすよりも泣きて訴へし言の葉
に法皇これをとめんと出てます道もさへぎられ遂に大宰の權の帥御
子たち二十余人もちりくに流されたもふぞいたはしきをりしも春の
梅の花それも露にやしめりけん今はとこれを御覽して

東風ふかばにはひおこせよ梅の花あるしなして春な忘れぞ
聞きてかうべを誰も皆涙にこそはむせびけめかくて配所の大宰府に
き年月を経たまへどたゞ謹慎の御心に纒に見るは都府樓の瓦の色の外
はなくたゞ聞く者は観音寺鐘の聲のみさやかなり又あるときは山わか
れ飛び行く雲のかへり來る空にのぞみをかけたまひまたあるときはそ
のかみの御宴の事を思ひ出て

去年今夜侍清涼 秋思詩篇獨斷騰

恩賜御衣猶在此 捧持毎日拜餘香

これらの詩歌を味へば朝廷をうらむ御心のあらざりけるは明らけし
るを雷火となりわたり落ちぬといふはいかならん昔根の朝臣時平公
たれて死せりと云ふはなほ世の應報の理にいひ傳へたる説ならん心
くしの沖つ浪かへらん時も俟ち得すてくもりかちなる秋の夜の長き思
ひの末遂にかたふく月に空遠く雲かくれしは惜しけれど誠忠なんぞう
づもれん太政大臣正一位天滿宮と仰がれて宰府北野の神垣はいよ
高く世に榮へ又水くきのあと清く流れて海山の末の末迄て御社のあら
ぬ里なく心なきひなの童のたぐひまで手習ふ時のはしめより尊ぶ神と
ぞなりにける

○勿來關

前九後三の戰場に功名立てし君が威は、北は奥州外が濱、南は遠く白河の關のかなたにいたるまで知らぬものとしてなかりけり。一年勿來の關に來て駒を留めて古郷の山をはるかに眺めみる君が心のやる瀬なく頃は彌生の花盛り、何處も同じ春景色、君が頭の小髪も、君が戰の白旗も、關の櫻と諸共に花とばがりに見えにけり。花は散れども君が名は、一度駒を止めしより、口すさみにも皆人の言はぬものこそなかりけり。

○威海衛

名も高き渤海灣の咽喉なる威海衛の戰は、吾が聯合艦隊司令長官伊東中

將の手足の如く率ひたる水雷艇の功は、聞くもなかく、勇しく敵の艦隊勇々しくも威海衛の要害に防材堅く布設して、灣内深く潜めつゝ戰ふ様もあらざれば、吾が海軍は朝の雨雪に身を浴し、夕の風に櫛けづり、只遠近を取り巻きて空しく時日を過せしが、吾が陸軍が日島と劉公島を除く外、處々の砲臺攻め取りたりとの信號の旗を見て、伊東司令長官は、急に水雷艇の司令を召し、水雷攻撃を命ずれば、藤田少佐、今井大尉の兩司令、姿勢を正し申す様、そは吾れくの望む所なり、されど亦僅か防材の功れ目を、目差し、暗礁多き海なれば、誓ふて功を奏せんもの、水雷艇は悉く再び此處に歸るまじ、さらばと言ひて立上り、精忠面に表れしを、伊東司令長官も、そゝろに感じ、落す涙も國の爲め、思ひ切つてぞ分れける、夜も早や更けて月影は、威海衛の山にかくれ、あやめも分けぬ眞のやみ、敵兵夢を結ぶ頃、吾が

水雷艇は第三艇を先方として、百尺崖のあなたより波をけつてぞ進み入る。其の勢矢の如く、港灣内につき入れば、斥候の敵艦之を知り、信號の光りきらめくや、灣内俄にさわぎ立ち、打出す速射の砲丸は、雨か霰と降る中を、吾が艇隊は物ともせず忠義に身をや捨子舟、縦横無盡に走廻る。第九號艇は索早くも、巨艦近に進み寄り、魚形水雷を發すれば水烟一度にどつと上げ、命中の音天地もさけん斗りにて、艦隊中ばは沈みける。其の明の夜も此所や、彼處に水雷の物音凄し、斯く金城鐵壁と頼みたる、旗艦定遠を初めとし、來遠威遠も沈められ、戦ふ力も盡きぬれば、兵士斗りは助けんと、頃は、明治の二十八、二月十二日の朝風に、なびくや力なく、も、白旗立て、降服の使節の舟ぞ見えにける。武士は物の哀れを知るとかや、伊東司令長官は、丁提督の乞を入れ、些か心を慰めんと、贈り物をぞ遣さる。丁提督は悄然と

して、吾が事既に終れりと、心ひそかに自害して、武人の道をぞ守りける。嗚呼、昨日までも、今日迄も、清國にぞうたたる、北洋艦隊司令長官、丁汝昌とも、仰がれし身の、斯く成り果つるも、敵ながら、亦と得がたき英雄の、末路の程こそ是非なけれ。此に威海衛を占領し、砲聲全く静まりて、風雲忽ち一變し、威海の淵にうつ巻きし、鎮遠號を初めとし、濟遠廣丙號、其外砲艦數十艘、橋頭高く雨を呼び、雲を起せし、黃龍も、大和劔に角を絶ち、旗は忽ち日の丸の輝き渡る海軍旗君が御稜威は天の下、仰がぬ人はなかりけり。

○夜討會我

この時二人の扮装は、母の賜ひし小袖をば、たすき十字にあやどりて、共にたいまつより照らし、敵工藤の陣屋をば、『探せど如何に人はなし』如何はせ

んとたゞずめる折しも見ゆる燈火の影に二人は身を潜め見れば工藤の局なり祐經いづこと尋ねれば先頃すてに陣屋がへ不忠ながらも是れまての御恩に報ひ候はんいざ此方へと招きける雨戸すらりと排し開けば工藤左衛門祐經は前後も知らず伏にける見るに二人の兄弟は天にも昇る心地して十郎五郎に討てと云ふ五郎は兄に譲りける聲を掛くれば祐經は枕元なる刀をば取つて起きんとする折を十郎早くも肩先を五郎がついで首を取る父の敵を報ゆれば命は露程も惜まじと猶も與へとさつて入る」

○那須與市

その時與市宗高は免れ難き君命に屹と心を決しつゝ射頃やすこし遠か

りけむ駒を浪間に泳がせて「一反許りぞ進んたる」頃はやよいの空はれて春風いたく吹きすさみ船を揺り上げ揺り下し覗ひ定むる術もなし宗高馬上に目をとぢ南無や八幡大菩薩殊には那須の大権現我れ此扇を射損せば唯此の箇に自滅して再び人には見ゆるまじ神もし哀れと思し召さば此の矢外させ玉ふなと意の中に祈念して眼を開き見渡せば風漸くに吹き風きて的の扇の日の丸も最とも射よげに見えにけり宗高感喜に堪えずしてむら重藤の弓を取り鎬矢ぬいて打番ひ満月の如くに引きしぼり矢聲もろとも切て放せば覗ひたがはず扇面の要際をば一寸計り残してこそは射切りたれ鎬は高く兵と飛び扇は虚空に舞ひ上り折りふし吹きくる春風にもまれて波上に落ちければ敵も味方も一同に射たりや射たりと寝る聲水にひびきて凄まじき」

ぬならんに、髮髭の黒さを怪しけれ、樋口は年頃馴れ遊びて見知りつらん、樋口召せとて召されたり、樋口只一目見て、ア、ナ無憾是れぞ正し、齋藤別當にて候ひけりと申せば、木曾殿それならんには、はや七十にも餘り白髮にこそなりぬらんに、髮髭の黒さはいかにと宣へば、稍ありて樋口涙を抑へて申しけるは、實盛常に兼光に逢ひて、物語り候ひしは、六十に餘りて軍陣に向はんときは、髮髭を染めて若やかんと思ふなり、其の故は、若殿原に争ひて先を駆けんも大人氣なし、又老武者とて人に侮られんも悔やしかるべしと申し候ひしが、誠に染めて候ひけるぞや、洗はせ御覽候へと申しければ、義仲さもあらんとて洗はせ玉へば、漆黒と見し髮髭は忽ち白髮にとなりにける、實盛の心中いとど哀れにこそと、並み居る武士ども、鎧の袖をばぬらしける』

○重盛

天皇の統御しる、この皇國を平けく、豊かに安く護れよと下し給ひし大將の、印授を帯ぶる我なるに、如何程父の意なればとて、など従はん大逆に、従はれんや大逆に、領地は天下の半すぎ、位人臣の極に居り、子は三鼎に、女は后、一門繁榮類ひなし、此ぞひたふる大君の厚き恵によるぞかし、然るに御恩を報ひずして、却て弓を引かんとは、げに獸にも劣りたる、あなあさましの御心と、父を諫むる忠孝の、苦熱の涙時雨なし、衣の袖にふりかゝる厄禍ありと知るや、否、父を諫めぬ不孝者、君に刃むかふ不忠奴等、もし宮闕に向はんか、先づ我が首を刎よとて、宗盛以下を睨まへつ、いざや來れと御供を、引連れまして邸へは、歸り玉ふぞ傷まし、平家の運も今は早や、日影傾く

夕暮の無常の風の一陣は、小松が原をいざない吹き、何かは侍たん千代の影、終に果なく朽木とぞ、なられし公を惜みても、尙あまりあることぞかし。

○阿新丸

初段

日野中納言、藤原資朝公は、後醍醐帝の密旨を奉じ、北條高時をほろぼして、大御心をやすめんと、『思ひをこらし給ひけり』茲に土岐の頼員は、此資朝卿と、一味のちかひたてながら、妻に心のひかされて、ある夜のむつごとく、ちばしりしが基にて、事たちまちに六波羅へ、洩れ聞えしかば、高時は、しほしも猶豫なさはこそ、資朝卿を佐渡と云ふ、遠き島根に流しけれ、いたわしや、資朝卿の御子、阿新丸は、世にもかしこき母君と、仁和寺あたりのかくれ

家に、住せ給ひて世の中の無常を深くかこちつゝ、またの逢瀬をたのしみに、指折かぞへ待ち玉ふ、其の甲斐もなく、高時は、長崎高資の言葉を入れ、佐渡の守護、本間山城入道に下知をなし、資朝卿を殺さむと、いふ企を傳へ聞き、阿新丸は、此時、十三才にてましませど、親を思ふほす真心は、いはほも通す、桑のゆみなき敷にいる父上の、其の御最後を見届て、共に冥土の旅まくら、結ばむものと思ひたち、突然母君に、此事をあかし玉へば、母君は、聲ふるはして、涙ぐみ、わすれもやらぬ、去年の夏、御父君につれなくも、別れまつりし、其後は、御身ひとりと分れては、此の母親が生ながらふべくも思ほへず、ましてや、佐渡とやらむは、人も通はぬ、怖ろしき、離れ島とも聞ゆるを、幼き御身如何にして、行くべきたよりのあるべきぞ、思ひととまり給へよと、宣ふ中に、御聲は、涙の雨に打しめり、さぬのたもとも見らうちに、しほるばかり

りになりけり、阿新丸はきこしめし、恩愛深き母君の仰せにそむくも不孝なり、又父上の御最後に、おくれ申すも不孝なり、嗚呼母君に仕へんか、御父君を如何にせん、御父君に仕へんか、御母君をいかにせん、いづれにしても兩親に、孝を全ふすることは、とても適はぬ此の身なり、今宵の中に自害して御詫申す外なしと、をさな心の一すぢに、おもひ詰たるありさまを、此方におきます母君は、とく見そなはし其の上にて、いたくとめなばまのあたり、又憂目をや見るらんと、思ひかへしてさまよひは、兎に角にも阿新が望みにまかせておかんとて、心さゝたる中間を、差添へられてかくれがを、いまます君がうしろ影見送る慈母のかなしみは、なかく筆につくされず、昔時めく御家も、今は乗べき駒さへも、あらぬなげきを打すて、はきもならぬ草鞋に、昔の小笠を傾けて、露はおかねど草枕、思はぬ旅にいで給ふ、心

の中こそ殊勝なれ、

二段

去程に阿新丸は、やがて越前の敦賀より、船に召されて海原の、八重の沙路を打渡り、『佐渡の國にぞ着き給ふ』たよる家とてあらざれば、本間が館におとづれて、某は日野中納言資朝の一子にて、阿新丸と云ふものなり、父が此世にいますうち、相見んものと玉敷の都を出て、足引のけわしき山も、海神のいかなる浪路も、はよからずはるく、越えて此佐渡に、まかり下りしあはれさを、聞き分けられて、對面をゆるし玉へと、懇にくり返しつゝ、宣へど、本間なか／＼聞入ず、資朝卿をいれおさし、牢屋の内を目の前に、僅かへだて、此方なる、持拂堂にぞいれにける、資朝公は、此事を、さごいめされて

打しほれ、生て逢ふこと叶はずば、死して千草の葉かくれに、ひとりまろびて思ひ寝の夢に見もせん逢いもせんと、悲しみ給ふ御すがたよその見る目もあはれなり、初日も西に入相の鐘の響ともろともに行水を奉れば、資朝卿は最後の時になりぬとて、用意の駕籠にぞめされける、爰より十丁ばかりを隔たる、さびしき河原のありけるが、程よき所に人夫らが、駕籠昇きすえて控ふれば、資朝卿臆し給ふ氣色なく、敷皮の上に居直りて、世辭の願をぞかゝせ給ふ

五蘊假成形

四大今歸空

將首當白刃

截斷一陣風

其の奥に、嘉暦元年五月二十九日、日野中納言藤原資朝と、配させ給ふやいなや、河原のあしに身をこがす、ほたるの影は太刀風に、さつと散りてぞ失

せにける、やゝありて御なきがらを、阿新丸に奉れば、阿新丸一目見たまひて足手もたへて、倒れ伏し、嗚呼情なき本間かな、海山越えてはるく、と、來りし我れに告もせて、なきがらばかりあたへしは、かへすくも口をしと、御袖顔にあてたまひ、しばし人目も憚からず、泣きふし給ふありさまは、實にことはりと知られたり、暫くありて身を起し、無念のなみだ押拭ひ、めし使ひたる中間に、其なきがらを守らせて、高野山に送りつゝ、御身はあとに留りて、思ひにしづみ給ひしは、これ又深き所存のあること、のちにぞ思ひしられける、

三段

去程に阿新丸は其爵を踏さんと、ひるは病といちはりて、旅の衣をしきた

へ○の○「床に伏してぞ忍ばるゝ」夜はひそかに起いて、本間がねやを問ひ給ひ陰もあれば親子の中ひとりたりとも刺し殺し腹を切らんと思ひつめしのびくゝておはせしがある夜あめかせ烈しくて、番の者供油断なし、おもひくゝにいねければ願ふ所の幸といさむ心を押し沈め、そつと伺ひ見給ふに、本間が運や強かりけむ常のふしどを替へたれば、猶奥深くしのびいり、さがし給ふに二間なる奥にあたりて燈火の影明かに見えなれば、板戸の外に身をちよめ首さしのばし見給ふに、目ざす仇にあらずして、資朝卿を斬りたりし、本間三郎にてありければ、案外なれど是れもまた時にとりての仇なり、あるじの入道にまさるとも、よもや劣れはいたさじと、ふた足三足すゝみより、息をこらして立ち給ふも、とより腰に大刀はなし、殊にともしびあかければ、千にひとつも目をさまし、聲たてられては一大事、い

かどはせんと腕をくみ、案じわづらひ給ひしが、折節夏の事なれば、蛾と云ふ虫が燈火の影を慕ひて飛び来るを、うちに入れむと思ひつゝ、障子を少し明け給へば、あたりまばゆき燈火の光りはつひに虫のため、さへてあとなくなりにけり、仕濟たりと思ひつゝ、かれが所持なす一刀をとるより早く、抜き放ち、首落さんとしたまひしが、いねたる人を討たんと、死人を斬るにことならず、目をさまさせて斬らんとて、足踏ならし立掛りはたと蹴放す小枕の音に驚き起あがる、本間がうへにまたがりて、臍の上よりたゞみまで柄も拳もとほれよと、力にまかせ刺し通し、かへす太刀にてのど笛を心のまゝに掻きさつて、うしろにあたる竹村の、うちを目掛けてしづくとかくれ給ひしふるまひは實にを、敷くぞ見えにける」

四 段

去る程に番のものはこの音に驚かされて狼狽し、とるものもとあへず、
 馳せあつまりてともし火をとぼして見れば、こは如何にをさなき人の足
 しあとは、「阿新殿に相違なし」いざ打とらむと松明をかざして庭のすみま
 てもさがせど影もみとめ得ず、阿新丸は人手に渡らぬ其さきに自害せん
 とは仕給へど、またさきく望みある身の上なれば、今こゝを逃れて帝
 の御馬前に功名手からあらはして父の宿意も達しなば、是こそ忠臣孝子
 なれと思ひ返してふる雨にぬれてなびける吳竹の枝にすがりてやうゝ
 と高き梢によじのぼり、目にあまりたる大堀をやすく越えて鳥羽玉
 の夜はまだ深き丑寅のころほひなれば幸ひと、磯邊のかたを心掛け、たど

り給へど夏の夜は、まだ宵ながら、あけぬるを雲のいづこに月やどるらむ
 と、謠ひし如く横雲は、はや遠山の端にあけ離れ、見あらはされぬ其のひま
 に、麻や蓬のしげりたる、ふかみがなかに身をかくし、追手を逃れ給ひけり、
 終に其日も暮れければ、又忍び出て行き玉ふを、りから神も孝行の志をや
 感じ給ひけむ、いたく老ひたる山伏にはたと行合ひしかと、事の仔細を宣
 へば、山伏聞て哀に思ひ、御心安くおぼしめせと、足もたゆめる阿新丸を、肩
 にかきのせ足ばやに、ゆけば程なく荒磯の浪打つ際に出でにけり、遙の沖
 を見渡せば、今もや船の出なむと、するを手をあげさし招き、呼はりけれと
 掛子共は、更にこれをば耳にせず、櫓を立て漕いだす、山伏大にはらを立
 て、柿のころもを結びあげ、漕ぎ行く舟に立ちむかひ、いらたか敷珠をさら
 く、と音もしげく押揉て、秘密の呪文をとなへ、明王の本誓、さらすは権現。

金剛童子、天龍夜叉、八大龍王、其船こなたへ返へし給へと肝膽をくだきつ
 いをどりあがりて祈りければ、其の念力や通じけむ、俄かに逆風吹起り、逆
 卷なみに大船もくつがへらむとする形勢に、揖子共大に恐をなし、山伏の
 御房助け玉へと手を合せ、膝をかゝめて伏し拜み、船をなぎさに漕戻す、左
 こそあらめと山伏は、阿新丸をたすけ上げ、水主の乞にまかせつゝ、屋形の
 うちに入れば、波風忽ちしづまりて、船は湊を出にけり、此時きのふの追
 手共、百四五十騎馳せ來り、其船戻せと鞭をあげ、皆同音に呼はれど、順風に
 帆をあげてはせ行く船のことなれば、見る／＼影もきえうせて、船は其日
 の夕まぐれ、越後の府にぞ着きにける、嗚呼、阿新丸の真心は、天津みそらの
 月と日の光りと共にあがねさす、我が日の本にかゝやけり、我が日の本に
 かゝやけり、

○楠公

初段

延元元年五月のはじめ、足利尊氏、同左馬頭直義、大勢を引率し、都へ攻めの
 ぼる趣、新田左中將義貞、急使をもつて奏聞ありければ、「宸襟もつともやす
 からず、楠判官正成をめされ、急ぎ兵庫に下向して、義貞に力を合せ、合戦す
 べし」と仰せらる、正成かしまりて奏聞しけるやう、尊氏既に、筑紫九ヶ國
 の勢をひさる、上洛することなれば、さだめて勢は、雲霞の如にぞ候はむ、味
 方のつかれ果てたる小勢にて、機にのりたる太勢にかけあはせ、尋常の如
 く戦はむ、味方の敗北は、鏡にかけて見る如し、急ぎ新田をめさせられ、前
 如く山門へ、御臨幸在らせらるべし、しからは正成も河内へくだり、畿内の

勢を以て、河尻をさし塞ぎ、尊氏を都へ進ませ、双方より、兵糧の道を断らき
 らば敵は次第々々におとろへて、味方は日々に集るべし、此機に乗じ、新田
 は大手より押よせ、正成は搦手より攻め上らば、朝敵を一戦にほろぼさむ
 こと、何の疑か候ふべき、新田も此所存とは、存じ候へども、敵を眼のあたり
 に受けながら、軍もせて引揚げむ事、人のおもはくもいかじあらむと、終に
 兵庫にさしへしならむ、合戦は兎も角も、軍は始終の勝こそ肝要なれ、能々
 敵慮を廻らされ、公議を定めらるべしと、奏聞ありければ、坊門の宰相清忠、
 進みいで、申さるゝやう、正成の云ふところ、そのいはれなきにあらざれ
 ども、征討の爲に、差下されたる節度使が、いまだ戦もせざるさきに、帝都を
 すて、一年のうち、兩度まで、山門へ御幸あらせられむとは、一は帝位の輕き
 に似、一は官軍の道を失ふなり、たとひ尊氏、筑紫の勢を率ゐ上洛すとも、昨

年東八ヶ國の兵をしたがへて、のぼりし時の勢にはよもすぎじ、凡そ戦の
 初めより、味方の小勢をもつて、敵の大勢を攻なやましたるはいくたびぞ
 是れ武略のすぐれたるにあらずして、全く聖運の天に叶ひし故なり、しか
 らば戦を、帝都の外に決し、敵を鐵鉞の下に、ほろぼさむこと、何の子細かあ
 るべきぞ、只時を違へず、正成は差下されむこそ、しかるべけれど、奏聞あり
 ければ、公議これに定まりて、其旨敕諭あらせらる、正成は最早せむかたな
 しと、屈竟の精兵、五百余騎をしたがへて、五月十六日に都を立て、急ぎ兵庫
 へぞ下りける、爰にまた正成の一子、正行は、今年十一歳なれども、父の決意
 を察せしにや、何處までもと従ひ行き、正成思ふ所存のありければ、櫻井の
 宿において、正行を膝元ちかくめしよせて、つくづく教へたとされけるは、
 彼の獅子と云ふ猛獸は、子を産みて三日をすぐるにあたり、數千丈の絶壁

より谷底深くなげおとす其子獅子の器量あればちゆより勿かへりて
 死せずと云へり況むや汝は人界に生を得て既に十一歳にもなりぬれば
 父がをしへは守るべし此たびの合戦は天下安危の定まるるところわれ討
 死せむ其後は尊氏天下に縦横し敵慮を惱まし奉らむ汝正行其不義の勢
 ひに恐れ身命を助からむため多年の忠烈をすてかれに服従することな
 かれ一族郎黨の一人たりとも生きながらへてあるならば金剛山に引こ
 もり敵よせ来らば命を由基が矢先に掛け義を紀信が忠に比し一歩も引
 くことなかれ此肌のままよりはひとせ都攻のありしときかたじけなく
 も帝より下し賜ひし繪旨なり今は是をば讓るべし父が志を継ぎ帝に忠
 義をつくしなば是を親への孝行と申し含めて正行の顔のあたりに手を
 あてし是が此世の見終めとおもへば猛き大丈夫の心もいまはみだれが

みかきあげつゝもいくたびかふりかへり見てなくくも名残をしげに
 別れける世の盛衰を觀察し一子を殘して無き跡までの義を鞠むるこ
 ろの中こそ殊勝なれ

二段

時しも五月二十五日、煙波渺々たる海の面、十四五里が程に、數萬の兵船帆
 をあげて寄せきたる、かゝる所に、須磨の上野と鹿松の岡、鵜越の方より、ふ
 たつ引兩四ツ目結び、左り巴とその旗、五六百旒朝の嵐にひるがへし、雲霞
 の如くに寄かけたり、正成これを見て、舍弟帶刀正季に申さるゝや、敵海
 陸をさへぎりて、味方は陣を隔てたり、今はのがれぬところなり、まづ前な
 る敵を追ひまくり、うしろの敵と戦はむ、正季これを承り、我手七百餘騎を

前後にそなへ、大勢の中へ割て入る、直義の兵ものども、菊水の旗を見て、能き敵なりと思ひければ、取りこめて討むとしけれども、正成正季東より西へ切て通り、北より南へ追なびけ、能き敵と見受れば、馳ならべ、組むて落ては首を取り、雑兵の奴輩は、ひと太刀打てかけちらす、正成と正季と、七たび合て七たびわかる、其心偏に直義にちかづきて、組て討むと思ふにあり、遂に直義の五十萬騎は、正成の七百餘騎に切立られて、又須磨の上野の方へぞ引かへす、直義の乗たる馬は、鐵を蹄に踏たて、ひるむ所を、正成の軍兵ども是を見て、いざ討とらむと駈よるを、藥師寺十郎次郎只一騎、蓮池の堤にとつてかへし、駒より飛び下り、長刀の石突をとりのべて、よせくる敵のひらくびむながひの引廻し等、切ては刎倒し、倒しては刎ぬ、またくひまに七八騎ほど切て落す、其のひまに、直義は駒を乗りかへて、やうく落ち

のび得たりけり、尊氏此よしを見て、荒手を入れかへて、直義をうたすなと下知すれば、吉良、石堂、高上杉の人々、六千餘騎にて、淡川の東へ駈出で、あとを切らむと取りまきたり、正成正季、又取てかへし、此勢に渡り合ひ、うちつうたれつ、火花をちらして戦へど、軍兵ども、其の身鐵石にあらざれば、次第くは打死し、残るは僅七十三騎なり、此小勢にて敵を打破り、落なば落べかりけるを、正成都を出る日に、思ひ定めし事あれば、皆打死と覺悟して、淡川の北にあたりし一と村へ、七十三騎引揚て、やすらふうちに一族は、軍兵どもともるともに、腹掻切てどうせにける、正成正季に申さるゝやう、そもく最後の一念により、善惡の生を引と云へり、九界のあひだに、いづれか願なると問ひければ、正季打笑ひ、なゝたび人間に生れ來て、朝敵をほろぼさばやとこそ、存じ候へと申ければ、正成世にうれしげなる氣色にて、罪

業深き悪念なれ共、我も左様に思ふなり、いざさらば、同じく生をかへ、此本懐を達せむと誓て兄弟差ちがへ、一ツ枕に伏されけり、嗚呼此最後こそ、實に武士のかゞみなれ、嗚呼此最後こそ、實に武士のかゞみなれ、

○木崎原合戦

初 段

世間の現象を觀ずるに、積善の家には餘慶あり、積悪の家には餘殃あり、尤慎むべきは此道なり、爰に薩隅日三州の大守、島津修理大夫、義久と申し奉るは、忝も清和天皇の御苗裔、鎌倉右大將、征夷大將軍、源頼朝公の御子、左衛門尉、忠久公より十六代目の御嫡孫なり、文武二道の名將にて、上を敬ひ下を撫て、仁義正しく、ましませば、靡かん草木はなかりけり、御舍弟には、兵庫

直忠平公、左衛門尉、歳久公、中務太輔、家久公、迎何れも、文武の名將也、其外家の子郎等に、至る迄、皆忠勤を勵ませば、古今稀なる御果報、近國他國の者迄も羨まざらんは、なかりけり、是は扱置き、爰に又大職官の御末に、伊豆國の住人、伊藤入道若心が、末孫に、伊東左京義祐、迎て、弓取一人おわします、其比日向國都の郡に住給ふ、其心あくまで不敵にして、仁義の道を學ばず、上を敬ひ下を憐む心なく、我意に任せて舉動へば、恐れぬものこそなかりける、去れば古人の言葉にも、君臣を見ることが手足の如くするときは、臣君を見ることが服心の如くす、又君臣を見ることが土芥の如くするときは、臣君を見ることが唯寇讐の如くす、曰く義に従ふときは、聖なり、縁に従ふときは、賢なり、然るに義祐道に違ひし有様を、譜代好みの家臣ども、諫言すと雖も、曾て用ゆる心なく、却て疎み遠ざける心の内こそ、淺間しけれ、大欲心の餘かに

や、大隅薩摩に發向し、我三ヶ國の主となりて、子孫榮華に榮えんと、明暮便
を廻らせども、飯野の城には、兵庫頭忠平公、智仁勇の三徳を兼備へ給へば、
小勢を以て叶ふべき様は更になし、去れば球摩の城主相良に加勢を乞は
んとて、家の子に伊東加賀守祐安と申者あり、是を近付け、事の様子を言ひ
含め、相良方へぞ遣しける、頓て球摩にも成ぬれば、案内乞ふて内に入る、直
に相良に對面し、能くこそ御出候なり、事の子細を聞く上は、必ず御加勢申
さんと左も潔く返答す、先首途を祝はんと、酒など様々進めつゝ、約束違は
ん其爲めに、小金作の太刀一振、加賀守へぞ引れける、祐安悦喜限りなく、約
東堅く相極め、日向を差してぞ歸りける、義祐此由を聞召し、斜に悦び、家
子郎等相集め、内議評定取々也、爰に野尻の城主に福永丹波守祐友と云ふ
ものあり、仁義を守る勇士にて、少も憚るところなく、進み出で申す様、某退

て思案を廻らし候に、彼の島津殿と申すは、悉くも清和天皇の御末、多田の
滿仲より以來、弓箭の家に譽れを取り、政道を堅くし給へば、御家の家臣に
至るまで、數代の好みを忘るゝ者、逆は聞ざる所也、皆忠勤を勵ませば、心を
變ずるもの、逆は稀にも聞かざるところなり、是は強敵の大敵なり、御當家
の兵と申すは、譜代の士少くして、皆方々の假武者也、殊に相良の某は、一皮
心の表裏心と承れば、無二の味方とは言ひ難し、小勢を以て大敵の剛敵へ
働き給はんと、譬ば螻蛄の斧を以て、龍車に向ふが如くなり、是は又事新し
く申す事にて候へ共、御先祖祐高公は、島津久豊を御聲に取給ひ、其の威光
を以て日向國拾一ヶ國を打平げ、個様に榮へ給ふも、是偏に島津殿の御恩
なり、思を得て思を知らぬは、木石に等し、左こそ佛神三寶も悪しと思召さ
るべし、先我々共の所存には、島津殿の御旗下に成らせ給ひ、先陣の御働き

忠義を盡させ給ひなば、九州殘らず鳥津殿の御手に入るべし、其時こそ二國三ヶ國をも鳥津殿より給はるべし、然あらんときは御家長久、御子孫繁昌たるべき事何の疑ひか候べき、先此度の御合戦は思召留り給へ、平に々々と理を盡して諫めける、義祐素より無道人のことなれば、以ての外に腹を立て、今に始めて福永が賢人達の可笑さよ、理非は兎もあれ角もあれ、球座に約束する上は、早打立て諸共と、周章ふためき勢揃へ、先一番に伊藤加賀守祐安、同じく新三郎祐信を兩大將として、七百餘騎を差遣はし、頼て福永を前に召れ、いかに福永弓矢の家に生れ來て、臆病未練の舉動かな、我に二度對面無用と言ひ捨て、我が身も二千余騎を引具して、二陣に續きて出給ふ、天理に背く此度の合戦危しと言はん人者こそなかりける、兎にも角にも義祐の心の内こそ淺間しけれ。」

一一 段

去程に飯野にまします、兵庫頭忠平公は、智惠第一の大將なれば、兼てより伊東方へ忍びの者を入れ置き給ふ故、此事早くも聞召され、方々の味方々々へ飛脚を越して告げ玉ふ、先第一番に菱刈表の軍兵共、勇み進んで馳集り、忠平公を初め、川上三河守忠智、岡助七忠賢、上原長門守、山田新助、同名彌九郎、村尾源左衛門尉、五代勝左衛門比志、島紀伊守喜入、攝津守、黒木播磨を先として、屈竟の兵者共三千余人を相勝り、木崎原の關所々々に伏せ置き、伊藤勢を菱刈表へ遣り過し、跡を取切て皆悉く、打亡さんと待ち玉ふ、是を知らて伊東勢、早や加久藤迄は發向す、菱列表の兵者共、願ふ所の幸と、五十騎百騎は爰の峯、彼所の谷のつまり、に馳せ集り、關の壁を措げ、弓鐵砲

を放ちかけ、あめき叫んで戦ひける。伊東方は小勢にて、珠摩の加勢を今や
 と待ちけれど、相良何とか思ひけん、一騎も勢を出さねば、前後の敵に
 取圍まれて十方に暮て居たりける。斯かる所に伊東加賀守の郎等に、柚木
 騎丹後守政家と申す者あり、文武二道の勇士にて、黒皮威の鎧着て、五枚甲
 の征矢を負、五人張の塗込藤の弓を持ち、鹿毛なる馬に乗りたりしが、進み
 出て申様、誠に人の心と川の瀬は、一夜に替る習ひにて、覺悟の前にて候得
 ば、今更驚くべき様は更になし、斯る時命を惜み生んとすれば必ず死す、唯
 一筋に思ひ切り、一方を打破り通るべしと、諸軍勢に下知をなし、小林さし
 て引て行く、後れ軍の習にて、我先にと足を亂して落ち行けば、路より敵は
 群がつて、時の聲を造り掛け、繁くしとうて追ひかゝる、丹後守之を見て、斯
 くては叶ふべからず、某一人跡に留まり防ぎ矢を射て、味方落さんと、後陣

遙かに引さがり爰に控えし兵者は、伊東の郎等、柚木、騎丹後守政家と申す
 也、近國に隠れもなき強弓の精兵、矢繼早の手利なり、日頃音にも聞せ給ふ
 らん、今は能く見よ、汝等共、矢先に敵は嫌ふまじと、五人張に十五東引、綾り
 差取引、結射る程に、矢面に進む兵者共、生死は知らず、二十八騎は射て落す
 此勢に恐れをなして、勝に乗りたる島津方の大勢、しどろになつて暫しが
 程は進み得ず、其の隙に伊東勢漸々引て行程に、木崎原にもなりぬれば、忠
 平公の御勢此由見るよりも、伊藤勢は一騎も残らず討取れと、時の聲を堂
 とあげ、あめき叫んで戦ける、伊東勢も爰を破られては、叶ふまじと、面も振
 らず、遮る敵を弓、右手に打伏せ、切先より火花を散し、鎧をけづり、鏑を割
 り、切羽の金も未塵になれと、爰を先途と責戦ふ、未だ勝負も見へざるに、島
 津方より川上三河守忠智、同助七、同忠賢、上原長門守を先として、物に馴れ

たる屈竟の兵五百餘人を相勝り、兎有る木蔭を馳せ廻り、義祐の旗下に慕
 地に切て入り、縦横無盡に切立れば、思ひもよらぬ伊東方風に木の葉の散
 る如く四方にさつと散にける。島津方大勢前後より引包み追伏せし討
 つ程に、時を移さず伊東方名有る伊藤宗右衛門、伊藤權之助、落合源左衛門
 尉、佐土原四郎兵衛を先として、五百余人は悉く名乗て打死す。其外敵兵共
 其所や彼所のつまりく、追詰められて、討るゝ者は數知れず、斯る所に
 伊東加賀守祐安は、落る味方の勢に確立られて、心ならずも五町計りは落
 ちたりしが、兎有る高見に馳せ上り、臆病至極の奴原共、何國まで落行くぞ
 返せ戻せと味方の勝を大音あげて呼はれど、引立ちたる勢のことなれば
 耳にも更に聞き入れず、我先にと小林さして引て行く、祐安心に思ふ様、我
 れいやしくも伊東殿の家の子と生れ、此度先陣の大將を承り、まだ一軍の

利も得ず、何の面目ありて古郷へ歸り、人々に對面せん、いざ打死せんと駒
 の手綱を引戻し、大音揚て名乗様、茲に控へし武士は伊藤の家の子に、伊東
 加賀守祐安と申す者也。君恩を報せん、其爲めに唯今うち死致す者なり。我
 と思はん者あらば懸れ、と呼はりける。島津方に於て、澁谷上總守國重
 此言葉を聞くより、嗚呼優しくも返させ給ふものかな。我れ社古へ北原が
 郎等、澁谷上總守國重と申すものなり。日頃旁々音にも聞つらんと、言儘に
 一同に馬より飛び下りて、互に打物扱き持て、追つまくりつ火花を散して
 取ひける。未だ勝色も見へざるに、同重いざ組んと討物投捨て懸寄るを祐
 安共に討物投捨心能くむずと組、國重危く見えければ、國重が郎等二人之
 を見て、主を打たせては叶ふまじと、弓手妻手よりむづと組上を下へと返
 しける。祐安元より大力なれば、物の數とも思はず、彼二人の者共の肘を搔

摺み此所彼所へかつばと投げ捨て國重を心安く取て押へ已に首を搔んとする所に國重が弟軍八國直兄を打たせては叶ふましと落重り祐安が草摺をたゝみ上げ柄も拳も通れくと三刀刺て呼はる所をはね返し終に祐安が首を落す仕済したりと言ふ儘に凱歌をどつと揚げ陣所をさして引て行く痛はしや祐安が歳を積れば未だ惜かる三十一其の年の年號を申せば元龜三年壬申正月四日也國重弟の手柄の程は天情勇士擧まれやと皆一同に感じける

三段

去程に加賀守が郎等一人打漏されて新三郎に追ひ付き斯様くと告げければ新三郎之を聞き一偕は中々祐安殿打死とかや爾大將の者若が一人

打れ一人歸りて如何せんいざ打死せん附従ふもの一人も残らず落行て義祐の先途を見るべし暇取らす是迄なりと言ひ捨て駒の手綱を引返し島津方大勢の中へ割て入り面も振らず火花を散らし戦ひしが向ふ敵七八騎を討取我身も數ヶ所の疵を蒙り今は是迄也と思ひ切り馬より飛び下り自害せんとする所に敵の兵透間もなく馳來り祐信心得たりと言儘に眞先に進む兵共諸膝薙ひて切伏る二番に續く兵と引組て差進へ共に空敷成にける痛しや隆信が歳を積れば未だ惜がる年は生年十七歳天晴勇士の兵者かなど惜まぬ人こそなかりける爰に又柚木崎丹後守政家は只一人踏止り是は義祐の郎等に柚木崎丹後守政家と申す者なり忠平公の御内に名ある士候はと申上度子細ありと大音揚げて呼はれど勝に乗たる雜兵共耳にも更に聞き入れず我先に打取んと遮るを丹後守此由

見[△]る[△]よ[△]り[△]理[△]非[△]を[△]も[△]知[△]ら[△]ぬ[△]奴[△]原[△]共[△]其[△]所[△]立[△]退[△]け[△]と[△]言[△]儘[△]に[△]遮[△]る[△]敵[△]を[△]弓[△]手[△]妻[△]手[△]
 に[△]切[△]捨[△]て[△]忠[△]平[△]公[△]の[△]旗[△]本[△]に[△]真[△]一[△]文[△]字[△]に[△]駈[△]け[△]來[△]る[△]忠[△]平[△]公[△]此[△]由[△]御[△]賢[△]じ[△]て[△]是[△]は[△]
 伊[△]東[△]に[△]於[△]て[△]も[△]名[△]有[△]る[△]士[△]と[△]聞[△]く[△]子[△]細[△]を[△]答[△]へ[△]よ[△]と[△]の[△]玉[△]へ[△]ば[△]旗[△]本[△]の[△]兵[△]共[△]丹[△]後[△]
 守[△]を[△]中[△]に[△]取[△]圍[△]む[△]丹[△]後[△]守[△]は[△]馬[△]よ[△]り[△]飛[△]下[△]り[△]打[△]物[△]彼[△]所[△]へ[△]捨[△]て[△]い[△]か[△]に[△]方[△]々[△]呼[△]を[△]
 靜[△]め[△]て[△]聞[△]き[△]給[△]へ[△]我[△]等[△]が[△]主[△]の[△]義[△]祐[△]は[△]島[△]津[△]殿[△]の[△]御[△]恩[△]を[△]蒙[△]り[△]子[△]孫[△]榮[△]華[△]に[△]榮[△]へ[△]
 し[△]人[△]な[△]り[△]し[△]が[△]斯[△]る[△]逆[△]心[△]を[△]企[△]て[△]天[△]理[△]に[△]背[△]き[△]申[△]さ[△]る[△]故[△]今[△]度[△]の[△]合[△]戰[△]は[△]皆[△]悉[△]
 く[△]敗[△]軍[△]す[△]家[△]の[△]滅[△]亡[△]遠[△]か[△]ら[△]ず[△]我[△]々[△]共[△]も[△]皆[△]島[△]津[△]殿[△]に[△]降[△]參[△]申[△]上[△]度[△]候[△]へ[△]共[△]忠[△]臣[△]
 は[△]二[△]君[△]に[△]仕[△]へ[△]ず[△]と[△]本[△]文[△]の[△]言[△]葉[△]に[△]恥[△]ぢ[△]唯[△]今[△]爰[△]に[△]て[△]打[△]死[△]致[△]す[△]也[△]茲[△]に[△]幼[△]少[△]の[△]
 一[△]子[△]を[△]忠[△]平[△]公[△]に[△]頼[△]み[△]奉[△]る[△]哀[△]れ[△]貴[△]と[△]き[△]も[△]賤[△]き[△]も[△]子[△]を[△]思[△]ふ[△]道[△]に[△]迷[△]ふ[△]と[△]は[△]今[△]
 こ[△]を[△]思[△]ひ[△]知[△]ら[△]れ[△]たり[△]此[△]事[△]申[△]さん[△]其[△]の[△]た[△]め[△]に[△]是[△]迄[△]參[△]り[△]候[△]也[△]早[△]首[△]召[△]れ[△]候[△]へ[△]
 と[△]甲[△]を[△]扱[△]て[△]彼[△]所[△]へ[△]捨[△]て[△]問[△]糺[△]して[△]ぞ[△]居[△]たり[△]しが[△]忠[△]平[△]公[△]此[△]由[△]聞[△]召[△]れ[△]一[△]子[△]の

事は扱置き、汝も降參仕れ平に、との紛へば、こは難有御説かな、さあら
 ば御共申さんと腰の差添引ぬき、笛の鎖をかきはなし、朝の露と消にけり
 大將初め見る人聞く人鎧の袖をぬらしける、斯様、くに打死し、彼方此方
 に時刻を移す、其の隙に、大將の義祐は虎口を逃れ、漸々都の落ちたりしが
 島津の兵者共、我先にと追ひかくる、忠平公此由御覽なされて、勝に乗じ長
 追して悪かるべし、先引取れや者共と、諸軍勢に下知をなして引き玉、忠
 平公は伊東勢に打勝て、飯野の城に引歸し、定めて義祐今度の恥を雪がんと
 再び打つて出るべし、油斷するなどのぬひて、遠見を出し忍びを入れ置
 き、御用心は隙もなへ、茲に川上三河守、上原長門守、初めとして、家老の面
 々申様、臆病神の附果たる伊東勢、何程の事が貸出すべさ、此勢に境目豎打
 越し、御働さ候は、手に立つ者は候まじと、勇み進んで申上れば、忠平、此

由聞召され、此儀尤も去りながら、黄犬却て虎を噛み、窟鼠却て猫をかむと云ふ事あり、伊東も名ある大將、侮りては悪かるべし、假令亡ぶる共、味方大勢打取るべし、時節を待とて宣ひて、境目堅く打寄り、日月を送りておはします、是は扱て、置き、伊藤、入道、義祐は、今度、木崎原の合戦に、家の子、郎等、強り、少く打なされ、無念至極はなかりける、今一度境目を打越へ、余多の城を攻め落し、會稽の耻雪がんと、明暮便りを廻させても、臆病神に誘れて、妻子を匿し、落支度をぞ仕たりける、茲に野尻の城主に、福永、丹波守、義友は、此由を聞き、伊東殿の御家滅亡すべき時節は此時也、我度々諫言しけるに、忠言耳に逆ひ、却て不興彼り、此三年が程は對面なし、我れ賤くも人界に生を得、忠臣の義をつくし、君を諫むる甲斐もなし、無念至極に思へども、是も譜代の主君なれば、恨みる所は更になし、傳へ聞けば、伊東殿、未だ前非を悔ひ給は

ず、再び薩摩に發向せんと、の企て有るよし、君辱しめらるゝ時は、臣以て死すと言ふ事もあり、我れ家臣の身として、今一度諫めざらんも、耻辱の至りなるべしと、一通の諫言狀を認めて、態と名字を書かさりしが、夜半にまぎれて忍び入り、伊東殿の門前に立置きて、宿所をさして歸りける、兎にも角にも、福永が所存の程こそ、天晴剛の勇士かなと、皆一同に感じける』

○俊 寛

初 段

あだまもる、筑紫のはての薩摩、瀧、鬼界が島のあら磯に、『治承元年夏五月』流され給ひし人々は、右近衛の少將成經、檢非違使平の入道康頼、法勝寺の執行俊寛、僧都の三人なり、うき艱難を此島に送り給ふ、其うちに、大赦の命を

ぞ傳へらる思ひもかけぬことなればあらありがたき御説やと三人ひと
 しひさまづきうやくしくも令状を押敷きて成経はうれしき涙に種
 ぬれて聲もふるへてさらくと讀得給はぬ形勢を康頼取りてさうく
 によみあげたまふ趣きはこのたび中宮御産の御所隣に非常の大赦行は
 るにより鬼界が島流人のうち成経康頼を赦免すと讀み給ふとき俊寛
 はあつと驚きかしらを揚げ何とて某が名を讀落し給ふぞと言葉せはし
 く問給へば康頼も打驚きて聲うるみ實にいぶかしきことなれど御名は
 更に見え侍らず俊寛聞いて扱は筆者のあやまりか今ひとたびよませ給
 へとありけるを使の元康進みより某都にて承り候も成経康頼のふたり
 は御供いたせ俊寛ひとり此島に残し申せとの御事なり嗚呼こは如何
 に何事ぞ罪も同じく配所も同じ非常も同じ大赦なるに獨り誓ひのあみ

にもれ沈むは何の因果ぞやげふまでは三人一所にありてすらさもあそ
 ろしくすさまじき荒磯島に只ひとり離れて海士の捨草の浪のもくづに
 あらねどもよるべもしらぬうき身やと歎くにかいもなごさなる千鳥と
 共に鳴くばかり思ひにあまる俊寛はさきに讀みたる巻物をいくたびと
 なく打ひらきあとくり返し見玉へど成経康頼とあるばかりにて僧都と
 も俊寛ともかける文字は更になしこは又夢かまぼろしか夢なればさめ
 よくとこのたまひて獨り涙にむせびてし

玉兎晝眠雲母地

金鶏夜宿不崩枝

寒蟬抱古木

鳴盡不回頭

といふ詩の心は俊寛僧都の身の上と今こそ思ひしられけれ」

二段

去程に時刻うつりてかなはじと、楫子の言葉にせかれきて、名殘は更につ
 きねども、成經は夜の衾を、康頼は法華經一卷を、各かた身に殘し置き、「さま
 く、なぐさめ參せて、」船に乗らんとし給ふを、俊寛袂にすがりつゝ、元康聲
 をあらうげて、僧都は叶ふまじと云ひ放つ、嗚呼うたてやな公の私といふ
 ことあれば、せめてはむかひの地までなりとも情にのせてつれ給へと、涙
 を袖につゝみかねのたまふ聲のをわらぬに、哀れや無情の楫子共が、櫓權
 を振揚うたむとす、俊寛今は、叶はじとや思ひけん、すがる袂の手を放ち、一
 時は宿に歸らむと、踵はあとに歸せども、かへらむものは心にて、楫子の無
 情も元康の怒る言葉も打ち忘れ、又立寄りて出船の綱にとりつき引とむ

る、楫子共綱をしきつて、船を深かみに押し出す、せむかた涙にをどりこみ
 船よくと呼はれど、かへす摸様もあらざれば、ちからをよばず俊寛は、も
 との渚にひれふして、彼の松浦さよ姫の歎きも我に及ばじと、悲しみ給ふ
 もあはれなり、時を感じては、花にも涙をそいぎ、別れををしみては、鳥にも
 心を動かすと、いふことあれば、人として、なげき別れのかなしみを、しらぬ
 ものこそなかるらめ、されば成經も、康頼も涙ながらにさし招き、われら都
 に上りなば、善きやうにとりなして、やがて御迎に參るべし、心強く待たれ
 よと、宣ふ聲もかすかなる、たのみを濱のまつかけに、聞やいかにとゆふ、涙
 のよするまに、俊寛は、只手を合せ頼むぞと、呼はる聲も呼ぶ聲も、次第
 や々に遠ざかる、船もかすかに人かけも、消えて見えなく成にけり、消えて
 見えなくなりけり、

○四條畷

初段

時しも御代は正平の三年の春の初めにて、吉野の山は白妙の雪に梢も埋
められ、崩出る木々の下草は、みな足下の足利に「蹈れ敷かれて哀れにも」延
る力もなよ竹や、折ても操變へまじと、誓ひし公は、去年の冬、吉野に詣て大
君の龍顏拜し奉り、亡父正成が先帝に仕へて忠を盡したる、其の赤心を受
繼て、我とも心筑紫瀉浪と寄せ來る賊軍を拒ぎ、戦ひ退けて、君の敵慮休め
んと思へど、我は不幸にも、病の多き身なる故、空しく月日を過す内、若しや
病に冒されて、墓の上に玉の緒の絶ゆる事の有るならば、君の爲めには忠
ならず、なき我父に孝ならず、病の爲めに果敢なくも、黄泉の鬼とならんよ

り、此所に寄せ來る賊兵と、刃を交へ潔く、生命を捨て、忠孝の道を全ふせ
んものと思ふ心の有明の月の君とも稱へつる、隆資卿に細々と告ぐるを
何時か大君は、御簾の内より聞し召し、最とかしこくも行在の南の椽の端
近く出御したまひ拜謁を許したまひし其時に、朕は汝を股肱ぞと思へば
深く己が身を厭ひ慎み必らずも、生て歸れと有がたき御語下し給らば、朝
臣は地に額つき、只伏拜むばかりにて、答へ奉らん言の葉も、涙の雨に伏折
れて、掻け兼たる風情なり」

二段

朝臣は漸々立上り、あつき涙の降りかゝる、鎧の袖を拂ひつゝ、「徐に行在を
退りいて」族郎等を隨へて、先の皇帝の御陵に、參詣て、前に跪き、戦ひ若も

利あらずげ生て返らぬ覺悟故此の世の別れ告げんため遙々此所に参りしと云ふも濁れる涙聲濡てを量き袂をば絞りもあへず立上り如意輪堂に赴きて御佛拜み奉り夫れより堂の壁の面に死を誓ひたる義士の名を記し、數は百余人朝臣は鏃取出し落つる涙を拂ひつゝ氣を張りつめて粹弓引き返さじと思ふよりなき數に入る忠臣の名をぞとむる名歌をば彫りつけ玉ひ去はとて吉野を發し河内なる四條畷にうち向ふ時は二月の廿日すぎ七日の日にぞ有にける』

三段

一夜の夢に去年と暮れ明れば年も新玉の春とはいへどまだ寒き北山も万し吹まゝに旗翻し攻來る八萬余騎の賊軍と四條畷に戰ふて身をも家

をも打忘れ只大君の御爲と矢猛心を振起し力を極めて身を盡し拒ぎし甲斐のあらばこそ篠突如き矢の雨に痛くも其身を痛められ肉裂け血沙滴りて今は一步も進まねばいざ是迄と大君の在せる方を伏し拜み賊の方をば打にらみ骨肉分けし同胞と互にさしつさいれつゝ飯盛山に程近き四條畷の夕けむり消て歸らぬ旅の空ふむ道柴の露とこそなられし公ぞ悼ましき去れど朝臣の功積は譽となりて千代よろび後の世迄も著るく吉野の花と諸共に今尙四方に香しく忠臣孝子の鑑ぞと内外の國に薫るなり内外の國にかをるなり』

○扇の的

初段

屋島の内裏のこなたなる牟禮高松の古家にあたり火の手ありといふ程こそあれ、見るく四方に廣がりて、黒煙天をこがしけり、阿波の民部大音揚げて、今の火の手は手過にあらず、敵より火を掛けたりと覺ゆるなり、軍の用意せよとて馳せ廻はる時は元暦二年二月十八日まだ東雲の程なれば、城中俄かに騒ぎ立ち上を下へと返しつゝ、制止も聞かて混亂し、主を捨て親をかへりみず、我先にと逃げ迷ふ、斯る所に源氏の大將軍、九郎判官義經は、紺地の錦の直垂に、紫裾濃の鎧に、鍔形打たる白星の甲に、紅の母衣懸けて、二十四指したる小中黒の征矢を負ひ、重藤の弓に、金作の太刀を佩き、黒き馬の太く逞しきに、白覆輪の鞍置きて、島山重忠、熊谷直實、平山季重、土肥實平、佐々木高綱、其外宗徒の郎黨を引具して、城の追手に寄せ來り、木戸の内目かけて切つて入れば、平家の方にて音に聞ゆる、越中の次郎兵衛盛

繼、上總の惡七兵衛景清等、切前を揃へて打つて、出て追ひつまくりつ、受けつ流しつ、鎧を削り、鎧を破り、火花を散して、攻め戰ふ、組て刺違ふる者もあれば、眞甲切られて倒るゝもあり、手負を助くる暇もなく、死骸をあぐる隙もなし、互に名ある勇將、猛士が、爰を専途と争ふさまは、何時果つべしとも見えざりしに、牟禮高松の黒煙、次第く覆ひ來て、已に矢倉も落ちければ、平家も今は叶はじと、各船に取り乘て、沖を遙に漕ぎ出てぬ、行方定めぬ、瀬の上、須磨や明石の浦々も、寄るべき港の捨小舟、あきふしなれもしらま弓、いづしか今は引かへて、今日の味方も明日の敵、敵か味方か、矢か楯か、淵瀬も知らぬ舟の中、心細くも帆を揚げて、風に任する身の上は、思ひ知られて哀れなり、爰に平家の陣より、花やかに飾りたる、一葉の舟、渚に向ひて、漕ぎ寄する、頃は二月二十日の事なれば、霞も風に打なびく、柳の姿に、紅の袴着て、袖

空被ける女房あり、日の丸の扇を杖に挿み舟の船頭に指し立て、是を射
 よとぞ招きける。此女房こそ建禮門院の后立の時、千人の中より撰まれた
 りし玉虫の前舞の上手と聞えけり。歳は今年十九歳、雲のびんづら霞の眉
 姿貌に至る迄、緒にかくとも争てか筆の及ぶべき折節、夕陽に映きていと
 色こそ増りけれ。鬼を欺く丈夫が互に生死を争ひて、船と陸とは立分れ
 弓矢たばさみ、拳を握りにらみ合ひたる折にしも、あな面白の景色やと、人
 皆ともにいひはやすそ、ろ浮き立つ人心、波も玉散る海の面に、花に霞
 に別れ來し、都の春のことをしも思ひ浮べて眺めつゝ、判官是を見給ひ
 て、島山重忠を召され、あの扇射よといふに、射ずしておくも無念なり、汝一
 矢に射落せとありければ、島山重忠畏りて、君の仰家の面目、こよなき事と
 存ずれど、是は申々、敷階のわざなり、重忠打物取ては鬼神といふとも、更に

辭退は仕らず、弓矢の藝はつたなく候へば、もしも射損じて笑を受け候は
 重忠の耻はさることなれども、源家一族の御瑾瑕と存するなり、そもい
 下野國住人那須太郎助宗が子、十郎兄弟は、弓矢の達人と承りれば、箇様
 の小物に賢く仕らんと申しければ、直に十郎を召されける。十郎長り御
 膝の上は、子細申す可くも候はねども、去年一の谷落のとき、弱馬くして弓
 手の臂を砂につかせ侍りしが、疵なほ癒えずして、定の矢仕るべくも候は
 ず、弟與市宗高は、一定仕り候はん、仰付られ候へと、弟に譲りてぞ扣へける。

二 段

宗高其日の裝束は、紺紺の垂直に、緋威の鍔着て、鷹角反甲猪首着のなし、廿
 四指したる、中黒の矢を負ひ、重藤の弓を持て、赤銅作りの太刀を佩き、宿禰

日馬の馬の逞しさに、洲崎に千鳥の飛び散りたる、具鞍置きてぞ乗たりける。判官の召に従ひ、馬より下り甲を高紐にかけて畏る。判官申されけるは、あの扇仕れ晴の所作なるぞよ不覺すな。宗高承り子細申さんとすれば、伊勢の三郎後藤兵衛など、面々の故障に、日も早や暮れんとす。兄の十郎さし申じたる上は、仔細申すまじ海上暗くならば、ゆゑしき味方の大事なり。疾く急き玉へと云ひければ、宗高せん方なく、甲を童に持たせ、烏帽子引立て、薄紅梅の鉢巻きして、手綱掻くり、扇の方へぞ向ひける。生年十七才の若武者なれば、色白くして小髭生ひ、弓の取様馬の乗姿、優なる男にぞ見えたりける。渡打際に打よせて見れば、弓手の方には主上を初め奉り、國母建禮門院北の政所、二位殿官女、其外船を漕ぎ並べ、櫻梅桃李と飾られて、屋形の前段御簾も几帳もさしめきたり。妻手の方には、平家の大將軍、大臣殿を初め

とし、平大納言教盛、新中納言知盛以下、平家の一門、其餘の諸將居ならびて、數百の兵船を乗淨べ、鎧の袖を列ねて之を見る。後の方には源氏の大將軍、九郎判官義經を始め、士大將に至る迄て、各駒を乗据えて、拳を握りかたづ呑み、鳴を靜めて音もなし、遠近皆遠淺なれば、鎧の菱縫の板敷爪の漂るまで打入れて、はやりにはやる我駒を、手綱ゆり据えゆりすまじ、鱧むれど、寄する小浪に物懼れ足も止めず狂ひけり。扇の方を見渡せば、あはい七段ばかり隔てたり、折しも西風吹き來り、舟は波間に漂ひて、扇も串に定らず、風のまに／＼廻りけり。宗高運の極りと、眼を閉ぢ心を靜め、南無八幡大菩薩別けては、下野國宇都宮那須大神明、弓矢の冥加有るならば、扇を坐席に定め玉へ、源氏の運盡き、家の果報も是れまでならば、矢を放たぬ先きに、海中に沈め給へと、心に深く祈念して、眼を開き打見れば、風も少しく吹弱

り、扇も座席に定りぬ、さては神力指添へたり、我が物なりと思ひつゝ、矢比は少しく遠けれど、十二束三伏の鎗矢抜き出し、重藤の弓に打番ひ、暫し固めて思ふやう、扇の面の日の丸は、日を射るの恐れあり、要のほとりを射き、らんと、心を静めて切て放つ、其矢海上遠く鳴りひいさ、狙ひ違はず要より、一寸ばかり上を射切たり、要は船にとまりて扇は空に舞ひ上り、暫しか程はさまよへて、海へ颯とぞ落ちにける、折節夕日に輝きて、波にたゞよふ有様は、立田の山の秋の暮、初瀬の紅葉にことならず、源氏は鞍の前輪を叩き、箆をたゞき、平家は舷を打鳴らし、どつと揚げたる鯨波の聲、山も崩れて海も湧くばかり、暫しは鳴も止まざりけり、嗚呼宗高が此の日の暮れ、幾万年を経るとても、朽ちぬ程こそ目出度けれ、」

○小松の操

初 段

忠孝共に全くし、文武を兼ねて身に具へ、世の變に遭ひ難に耐へ、とにもかくにもあやまらぬ、人のためしはむかし今、多く得がたきものなるを、「嵐に雪におそれずして」遂に操をかへざりし、小松の内府重盛が世に盡したる心こそ、思へばぞ、哀なれ、熊野詣ての道にして、都の變を聞きしとき、たゆとふ父を勵まして、即ち急ぎ走せじし、待賢門の戦に、強き敵をも事とせず、進み向ひし、其の勇は、平將軍が再生と、人の言るも道理なり、世の名は平治、地は平安、我は平家を、此の三ツの吉の兆ある此の軍、平定無論と、軍卒の心勵まし進みしは、才智とこそはいふべけれ、「子息資盛若くして、時の攝

政基房の参内するに遇へるとき、下乗せざるを咎めつる。前驅のものゝ暴行を、淨海怒りて基房に、再び耻を與へしも、重盛深く之れを慚ぢ、遂に我子をいまして、伊勢に遠ざけ追ひけるは、尙朝廷を尊敬し、禮を守るのみならず、父淨海があやまりを、捕ひ得たりと稱すべく、「おどろし平家の所爲には、さらに似すてぞ殊勝なる。」

二 段

時は治承の御代の頃、西光康頼、俊寛等、ひむがし山の獅子ヶ谷深く謀りし會合も、思はずわすれし酒瓶の、「口もれ易き世の習ひ」上聞くより、淨海怒り立ち、院の御所まで追らんと、俄に兵を催せば、一族郎黨ことごとく、思ひ々ゝの、の、出、て、立、に、物、見、か、た、め、弓、矢、取、り、馬、よ、旗、よ、と、さ、わ、ぎ、立、ち、走、集、ま、れ、る

人々、は、西、入、條、の、邸、の、内、櫓、に、居、こ、ば、れ、庭、に、立、ち、熊、手、薙、鎌、と、り、に、以、し、め、き、あ、ひ、て、ぞ、見、え、た、り、ける、此、時、内、府、重、盛、は、主、馬、の、判、官、盛、國、が、息、ま、き、來、り、て、事、の、さ、ま、つ、ぐる、を、聞、け、ど、お、ど、ろ、か、ず、靜、に、直、衣、取、り、よ、そ、ひ、車、副、ま、て、物、具、は、一、人、も、見、せ、ず、し、て、出、て、來、り、大、將、宗、盛、出、迎、へ、袖、を、ひ、か、へ、て、言、へ、ら、く、は、今、か、ば、か、り、の、大、事、あ、り、入、道、殿、さ、へ、甲、冑、を、既、に、帶、し、お、は、せ、る、に、御、裝、束、は、如、何、に、ぞ、と、言、は、せ、も、は、て、ず、重、盛、は、そ、も、大、事、と、は、何、事、ぞ、國、家、に、係、る、事、を、こ、そ、大、事、と、は、云、へ、是、は、只、一、家、の、私、事、と、い、ふ、べ、き、の、み、又、重、盛、は、大、臣、の、貴、き、職、を、帶、び、た、る、に、近、衛、の、大、將、又、重、し、み、だ、り、に、物、具、す、べ、き、か、と、尻、目、に、か、け、て、過、ぎ、行、け、り、淨、海、は、る、か、に、こ、れ、を、見、て、法、師、に、似、氣、な、き、身、の、さ、ま、を、さ、す、が、心、に、は、じ、つ、ら、ん、黒、染、の、索、絹、を、取、り、あ、へ、ず、引、か、け、着、た、れ、ど、金、色、の、か、く、れ、も、あ、へ、ず、見、え、け、る、を、絹、ひ、き、合、せ、つ、み、て、も、包、み、兼、ね、た、る、胸、の、

内ほころばしてぞかたらひける』

三段

重盛つくく父の顔まもりつとけてありけるが、あふるゝ涙おしぬぐひ容改めいへる様、嗚呼此日の御有様、現の事とも思はれず、平家の運も今日は早や、『既に限りの時ならむ』重盛が世も之れ迄と思ひ定めて候へば、意の中にある事も残らずこゝに申さん、御心静めて聞き給へ、そも此世の中に四恩と云ひて重大の恩は四つある、其中に朝恩を以て重しとす、普天天下は廣けれど、いづれが王土にあらざらん、卒士の涙も王臣にもるゝものなき理は、元より心得ましまさむ、我が家の祖貞盛は、天慶の賊將門を討ち平げし功あるも、勳賞受領に猶過ぎず、又御父の刑部卿得壽院造進の賞典を

みてゆるされし、内昇殿すら世の人はみな驚けりと申さずや、去るを太政大臣のうへなき御身となり給ひ、重盛輩の身を以て、猶總門の列に加り其上國郡大半は我一門の田園たり、この大恩はいづくよりうけたるものとあぼし召す、此事をもかへり見ず、そゝろいかりをかけまくも、賢こき院の御所にさへ移さんとする御心は、物に狂はせ給へるか、若し父君が此事をおしてもなさん御心ならば、重盛はたゞ意を決し、院中守護に参らんのみかくするときは、人の子の父に及むかふ道理なり、嗚呼かなしいかな、君が爲め、忠ならんとすれば、孝を欠き、また家のため、孝ならんと欲すれば、不忠不臣の名を負ひ、是を思へば、重盛が進退すてにきはまれり、願はくは今重盛が頭をめされ賜らん、然して後は、父君が、おもほすまゝにあるべしと、且つ論じ且つなげき、一心こめて云ひ放ち、再びこらへず泣き伏せば、一座の

人も皆共に、涙にくれて言葉なし、さしも暴威の入道もことほり込めし誠
 には、いかで争ふことを得ん、然らば今は何事も、われはいはし院参も思ひ
 とまりてありぬべし、素より子孫のためにこそ心もさわげ吾れは只、老い
 て後世に望なし、汝よろしく量へと、いゝすてゝこそ入りにけり、「嗚呼此小
 松の枯れずして、大樹と榮へ、大宮の柱となりて世にありせば、木曾の嵐も
 さゞかりは、意ひのまゝに吹かさらむひるが小島の荒浪も、たやすくたち
 は起らじを、世の浮きふしを、思ひぬの、夢に三島の神まうて、法師の首も見
 たりけむ、世の行末も白波の、千々にくだくる岩田川、淨衣に透きし薄襖の
 鈍色をさへよろこびし、心よわきはをしけれど、忠孝文武完全の、良臣の名
 は其殿に、運ねかゝげし常燈の光りよりげに、まさやくく、「世々を照して臣
 の子の、かゝみとこそはなりにけれ」鑑とこそはなりにけり、」

○吉野落

初 段

美吉野の花も龍田の紅葉も、夜半の嵐に誘はれて、仇に費り行く時は、又「増
 て哀に思ふなり」爰に二階堂出羽の入道々、薙は元弘三年正月に、六万餘騎
 を随へて、大塔宮の日頃より、籠らせ給ふ大和なる、吉野の城にぞ攻め寄す
 る、菜摘川の邊より、吉野の方を見上れば、赤旗白旗錦旗、深山嵐に打靡き、雲
 か花かとあやしまれ、麓には敵の大勢隙間なく、甲の星を輝かし、鎧の袖を
 つらねしは「錦を敷くに異ならず、峯高ふして道細く、山險して苔滑かなり、
 幾千万の鋭兵が、必死となりて攻むるとも、たやすく落つ可しとは思はへ
 ず、斯る處に同敷十八日卯の刻より、兩陣堂と関を擧げ、敵攻め上れば攻め

下し互に勇氣を振ひつゝ、爰の谷彼方の巖に走せ散りて、攻め合ひ開き合ひ、射手をそろへて散々に射立たれども、寄手の者は命を知らぬ坂東武者、親討たれても願ず、主斃れても取合はず屍を乗り越へく七日が間、息をも付かず攻め戦ふ、血は草芥を染め、屍は路頭に横たわる、斯かる處に寄手の案内者岩菊丸は足輕共に下知をなし、金峯山の險を越へ、木の根岩角よち登り、在所く火をかけて、鯨波をつくつて攻めければ、城兵も今は前後の敵を防ぎ兼ね、自害する者もあれば猛火の中に走入て死する者もあり、向ふ敵と引組んで差違ふもあれば宮に注進するものもあり、大手の堀は忽ちに死骸を以て埋めたり、宮は此由聞し召し、赤地に錦の直垂に、緋威の鎧着て、龍頭の甲を召させられ、三尺五寸の長刀を小脇に挟み、屈強の兵共二十餘人前後左右に引き給ひ、群がる敵に切て入り、砂子を飛ばし、烟を

立て、東西を打拂ひ、南北へ追廻はし、爰を専途と取ひ給へば、寄手の大兵共此の二十餘人に切り立てられ、木の葉の散る如く四方へ颯と散りにける、宮は之れより藏王堂の大廣間に、悠々と引きあげ給ひて、軍兵と最後の御酒宴をば遊ばさる、此の戦に宮の召したる御鎧は、七筋の矢に射貫かれ、頬先きと二の腕に、三ヶ所の突傷、負はせ給へど、立ちたる其の矢をぬかせ給はず、流るゝ血潮もぬぐはせ玉はず、敷皮の上に立ちながら、大盃を三度迄て傾け給へば、木寺の相摸、四尺三寸の太刀先に、敵の頭を指し、通し宮の御前に畏り聲高らかに歌ふ様、戈鋌劍戟を降らすこと、電光の如く、盤石岩を飛ばすこと、急雨の如しと雖も、天帝の身には近かず、反て修羅彼がために破らると、太刀振りかざし舞ひたるは、漢楚の鴻門に楚の項伯と、頂莊と劍を抜いて舞ひしとき、樊噲庭に立ちながら、幕をかゝけて項王を睨みし勢

も斯くや覺ゆるばかりなり」

二段

去程に村上彦四郎義光は、餘り烈しく戦ひて、敵に矢十六筋を射付けられ、篋中の節や袖づりの節より折れて立たるは、枯野に残る玉萩の「風に靡くが如くなり」其の矢を抜くに暇もなく、宮の御前にひれ伏して、一ノ木戸は早や破れ、今二ノ木戸にて支ふれど、連日の戦に軍兵共も打死し、逆も籠城覺束なし、「敵の四方を圍まぬ中早く落ちさせ給ふべし、臣は恐れ多き事ながら、召させられたる直垂や、御物の具を頂戴し、御諱をも犯し参らせて、茲に戦死を仕らんと、忠義面にあらはれて、最と懇に申上ぐれば、宮は哀げに思し召し、争てか去る事のあるべきぞ、死なば處をかへずして、吉野の山に、

かんばしき名を残さんと宣へば、義光聞きもあへず、嗚呼淺間敷き仰せかな、昔漢の高祖が、滎陽に圍まれし時、紀信高祖の真似をなし、楚を欺かんと言ひたりしに、高祖は之を許したり、是等の御覺悟あられずして、天下の大事を能くも思し立たれたり、早く御物の具を下し賜はれて、御鎧の上帯を解きまつれば、宮はげにとや思召けん、御鎧も直垂も、脱かせ給ひて、義光に手づから渡して宣ふやう、我若し生き伸びたらば、汝が後生を吊らはん、又打死なしたらば、同じ冥土に伴ふべし、是今生の別れぞと、言葉少なく宣ひて、涙ながらに落させ給ふ、「義光はせきくる涙押へつゝ、木戸の櫓に走せ上り、大音揚げて名乗るやう、我は之れ、神武天皇より九十六代の孫、今の帝の第三の皇子、一品兵部卿、尊仁親王なり、逆臣ばらに惱まされ、恨みを泉下に報いたため、只今自害する所なり、是を見て、汝等が身に備へたる武運のき、

腹を切らん其の時の手本にせよと呼ばはりて鎧を脱げ下し錦の直垂に
 練貫の二重の袖を引きつくろげ兩脣脱いで一刀を左の腹にぐつと立て
 直一文字に引廻し朱に染みたる鴈を櫓の板に投付けて太刀先くわへう
 つ伏に伏して果てたる義光が最後の様こそ勇ましけれ敵兵是を見て大
 塔の宮は御自害召されたり御首給はらんと云ふ儘に四方の圍を打すて
 櫓の下に馳せ集る宮は之れと引違ひ天の河へと落させ給ふに敵五百
 余騎道を遮りければ義光の一子村上兵衛藏人義隆は父の教へに従ひて
 一人茲に踏み止り追ひ來る敵の馬の諸膝薙ては切りすえ平頭打ては刻
 落し右に突き左に蹴倒し飛蝶の如く飛び廻り猛虎の如く猛り立ち九折
 なる細道に五百余騎を引き受けて半時許り支へしが如何に義隆強のも
 のとは云へ身鐵石にあらざれば深手の矢疵十余所薄手のさづは數知れ

ず今は是迄とや思ひけん竹村に走り入りて腹掻き切りてぞうせにける
 此の隙に宮は虎の口をのがれ玉ひ高野山へ落ち伸び給ひしは村上父子
 が美吉野の花と散りしに其の功を立田の秋の紅葉葉の赤き心によると
 かや赤き心に依るとかや」

○鎌倉の宮

初 段

山の端出づる秋月も浮き雲のためには其の光を失ひ籬に匂ふ蕙蘭も狂
 風のためには其の香を敗らるゝ習ひあり建武中興の大業も足利兄弟の
 叛逆によりて成就せざりしこそ實に千載の遺憾なれ扱ても足利尊氏は
 護良親王の英資を思みそをなきものにせんとてや繼母准后に旨を含め
 親王不覲を圖るとそ密に奏聞せしめける帝逆鱗ましくて宮を流罪に

廻すべしと、中殿の御會にことよせて、それとはなしに招きよせ、馬場の御殿に幽囚の身となししこそ、墓なけれ、蜘蛛手結ひたる一間の中、泪の床に起きよし、誇ひ、如何なれば我が身元弘の始めには、武家のために身をかくし木の下岩が根に、露しく袖をほしかね、歸洛なしたる昨日今日、讒言聰明を蔽ひ、翠り、縹洩の辱めを受くるやらんと、知らぬ前世の報いまで、残す方なく、思し召し、虚名空しく立たずと聞けば、若の御心解し給ふ、時もやあらんと、頼まれぬ頼みを仇に頼むこそ、世にも悲しき極みなれ、さる程に、公議遠流と、きましかば、宮は御悲に堪へず、心の丈けを認めて、心よせたる女房して、急ぎ帝に奏聞せしめぬ、其文に申さる様、往にし承久の昔より、朝廷の政權武門に移り、專横殊に甚しかりければ、護良不肖の身を以て、慈悲忍辱の法衣をとぎ、怨敵降伏の堅甲を着け、君の爲めには身を忘れ、敵に向ふて死

を恐れず、晝は終日深山幽谷の中に臥して、岩上の苔を食とし、夜は通霄荒村遠里に出て、野路の霜を踏みくだき、龍の鬣を撫て、は魂を消し、虎の尾を蹈みては胸を冷せしこと、數知れず、元凶遂に誅せられ、龍駕都に立遷り、王政維新の世となりしは、御運の強きためとは云へど、又護良の忠功も、あづかりてこそありつらめ、中興の帝業尙未だ、一資の功を欠く際に、讒誣忽ち聰明を蔽ひ、罪責悉く護良が身に集る、こそ無念なれ、仰て天に訴れば、月日不孝の子を照さず、腑して地に寄すれば、山川無禮の臣を載せず、天地神明共に棄て、父子の情縁も絶え果てぬ、四方の國邊は廣くとも、身を容るべき場所もなし、申生死して晋國亂れ、扶蘇刑せられて、秦世傾くこそ、聞きつれ、古き例しを鑒みて、今日より後を推しはかり、護良が竹の園生の名を削り、柔の門邊の身とならしめ給へ、とぞ書きつけ、る、此文若し上聞に

達せしならば、父子の情御宥免の御沙汰もありけんものを、心なき傳奏共は、諸の怒りを恐れて、中間に止め置きしぞ、是非もなき、同じ宮中にありながら、上天所を隔絶し、訴願更に啓けずして五月三日といふ日には、惡逆無道の直義が手に渡されしぞ無慘なる、直義は五百余騎の兵を以て、路次を嚴しく警衛し、鎌倉に連れまつり、二階堂の土窟にぞ、深くも押籠め參らせける、南の方と申しつる、上臈一人より外は、附そふ人も荒蕪、日光さへも見へわかぬ、世も常闇の室の内、よこぎる雨に御袖濡し、岩の雫に御枕をも乾かしかねてぞ、六月許り過こし給ひし御心の、中こそ實にも哀れなれ。」

二 段

去る程に直義は、山の内を過ぐる時、淵邊伊賀を近づけて、密かに歸り出づ

る様、世は足利となりつべき時、も遠くはあらざれど、當家のために行末の難となるべき其のものは、「護良親王にておはすなり、」宮を死刑に行へと、朝廷よりの御許しは、未だ御受致さねど、好機兎角に逸し易し、御身は急ぎ二階堂、谷に參りて彼の宮を、なきものにせよと下知すれば、淵邊委細承り、土窟指して急きける、宮は此の時常暗の夜の如くなる土牢の中に、夜明も知らせ給はず、猶燈を挑げつゝ、御經遊ばしてぞおはしける、淵邊御輿を庭に据え、御迎に參りつる由申し、に、宮は之を御賢じて、汝こそ我を失はん爲めの使者ならめ、心得たりと立ち上り、淵邊が太刀を奪はんと、走りかゝらせ給ひしを、淵邊忽ち身をかまし、太刀取り直し、御膝の邊りをしたゝかに打ちにける、半年ばかり土牢の中に屈みし御身なれば、心は八十島にはやれども御足さへも自由ならず、遂にうつぶしに倒されしこそ、無念なれ、淵

邊上^に打^り腰^の刀^を引^抜き^て御^頸を^ばか^いん^とす^宮は^御頸^縮め^られ^刀の^鋒脚^へさ^れ押^せど^も引^けど^も放^させ^給は^ず淵^邊も^今は^必死^となり^力ま^かせ^に争^へば^刀の^鋒一^寸ば^かり^噫止^とば^かり^折れ^{たり}淵^邊差^添引^き抜^きて^御胸^元二^太刀^許り^柄も^通れ^と差^しけ^れば^流石^の宮^もよ^はら^せ給^ふや^がて^御頸^掻き^落し^御髪^掴み^て走^り出^て明^るき^所に^て見^奉る^に噲^ひ切^らせ^給ひ^つる^刀の^鋒口^中に^とま^り御^眼尙^生ける^が如^くなり^暴逆^無道^の淵^邊な^れど^其の^様に^畏れ^をな^しか^たへ^の藪^に投^げ棄^て立^歸り^しこ^を無^惨な^れ御^前に^候ひ^し南^の方^は此^有様^を御^覽じ^て余^りの^恐ろ^しさに^身も^すく^み手^足も^たて^あわ^しける^がや^がて^人心^つき^けれ^ば藪^の中^{なる}御^首を^辭に^取り^擧げ^給ひ^しに^御膚^は猶^冷えず^御目^も塞^がせ^遊ば^さず^元の^氣色^に見^えけ^れば^若し^夢に^てや^あり^つらん^夢なら^ば覺^むる^現

のあれかしと泣き悲しみしこそ道理なれ竹の園生の人となり忠勇無双の資を以て建武の大業を助けなし有らゆる辛苦をなめ給ひて空しく賊の手に墮れ鎌倉山頭今も尙遺恨の雲を残し玉ふ御心の内こそ悲しけれ二階堂の土窟の中に遺したる宮の御魂は後の世の大和男子の鑑として鎌倉宮の宮柱太しく建て豊さへ昇る旭にかゝやきて官幣中社と仰がるる明治の聖代こそめてたけれ明治の聖代こそめてたけれ

○島原合戦

初 段

國を申せば肥後の國在所を記せば割府と云へる扱て在所に赤星源氏綱明として弓取一人をはします其の比肥前に深く味方召されける其比年の

年○號○申○せ○ば○天○正○九○年○辛○巳○の○年○比○は○卯○月○七○日○と○申○す○に○肥○前○の○國○主○龍○造○寺○山○城○守○隆○信○方○よ○り○使○者○の○參○る○い○か○に○申○さ○ん○赤○星○殿○主○君○の○爲○め○誠○に○肥○前○に○味○方○召○さ○る○者○な○ら○ば○人○質○を○給○は○れ○と○の○御○誑○な○り○赤○星○言○葉○に○國○主○の○御○意○と○は○申○せ○ど○も○誰○を○か○質○に○參○ら○せ○ん○其○時○使○者○の○言○葉○に○承○れ○ば○年○は○十○四○に○成○ら○せ○給○ふ○松○若○殿○と○て○若○の○あ○る○よ○し○肥○前○屋○形○に○隠○れ○な○し○彼○の○若○を○質○に○給○は○れ○赤○星○殿○と○あ○り○け○れ○ば○赤○星○言○葉○に○若○を○一○人○持○つ○て○は○候○へ○共○彼○の○若○を○質○に○渡○し○て○は○跡○の○歎○き○は○如○何○せ○ん○去○れ○ど○又○國○主○の○御○意○に○は○叶○ふ○ま○じ○と○若○を○召○し○寄○せ○御○尋○あ○れ○ば○若○の○言○葉○に○某○國○に○あ○る○な○ら○ば○二○人○の○親○の○御○奉○公○又○は○國○の○替○り○と○な○る○な○ら○ば○質○に○渡○ら○ん○事○御○心○安○く○思○召○せ○頼○て○御○供○の○士○十○八○人○を○召○連○れ○肥○前○の○如○く○御○渡○な○さ○れ○佐○賀○の○屋○形○に○伺○候○有○る○こ○そ○中○々○物○の○哀○れ○な○り○未○だ○三○日○を○過○ぎ○さ○る○に○重○ね○て○使○者○の○參○る○い○か○に

申○さ○ん○赤○星○殿○承○れ○ば○年○は○八○つ○に○成○ら○せ○給○ふ○安○千○代○殿○迎○姫○の○有○る○由○肥○前○屋○形○に○隠○れ○な○く○未○だ○幼○少○な○れ○ど○も○彼○姫○を○質○に○は○給○る○物○な○ら○ば○若○の○所○は○國○の○如○く○に○返○す○べ○き○と○の○御○定○な○り○赤○星○言○葉○に○扱○て○は○中○々○若○を○一○人○出○し○て○さ○へ○跡○の○嘆○き○は○如○何○せ○ん○況○し○て○や○幼○少○の○姫○を○質○に○出○し○て○は○跡○の○嘆○き○は○猶○増○さ○る○去○れ○共○國○主○の○御○意○に○は○叶○ふ○ま○じ○と○姫○を○召○し○寄○せ○御○尋○ね○あ○れ○ば○姫○の○言○葉○に○二○人○の○親○の○御○奉○公○又○は○舍○兄○様○の○御○身○代○り○と○な○る○な○ら○ば○京○鎌○倉○迄○も○登○る○べ○し○況○や○肥○前○と○肥○後○は○近○き○間○と○承○る○質○に○渡○ら○ん○こ○と○御○心○安○く○御○思○召○せ○頼○て○女○房○六○人○十○三○人○を○召○し○列○れ○て○肥○前○の○如○く○御○渡○り○な○さ○れ○佐○賀○の○御○内○に○兄○弟○共○に○伺○ひ○候○有○る○社○何○よ○り○物○の○哀○れ○な○り○是○は○扱○置○さ○爰○に○又○肥○前○に○於○て○つ○れ○な○き○士○隈○部○左○馬○介○親○興○と○申○せ○し○は○三○と○せ○以○前○赤○星○殿○と○境○の○論○を○召○れ○し○が○痛○し○や○隈○部○殿○召○負○な○れ○ば○赤○星○殿○よ○り○三○百○余○所

を踏み取られ、無念至極はなかりけり、如何にもして赤星に腹切らせんと
 思ふ折節なれば、是れこそ能き折柄と心得、隆信殿に作り文を上げ給ふ。隆
 信殿は彼の文を披見せられ、赤星は肥前に兄弟の子供を質に渡し、其のう
 へながら隣摩に味方、肥前に二張の弓を引くとの文なれば、隆信大きに腹
 を立ち、其の儀ならば肥前に於ても、法度の仕置きに任せ、生磔と御意下る。
 痛はしや、兄弟は、肥前屋形に三日も置ずして、肥前と肥後の境なる、南の園
 竹の夜原に、送り有るこそ何より物の哀れなり、若の言葉に、兄弟共に御殺
 しあるならば、肥前屋形にて、只一太刀に御殺しあるべし、御殺あるとても、
 士が塙垣越へて隠れ忍びは致すまじ、士は壘の上に生れ来て、野原に死す
 るか本道とは承れど、夢にも知らぬ野原にて、面は月日に晒されて、長く浮
 名の立つと思へば、是れ一つのいかなり、只今敵と引組て、討死すものな

らば、箇程に物は思ふまじ、いかに申さん隆信様、某は男の身にて、御殺ある
 も苦しからず、幼少の妹は、國に御返し給はれと、日には三度の詫をなす、姫
 の言葉に、身らは女の身にて苦しからず、兄が所は赤星か家の世繼の事な
 れば、國に御返し給はれ、隆信様と、日には七度の詫をなす、隆信御定に、如何
 に兄弟、科なき隆信を恨み給ふな、謀反心の父の赤昔を恨み給へと、御意下
 る、姫の言葉に、科なき隆信様も恨み申さぬ、況てや父の赤星にも恨み申さ
 ぬ、中より作り文を上げたる隈部殿こそ、今生後世の恨なれ、若の言葉に、如
 何に安千代、何某の子孫と云ひて、女にこそは生まれ来て、人を恨みては、如
 何せん、死出の山三途の大川、左京が橋迄も、一つ道をと、喜び給ふこそ、哀れ
 なり、若の其日の装束には、先肌よりは白地練絹、上には紫染に、ひだ色の、く
 かり小袴しつかと召され、十八人の士を御側に召れ、いかに旁々鳴を静め

て聞き給へ、某兄弟は隆信様より身に覺へなき科に上意の宣ふなり、迎も上意は逃るまじ、御身達は暇とらする、何國の様にも落行て、我に増したる剛き主人を頼み給へと仰せける、十八人の士は頭を地に附け、皆一同に言葉を揃へ、嗚呼情なき、若君様の御誼やな、士が強き時は主人と頼み、今弱きとて君を振捨る法やあらん、兎にも角にも若君諸共にと申上れば、若君鏝に喜び、十八人の士に、御盃を給はりける、爰に又姫の其日の出立には、先肌よりは十二小袖を召されける、上着は其頃、肥後に流行りし白糸小袖召し重ね、たけと一世の黒髪は、月の輪形に結ひ給ひ、まげの糸にてみふし留め、頼て六人の女房を御側に召れ、如何に旁々嗚を静めて聞き給へ、自ら共兄弟は、身に覺えなき科に上意の宣ふ也、迎も上意は逃るまじ、御身達は千に一ツも、隆信様より御暇給はる物ならば、國の如くに落ち行きて、二人の親

の御前に参り、自分兄弟斯々なりたる有様を、一事も残らず申上よと仰せける、六人の女房達は、唯涙に咽びて、誰も御返事申す人もなし、痛はしや、彼れ兄弟は、頼て檢使を御側に召され、いかに檢使の方は、たの板は古より、定まる法、西へ向るが、本道とは承れど、某兄弟は肥後の方へ向け給はれ、左もあらば、割府の在所に二人の親の有ると思へば、吹さくる風までなつかしや、いかに檢使の方と宣へば、檢使の方聞き召され、當城は往古より傳はる儀式は、たの板は、東に向るは天下に恐あり、御身迎兄弟とても、西へくとありければ、痛はしや、兄弟は、もはや力に及ばず、左右の手を差上げ、肥後の方を打眺め、嗚呼なつかしや、割府の御所と、七度招きては、たの板に召されけるこそ、中々物の哀れなり、彼兄弟は土の義理なれば、三日が間は、小歌拍子にて過させ給ふ、痛はしや、姫君は、未だ幼少の事なれば、四日に當る西の